

2019年度 芝浦工業大学大学院

修 士 論 文

題目：出会われる空間へ向けて

キルギス・タイにおける分解空間の様態に関する研究

専 攻 理工学研究科（修士課程） 建設工学専攻

学籍番号 ME18133

ふりがな よしだ ひでし

氏 名 吉田 英志

指導教員 清水 郁郎

出会われる空間へ向けて

—キルギス・タイにおける分解空間の様態に関する研究—

目次

目次	2
序章 出会う空間	4
0-1 研究背景・目的及び先行研究の検討と分解空間の定義 4	
0-1-1 研究背景・目的	4
0-1-2 仮設的空間の先行研究の検討	8
0-1-3 ハイデガーの道具概念	10
0-1-4 分解空間の定義	11
0-2 調査方法	12
0-2-1 文献調査	12
0-2-2 フィールド調査	12
1章 アンダー・コミュニケーションと空間	13
1-0 1章の構成	13
1-1 アンダー・コミュニケーションとは何か	14
1-1-1 目の前の存在と「出会う」こと	14
1-1-2 「生きる」こと	17
1-1-3 均質性への抵抗と「生きる」	24
1-1-4 UCの定義とアンダー・スペースモデル	26
1-2 アンダー・スペースモデルと仮設性	27
1-2-1 永遠性と仮設性	27
1-2-2 方丈庵の仮設性	30
1-2-3 アンダー・スペースモデル	36
2章 建築以下身体以上の存在と分解空間	37
2-0 2章の構成	37
2-1 建築以下身体以上	37
2-1-1 「建築ではないのかもしれない」に含意される視点	37
2-1-2 移動するものたち	43
2-2 「仮」の暮らしに潜む空間的性質と分解過程	68
3章 フィールド調査-キルギスの住居とタイの屋台-	73
3-0 3章の構成	73
3-1 フィールド調査-キルギスの住居・ボズユイ-	73
3-1-1 キルギスについて	73
3-1-2 敷地概要と用語について	75
3-1-3 伝統的ボズユイについて	77
3-1-4 宿営地の構成要素と空間構成	78
3-1-5 住居の空間構成	86
3-2 フィールド調査-タイ・チェンマイの屋台-	94

3-2-1	タイ・チェンマイについて	94
3-2-2	チェンマイの屋台活動概要と敷地概要について ..	95
3-2-3	チェンマイ門広場の構成要素と時間帯別空間構成	99
3-2-4	屋台活動の空間構成	104
3-3	空間的性質の抽出・図化・評価	112
3-4	出会われる空間	127
4 章	設計	128
4-1	敷地概要とプログラム	128
4-2	設計	132
終章	総括	141
参考文献	142
謝辞	143

序章 出会う空間

0-1 研究背景・目的及び先行研究の検討と分解空間の定義

0-1-1 研究背景・目的

一時的なものに見る何かと何かの「出会い」に興味がある。一時的という言葉を経験的に考えると、例えば遊牧民住居や路上屋台、災害用住宅など様々なシチュエーションに見られるような、ある時間的スパンでなくなることを前提に作られる仮設性をもった空間が思い浮かぶ。しかし、そのような仮設性をもつ空間に見られるような時間的スパンでなくなるという切り口以外にも一時的な空間性は見られるように思う。それは変化を受け入れるものである。例えば蟻鱒鳶ル¹(図1)のように連続する組み立てを通した変化を受け入れる建築物は常設という言葉では語れない。確固たる形を有しないものに対して、時間的な揺らぎを感じることで一時的な質を感じるのであって、これはつくるという活動それ自体に時間的質を見ることによる。大きくは万博施設のように解体を前提にする仮設性をもつ空間がある一方で、その一時的な質は私達の身体を使った身振りを通して、変化を受け入れる建築にも現れる。ここに一時的なもののダイナミックな面白さがあり、空間の仮設性を考えることは建築と人の間の様々なありようの探求へと繋がるはずである。市民-行政間における建築的实践から、身振りとの間に幅広く姿を現す仮設性に対して、どのような言葉を用い説明できるだろうか。例えば私たちが普段の生活でも目にする雨やどりという行為は、一時的な現象であるが故に身体の仮設性と称するものの端部が見え隠れする。その身体の仮設性をテーマに扱った歌手さだまさしの曲は、空間の仮設性を考える上で重要な視点を示唆するように思えてならない。



図1 蟻鱒鳶ル 筆者撮影



図2 「風見鶏」 さだまさし 1997

それはまだ私が神様を信じなかった頃
九月のとある木曜日に雨が降りまして
こんな日にすてきな彼が現れないかと
思った処へあなたが雨やどり
中略
いきなりこんな大事なお話を
信じるというのが無理な事です

¹ 蟻鱒鳶ル 設計/岡啓輔

だってまさかあなたが選んだのが
こんなに小さな私の傘だなんて
あわてて駆け出してしまった胸の鼓動を
呼び戻すために少しだけ時間をください
涙をこっそり拭う間だけ時間をください
そしたら²

さだまさしは、雨やどりという一時的な現象に人との「出会い」をみた。前半の雨やどりという言葉は、出会いのメタファーとして後半の小さな私の傘という詩の中に建ち上がる。雨やどり、それは一時的な偶然による滞在として起こるものであるが、故に詩として記述されるほどのパワーを持ち主題化する。最後の「そしたら」という言葉には、雨やどりが終わりそれぞれの方向へと向かうものたちの動きが垣間見える。一時的であるが故に、そこには省略された前後の文脈が必ず存在し、私たちの思考はその間を行ったり来たりする。そして一時的な身体のあるようとしての身振りに見るこの「出会い」という視点は、雨やどりをする人とその周りを漂う現象との関係においても同様に展開され、空間の仮設性へと繋がっているように思える。



図 3 雨宿り中の人 出典 Flickr

雫の滴る軒下からは、いつもと違う街の風景が見えます。肩をすぼめて小走りに通り過ぎる人々や、雨宿りの軒先からバスに駆け込む人々、きゃーきゃー騒ぎながら手を頭のうえに当てて走り去る子ども、今ぞとばかりにファッショナブルな傘を大きく広げて歩くご機嫌な女性、これとは対照的に、かつては傘であったろうと思われる支柱付きの布切れを悠然とかざして歩く婦人、中にはビニールの鞆を帽子のようにかぶって歩く人々や、買い物袋を肩の上に器用に載せて道を急ぐ人々もいます³。

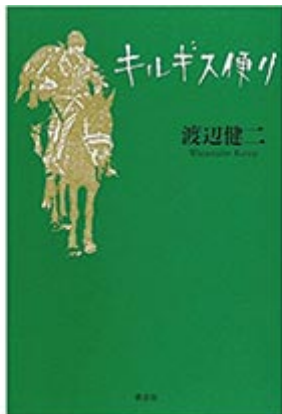


図 4 キルギス便り 渡辺健二 2001

手を頭にかぶせるような即興的な身振りとの関連が見られる一方、この動的な視点には空間の問題が含まれる。雨やどりを可能にした場所が、身体を受け入れた結果、「出られる」空間となる(図3)。渡辺は著書の中で、雨やどりの軒先からの風景を主題に、空間との「出会い」を描写した。軒先を間借りした視点からは、普段見落としていたものに思いをはせる空間がある。身体の仮設性としての身振りは、このように場所との関係を浮き彫りにする視点を、間借りした結果起こる「出会い」という言葉を通

²もうひとつの雨やどり 作詞作曲さだまさし 風見鶏

³キルギス便り p8 渡辺健二

し投げかけ、それは空間の仮設性へと繋がる。ここから、身体の仮設性は何かと何かの「出会い」を生み、それは例えば間借りによって一時的に「出会われる」空間を生むものであると言える。即興的な身振りも、突拍子もない何かとの出会いが故に起こるものである。このように、身体の中に何かとの「出会い」という視点を持ち込むことで、空間の仮設性は「出会われる」空間として私達の前に出現する。間借りすることについて少し考えてみると、それはある場所に立ち止まることである。イーファー・トゥアンは立ち止まるという行為の中に、場所に対する感情の深さを強める働きを指摘する⁴。人はそこで起こる親密な経験を通して、ある特定の場所に対して愛着を抱くようになる。そしてこの経験を通じた場所をトゥアンは根拠地として紹介する。根拠地で立ち止まった人は、その場所に対しての愛着と出会うのである。根拠地は、例えば家としてあり、病気を患った人は家での看病を通して、家への愛着を育む。たとえ一時的であっても、立ち止まるという事実は感情を生む。仮設的な根拠地は、間借りされた場所としての場合もあれば他の場合もあるだろう。一方、建築的な現象としての遊牧民住居や路上屋台などは、場所と空間の「出会い」による空間の仮設性と呼べるものに関わるはずである。そこには、ある場所をある空間が間借りするという視点が生まれ、本研究で問題にする「出会い」による空間の仮設性は、このような場所と空間の「出会い」という視点抜きには語ることはできない。なぜなら、身体と場所の「出会い」が雨やどりのような「出会われる」空間を生むように、場所と空間の「出会い」が仮設性をもつ空間を成り立たせると考えるためである。間借りした上で一時的で仮設性がある根拠地をつくるこれらの空間では、どのような形で人-もの-場所の「出会い」があり、どのように「出会われる」空間が作られるのか。



図 5 空間の経験 イーファー・トゥアン 1993



図 6 遊牧民の住居 筆者撮影



図 7 暴力と輝き アルフォンゾ・リングス 2019

ゲルは定期的に分解することが出来る、常に間に合わせの家屋である。しかしそこにはその氏族、先祖、家族の伝統や技芸や歴史が宿っているのだ。遊牧民の野営地は人びとが行き交う舞台である⁵。

哲学者のアルフォンソ・リングスは遊牧民の野営地をこのように記述し、その行き交いの中に何かとの「出会い」を見た。根拠地である野営地は、遊牧民にとって一時的な舞台であり、「出会い」の場であった(図6)。このような空間のありようを探ること

⁴空間の経験 p242 イーファー・トゥアン

⁵暴力と輝き p37 アルフォンソ・リングス

で、人-もの-場所の関係を考えてみたい。それは建築設計における新たな視点をもたらしてくれるはずである。

本研究の目的は空間の仮設性に見る、人-もの-場所の出会い方の考察を通した「出会われる」空間の探求である。空間の仮設性に見られる「出会われる」という現象、それを現代建築における処方箋として捉えることで、建築設計における新たな視点の獲得を目指す。この新たな視点について、アンダー・コミュニケーションという概念を援用して説明する。レヴィ＝ストロースは、現代の課題としてオーヴァー・コミュニケーション社会化していることを挙げた。オーヴァー・コミュニケーションとは遠い地での情報を他の点から受け取ることができるものである。オーヴァー・コミュニケーション社会で行われる、文化を単に消費する姿勢を批判的に捉えた一方で、アンダー・コミュニケーションの状態において文化は何かを生み出し得ると述べた⁶。ここで言われていることをかみ砕くと、オーヴァー・コミュニケーションは非対面型であり、アンダー・コミュニケーションは対面型である。そしてアンダー・コミュニケーションにおいて行われるのは、他の点からの情報に左右されないという意味での目の前の存在との「出会い」である。レヴィ＝ストロースは対面型のコミュニケーションを重要視したが、ここに空間の仮設性を問う可能性を見たい。後述するように仮設性を孕む空間は、そうであるが故に目の前の存在とのやり取りが欠かせない。ある場所に人が間借りできる余地を見出すことで雨やどりするのと同じように、遊牧民は野営地の状況を鑑みて家を建てる。「出会われる」空間はアンダー・コミュニケーションにおいて可能なものであり、アンダー・コミュニケーションにおいて成り立つやりとりは時に仮設性を持つ。本研究ではこのような視点から、アンダー・コミュニケーションのもと起きる人、もの、場所の「出会い」を観察・調査していくことで、新たな「出会われる」空間を得る手法を探求する。

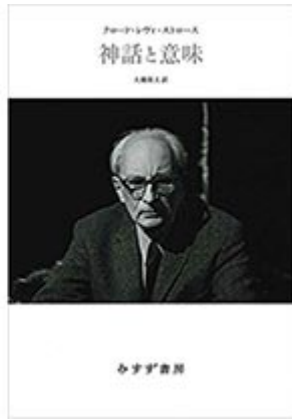


図 8 神話と意味 クロード・レヴィ＝ストロース 1978

⁶神話と意味 p27 クロード・レヴィ＝ストロース

0-1-2 仮設的空間の先行研究の検討

仮設性をもつ空間（以下仮設的空間）を対象とした先行研究は少なからずある。仮設性についての検討は後述するとして、以下ではまずそれらを対象とした先行研究の検討を行う。

仮設的空間としての住居に着目したのも多く、本研究でも中央アジアの仮設的空間であるボズユイと呼ばれる天幕住居に着目した調査を行う。

村田は、ユルタと呼ばれるような遊牧民住居を天幕と定義づけ、そこに方位や位置による一定の規則があることに言及した[村田 1992]。村田の定義では、移動可能な住まいのうち骨組みと被膜で構成されるものを天幕としている。またこの研究で村田は、仮設性という言葉在住まいの原型の表出に結びつけ言及している。ここでは天幕を大きく2系統に種別している。1つは北アフリカのベドウィンや中東の遊牧民に見られる矩計平面であり、もう一つは中央アジア、ユーラシア・ステップの遊牧民の天幕に見られる円形平面である。ボズユイもこの円形平面の住居である。村田の研究からも分かるように、仮設性と身振りは結びつきが強く、主体的な構築実践の内に人は小宇宙的な世界観をつくってきた。それは中心と周縁、右と左、奥と手前により男女の居場所が違うなどのコスモロジーとしてあり、そこには家の象徴性と身体の関係がある。天幕の起源は約3万年前とされるが[村田 1992]、そこに言及し意味を探ることは人間活動の根本に迫るものと言ってよいものであり、その点で村田の先見的研究は評価できる。しかし村田は、仮設性という言葉に着目こそするものの、例えばどのように場所を間借りするかなどには触れていない。他に天幕に着目するものでは、野村らの研究がある。野村らは中国内モンゴルの天幕に着目しその生活実態を調査した[野村・中山 2008:1735-1742;2010:1917-1923]。そこでは、行政の介入により変化する天幕の使用状況に言及している。牧畜民の間に広まった固定家屋と天幕の関係は様々であり、人々は自らの生活状況に合わせて天幕を有効活用している実態が分かる。野村らは天幕について、第1に生活の場であるため1つの空間で就寝・食事・信仰等多様な機能を持った居室としている。しかし、その多様な機能を持った居室がどのような身振りで使われているか具体的には触れていない。本研究ではこの点、一時性を孕む仮設的空間における身振りとの場所の関係にも着目する。

住居以外の仮設的空間を対象としたものでは、市場や街路空間、路上の屋台活動に言及するものがある。本研究でも東南アジアの市街地における屋台活動に着目した調査を行う。

市場や街路空間に着目するものでは、フランス・パリやトルコ・イスタンブールでの高木・鶴田、カンボジア・プノンペンでの脇田らのものがある[高木・鶴田 2007;脇田・白石 2008:1939-1945;2010:587-594]。これらの研究は市場の空間構成について言及しており、高木らは市場の都市空間を変化させるものと捉え、そこに賑わいの創出を見る。高木らは市場を大きく2つの形態に類型し、1つは線状に連なるもの、もう1つは面的に広がるものであるとした。脇田らの研究では、市場の中でもより仮設性の高い市場形態に着目し、1つ1つの店舗の具体的な空間構成にまで言及した。ここで言う仮設性とは、構造的な変化による機能性の拡張を意味したものであり、部材の組み立て活動などによるものである。ここでは商品の陳列方法における具体的な振る舞いとして、吊るす・立て掛ける・置く・重ねる・並べるといったものが挙げられている。また店舗空間からの物品のあふれ出しに言及し、通路空間の変化を具体的に述べ、仮設性によるフレキシブルな空間構成の在り方を見出した。その上で通路における行為を通行・作業・会話・遊び・店番・休憩と類型しそれぞれを通行・業務・生活に関するものとした。ここでは、仮設性により通路空間が業務・生活の場としても機能していることを述べた。本研究では、脇田らの視点に依拠しながら通行・業務・生活に関わる行為をそれぞれ既存の場所と相互に関わり合っているものとし、複層レイヤー的に見たときの人-もの-場所の出会いを通し仮設的空間に言及する。

また、街路空間の活動に言及したものでは日本・千葉での奥平らやタイ・バンコクでの坪井らのものがある[奥平・郭・斎藤・北原 2008:161-167;坪井・北野・渡邊・秋山・渡邊 2010:93-102]。奥平らは複数のパラソルによる仮設的空間に着目し、それによるアクティビティ生成に言及した。その中で、歩行者は仮設的空間による刺激により積極的な体験をしていることを述べた。また坪井らは、街路空間における屋台・露店活動に着目し、それらを日常生活行為と一体となったものとしている。

仮設的空間の中で路上の屋台活動に言及したものでは他に、中村らのものが挙げられる[中村・古谷 2010:595-602;2011:583-591;2011:755-762]。中村らは、非合法性と呼ぶ性質から起こる屋台間のコードの存在に言及し、屋台活動の様態を記述した。これは実践者の具体的な行動をコードで類型化することで、特定の見えない境界を示すものとした点で示唆に富むものである。

0-1-3 ハイデガーの道具概念

本研究では、「出会われる」空間の設計手法を探るため、ハイデガーの道具概念に依拠した分解空間と定義するもののフィールド調査を行う。これは分解と組み立てを伴う仮設的空間に適応可能なものである。この分解空間を定義する上でハイデガーの道具概念の整理を行う。ハイデガーは存在一般の意味の究明を行う際、私たちの身の回りにある道具の存在を手掛かりに言及した。



図 9 ハイデガー「存在と時間」の構築 木田元 2000

一般に道具というものはそれだけ孤立して存在するということはない。金槌は釘を打つために、釘は板をとめるために、といったふうに道具は〈……のために〉という形かたちでたがいに指示し合い、一つの連関をなしている⁷。

木田は著書の中で、ハイデガーの道具概念をこのように簡潔にのべたが、ここから道具とは、〈……のために〉という相続関係の一連の総体としてあることが分かる。様々な道具はこのようにして、道具それ自体では存在しないものとして、存在論的に私達の身の回りにある。またハイデガーはその流れで、最初に出会われる道具は部屋としている。



図 10 存在と時間 マルティン・ハイデガー 1927

一番先に出会うものは、主題的に把握されはしないが、部屋である。そしてそれも、幾何学的空間の意味で「4つの壁の間」としてではなく一住む道具としてである⁸。

このように、道具という概念は手もとにあるものを基本としながらさらなる周辺へと拡張する。それは道具が、「いつもほかの道具との相続性にもとづいて存在している⁹。」からである。本稿ではこれに依拠しながら身体性を拡張したものとして道具を捉える。そのような道具たちは相関的に他の存在と持ちつ持たれつ関係を結ぶ。ハイデガーが部屋の存在を一種の道具と位置付けたのと同様、本稿で対象とする仮設性をもつ空間を身体的外部に存在する道具的なものとし、そのような空間と関連して存在する場所もまた、道具的に扱われると仮定する。

⁷ハイデガー「存在と時間」の構築 p55 木田元

⁸存在と時間上 p162 マルティン・ハイデッガー ちくま学芸文庫

⁹存在と時間上 p162 マルティン・ハイデッガー ちくま学芸文庫

0-1-4 分解空間の定義

本研究では「出会われる」空間の設計手法を探るうえで、上述のハイデガーの道具概念に依拠した分解空間と呼ぶもののフィールド調査を行う。本研究では、仮設的空間において、アンダー・コミュニケーションを通した場所への主体的な関りの下に道具的連関が見られるものを分解空間と定義し、分解空間の一見身勝手に独特の様相は、恣意的な空間の創出を起点とするのではなく、空間の分解を念頭に入れながらものや場所を扱うことで空間が組み立てられるためであると仮定する。ここに、仮設的空間と分解空間を分けて考える意義がある。空間の分解とは、端的に言えば分解という行為を通した場所の現状復帰活動である。それは仮設的空間としての住居や路上屋台の活動に見られるような、主体である実践者や客体である協働者による、ある場所から-立ち去る-という最終目標へ向けての、分解を通した関りを含意したものである。ここでの協働者とは、人のみならず、車などのものや動物も含まれる。本研究では、分解空間の構成要素を、人を基点にした行為からものや場所に広がる関係性の総体として扱うが、これはハイデガーの道具概念に依拠した関係性で空間が組み立てられると仮定するためである。

また、分解空間における諸実践を道具的連関に照らし合わせたとき、消費のためのものを生計のための道具として扱う。分解空間において実践者は一つ一つの要素を〈……のために〉にあるものとし、別の何かに関連付ける。その結果として現れる分解空間では潜在的有用性-まだ何かの役に立つこと-を見出す対話が人-もの-場所との間に発生し、そのやり取りの中で空間が作られる。例えば分解空間の構築過程において、実践者は既存敷地のある一定の範囲をもの置き場とする。既存敷地に対し、ものを動的、道具的に使いこなすことで、ものと敷地である場所が「出会う」のだ。他者からすれば時に勝手気ままとも言える敷地の使いこなしは、実践者固有の道具連関を含むが故に極めて個人的なものである。この個人的な連関としての道具的空間実践を介さない、非身体スケールを持つ万博施設や災害用住宅のような仮設的空間には-立ち去る-ということを念頭に置いた中で分解を通した主体的実践がないため分解空間とみなすことはできず、本稿の調査では扱わない。

分解空間においては、目の前にあるものを分解し、または分解されたものを再構成して空間が作られる。一方通行では完結しない対面相互関係をもつものや場所と結ぶことが含意され、それ故に分解空間はアンダー・コミュニケーションを可能とする。そし

てそこでは積層した関係性による複層レイヤー的な人-もの-場所の出会いがある。分解空間における一見単調な実践はある固有の道具的連関により下支えされ、その在り方は分解空間ごとに異なる。そのような中で、人-もの-場所との出会い方にはある程度の一時性や即興性が含まれており、それが一見すると身勝手とも受け取れる空間の様相へと繋がっていると予想される。

0-2 調査方法

以下に本研究での調査方法を述べる。

0-2-1 文献調査

本研究では、「出会われる」空間の設計手法を探求するために、分解空間における人-もの-場所の出会い方のありようを調査する。その調査をレヴィ=ストロースのアンダー・コミュニケーションという概念に依拠し行うため、その概念定義を文献調査から行い、その概念を基点に展開される空間をアンダー・スペースモデルとする。

0-2-2 フィールド調査

本研究では、文献調査にて定義を行うアンダー・コミュニケーションに依拠した空間、アンダー・スペースモデルを適応できるものとして、仮設的空間である天幕住居と屋台の活動を選び、実際にフィールドに赴いて調査を行う。その際、「分解し立ち去る」という主体的実践を念頭においた、ものや場所への空間的操作を、一時性、即興性等に焦点を当て調査する。またそれらを形作る人-もの-場所の関係の中の空間的性質を出会われる空間の設計手法として抽出、図化を行う。本研究で扱う資料は2019年3月9-17日、8月5-8日、8月16-22日の調査で収集した。調査内容は配置図平面図調査(14件)及び住居・屋台の実測調査(1件ずつ)、実践者への質問調査(7人)などである。

1章 アンダー・コミュニケーションと空間

1-0 1章の構成

本研究では「出会われる」空間の設計手法を探るうえで、人もの場所の間の一時的関係性としての出会い方を問題にする。その出会い方のありようを、人類学者レヴィ＝ストロースのアンダー・コミュニケーションという概念に依拠して考えていきたい。そのため、まずはレヴィ＝ストロースが述べたアンダー・コミュニケーションという不確かな言葉の意味を探っていく。レヴィ＝ストロースが著書「神話と意味」の中で言及したアンダー・コミュニケーションは、その断片的な語り口により著書を読むだけでは全容を掴み切れず、定義付けも行われていない。第1章では、レヴィ＝ストロースに依拠するアンダー・コミュニケーションについて定義付けを行った上で、それに依拠する空間性をもつものを便宜上アンダー・スペースモデルとする。アンダー・スペースモデルに適応できるものは空間の均質性への抵抗を含意するとし、アンダー・スペースモデルとして一部の仮設的空間を挙げる。このアンダー・スペースモデルを探ることは、均質性への抵抗の探求を通して新たな「出会われる」空間を考えることに繋がる。

1-1 アンダー・コミュニケーションとは何か

空間の均質性への抵抗を考える上で、レヴィ＝ストロースが述べるアンダー・コミュニケーションの概念はとても興味深いものである。第1節では、アンダー・コミュニケーションの定義付けを、社会学者ジョン・アーリの言説や多木浩二と布野修司の生きられた空間の概念、ハイデガーの「詩人のように人間は住まう」と題する講演の内容などを引用しながら行う。またその定義に依拠するものの見方でみた空間を便宜上アンダー・スペースモデルとし、アンダー・スペースモデルを考えることは均質性の問題へのアプローチになることを示す。

1-1-1 目の前の存在と「出会う」こと

現在私たちが脅かしているのは、オーヴァー・コミュニケーションとでも呼びうるものでしょう。つまり、世界のある一点において世界の他の部分で何が行われているかをすべて正確に知りうるようになる傾向のことです。ある文化が、真に個性的であり、何かを産み出すためには、その文化とその構成員とが自己の独自性に確信を抱き、さらにある程度までは、他の文化に対して優越感さえ抱かねばなりません。その文化が何かを産み出しうるのはアンダー・コミュニケーションの状態においてのみなのです。私たちは今、単なる消費者になり、世界のどの地点のどの文化から得られるものでも消費できるけれども、独自性をすっかり失ってしまうのではないかという展望に脅かされています¹⁰。

文化人類学者のレヴィ＝ストロースは文化との関係においてオーヴァー・コミュニケーション（以下OC）とアンダー・コミュニケーション（以下UC）の2つのコミュニケーションを挙げ、これに続いてカナダ西部のガンギエイの神話を引用しながら科学的思考と神話的思考の共通点として、2項性の問題があることを述べた。コンピューターが持つイエスかノーかの2項操作という概念が神話の中にも見出せることに触れつつ、それは科学的思考を私たちが持つようになったが故に神話的思考の一側面を理解できるのだとする。そのように、科学的思考と神話的思考は断絶するものではないことを述べたが、ここにOCとUCの関係の比喩が見て取れる。彼が言うのは、OC的な思考とUC的な思考は対立の極致にあるのではなく、一方があることで他方が成

¹⁰ 神話と意味 p27 レヴィ＝ストロース みすず書房

り立つ、持ちつ持たれつの非断絶の関係があるということである。「進歩は、相違を通してのみなされてきました¹¹⁾。」と述べるのはこのためであり、この2つのコミュニケーションの相違を確かめることは無駄な事ではないだろう。その上で、レヴィ＝ストロースは2つのコミュニケーションに対してUCにおける創造性に言葉少なに言及している。この前提には、もちろん彼が野生の思考と呼ぶ無文字社会の思考があるだろうが、ここでは立ち入った話は避け、OCを認めつつも同様にUCにおける創造性を認めているということを確認するに留める。さて、この上で消費という観点から彼が言及したのが、近代化の過程の中で生じてきた時間/空間の問題である。OC的な消費の中で私たちは時間/空間の関係を変容させてきた。それについて、社会学者のジョン・アーリの言説を繋げることで考えてみたい。彼はTVのようなメディアの発達に依拠しながらこう述べる。

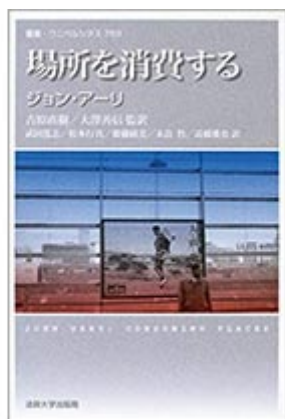


図 11 場所を消費する ジョン・アーリ 2003

断片的な話の寄せ集めが地理的な脈絡なしに社会生活へと侵入し、またその社会生活を形作るという、ほぼ文字通りの時間-空間の圧縮がそこに見られる¹²⁾。

ここに、レヴィ＝ストロースが述べたOCへの解釈の手助けとなる言葉がある。TV的な消費に代表されるような時間/空間の圧縮である。「世界のある一点において世界の他の部分で何が行われているかをすべて正確に知りうるようになる傾向」とはこのような時間-空間の圧縮に他ならない。本来私という個人の存在が知り得ることは、目の前に存在するもののことであるのだが、近代化における科学の発展はこの目の前の存在との出会いを飛ばし、他の点の存在を近づける。ジョン・アーリはさらにTVのザッピングにおける時間と空間の断片化に言及しながら、そのような中で見せられる広告を前後の文脈を欠いた表現と言う。そしてこのような視覚メディアの加速化と断片化が「難解な書物を始めから終わりまで読み切るような集中力と根気を次第に困難にする¹³⁾。」と述べる。ここでもOCに対するUCの関係が言及されている。ジョン・アーリが述べたのは、OC的な時間/空間の加速化と断片化による圧縮が目の前の存在との出会いを難しくしているということだ。そしてそれを「刹那的な資本主義」の成長と呼ぶ¹⁴⁾。筆者の身の回りのことで思い返してみると、この



図 12 SNS 出典 mmdl.jp/investigation/detail_1772.html

11 神話と意味 p27 レヴィ＝ストロース みすず書房
 12 場所を消費する p38 ジョン・アーリ 法政大学出版局
 13 場所を消費する p38 ジョン・アーリ 法政大学出版局
 14 場所を消費する p38 ジョン・アーリ 法政大学出版局

ことはとても腑に落ちる。筆者の世代は所謂 SNS 世代である。mixi に始まり、facebook や Twitter など、他の地点での出来事を想起する手段には事欠かなかった。SNS を確認し、今居る場所から遠い地へ思いをはせることも多々あるが、それはどこに居ても、誰と居ても起こり得る。人と居る時に SNS を確認しては、目の前の存在から視線を逸らすこともしばしばである。このような状況をレヴィ=ストロースは想像したのだろうか。出会いが成り立つのは、何も UC に限ったことではなく、目の前の存在を飛ばした上で遠い地での出来事と出会うこともあるのである。

しかしレヴィ=ストロースが言ったものがこの時間/空間の圧縮の問題に繋がるとして、OC に対置できるのは目の前の存在との出会いのもとにある UC であり、それはアーリが「利根的な資本主義」と呼んだものに寄りかかりつつも抵抗する 1 つの在り方と言えるだろう。そのような意味で彼は、「その文化が何かを産み出しうるのはアンダー・コミュニケーションの状態においてのみなのです。」と述べたのではないだろうか。ここで、この UC としてある、目の前の存在との出会いを通じた抵抗はいかに可能かという問いが出てくる。次項ではこれを、多木浩二の生きられた家とは何かという問いに繋げることで考えてみたい。

1-1-2 「生きる」こと

多木浩二は生きられた家とは何かという問いの中で、日本の家に物質的世界と感覚的世界の2つの世界を見た上で、「生きる」ということについて語った。



図 13 生きられた家 新訂版 多木浩二 2019

保存の良い古い民家、あるいはさほど古くなくても十分美しい家においてまず発見するのはこの感覚的世界である。それらは、視覚的というより触覚的な世界、たとえば土間の叩きの感触、太い梁、あるいは磨きぬかれた1枚板の板戸や、土蔵の清潔な白さ、そこら中にある民具の快い手ざわりである。日本の家のひとつのたのしきは畳のひいやりとした感触にある。それらは意味の解釈には決して入っていかない以前に1種の快樂を味わわせるのである¹⁵。

このようにして、触覚的にみるものを感覚的世界と呼び、それに対して物質的世界を対置する。多木の言う生きられた家はこのような感覚的世界をもつものである。

感覚的刺戟は木や石や土など物質的なものからきて、私のその場への住みつき方-それを私は「知覚」的活動とよぶのだが-をひきだすのである。同じ土でも叩いたものと、ただ軟らかいだけのものとはちがう。同じ木でも白木と漆をぬったものとはまたちがった感覚をもつ。ステンレスやプラスチックでも同じである¹⁶。

ここに、触覚による感覚的世界という目の前の存在との出会いを通した関係を「知覚」的活動として言及していたことが伺える。また多木は続けてこう述べる。

家の物質的世界と呼んでいるものは、それらの物質の表面の性質に依存している。つまり眼で表面にたわむれ、表面の触覚を織りあげるのである。感覚的世界はその快樂に終始する¹⁷。

物質的世界と感覚的世界の相互関係を多木は見逃さない。物質的世界の表面との出会いがあるからこそ、触覚を通じた感覚

¹⁵生きられた家 p117 多木浩二 青土社

¹⁶生きられた家 p117 多木浩二 青土社

¹⁷生きられた家 p118 多木浩二 青土社

的世界が成り立つのだ。ここに、レヴィ＝ストロースの述べるUCの質を見ることができる。UCは物質的世界-表面としての目の前の存在-と、感覚的世界-触覚による目の前の存在への接近-による両者の出会い-「知覚」的活動-を通した上で成り立つ。多木の言う物質的世界と感覚的世界の相互関係そのものがUC的であると言え、レヴィ＝ストロースはそのような意味でUCにおける創造性に言及したのではないだろうか。多木が「事物が輝きをおび、それ自身の豊かな主張がはじまる¹⁸。」と言うのは、UC的である物質的世界と感覚的世界の関係の中で創造的行為がみられ、そのような相互的關係の中で「生きる」という具体性を帯びた現象が起り得るためである。だがこの関係性は部分であって全体ではない。相互作用の中での「生きる」という現象を、多木の言説からもう少し追ってみることでかすかながら全体が見えてくる。

日常生活とは、世界を記号として解釈することに支えられてなりたっている。「生きられた家」という場合にも、その「生きる」ことはこのような記号化とその解釈が含まれるわけである¹⁹。

多木は「生きる」という言葉に、記号化とその解釈というものを含意して、生きられた家を示した。UCはこの、多木の言うような意味での「生きる」という視点に依拠した人-もの-場所の出会い方に他ならない。それは目の前の存在との出会いを通した記号化とその解釈の過程を含むのである。物質的世界を感覚的世界でもって語るところにそれが含まれ、一種の創造的な行為となる。例えば多木はシュヴァルの理想宮と呼ばれるものにハイデガーの「建てることと住むこと」という制作と人間存在が一致した存在概念を適応し、そこに一種の創造性を見る²⁰。

かれらにはいくつかの特徴がある。まず第一に、住みながら作りつづけることがあげられる。中略 つまりかれらは生きているかぎり決して建てることを中断しないのである。これは今日の大多数の人間が、商品を買うようにしか家を買わないのと対照的な態度である。文字通り、建てることと

¹⁸生きられた家 p119 多木浩二 青土社

¹⁹生きられた家 p181 多木浩二 青土社

²⁰ ハイデッガーの建築論-建てる住まう考える 中村貴志 中央公論美術出版



図 14 野生の思考 レヴィ=ストロース 1976

住むことを一致させている²¹。

このように、多木は、彼らの家をハイデガーの言説に沿うような形で紹介する。それは、「生きる」という動的な記号化の過程の中にある、空間を制作する主体の存在を見捨てないことに繋がる一方、それらを現代の日常に適応することは難しい夢のようなものといい、それらが表出するのは無意識のおぞましい世界においてであると述べる。シュヴァルの理想宮のようなものはとても個人的なものであるが故に、非合理的な表現と言い切る多木は、レヴィ=ストロースのブリコラージュの概念²²を関連させながらこう述べる。

かれらは地下空間を掘る場合でも全体の計画などしていない。できあいの材料をできあいの知識と材料を頼りに、なんとかつくりあげる。もちろん、その場かぎりでは目的は明確であり、仕上りのイメージをもっているが、もともと完結することのない過程でしかない。かれらは既存物を利用する。しかし、全く自分だけの文脈のなかで機能を転換し、そこから隠喩がひとりでに生じてくる。われわれが夢のなかで行っている隠喩化、つまり圧縮や置換と同型の過程が、かれらの作業にそって生じてくる²³。

多木はここで、夢のなかで行っている隠喩化という言葉を使い、「生きられる」記号化と解読の過程による創造性を説明する。シュヴァルの理想宮のようなとても個人的な主体によって動的につくられる空間は、それ独自の過程を内包するが故に非合理的だが象徴性をおびた具体物として迫り、生き生きとした様を帯びるということである。多木はここで即興的に使いこなす様を説明せず、夢という隠喩を使用しその動的な過程を描写するが、ここにUCの1つの在り方を見ることができる。

多木が夢という言葉を使い迫りたかった核心は、シュヴァルのような目の前の存在との出会いを通したとても個人的な作業には、個人的でその場限りであるが故に、建てることによる独自の記号化と解読の過程と象徴性としての夢があり、その様が「生きる」という具体的な現象として私達に感じられるということである。しかし、ここで多木がブリコラージュという言葉を含意した意味はなんであろうか。その真意を見逃さないためにブリ

²¹生きられた家 p143 多木浩二 青土社

²²野生の思考 p22 レヴィ=ストロース

²³生きられた家 p144 多木浩二 青土社



図 15 神話論理の思想 出口頭

コラージュという言葉を確認してみたい。ブリコラージュは元々文化人類学で用いられる用語である。レヴィ＝ストロースはそれを野生の思考や神話的思考に見出した。それは、人との間に起こる出会いのありようであり、潜在的有用性-まだ何かの役に立つということ-をブリコラージュの実践者であるブリコールがものに見出すという形で行われる。そしてそこには人-ブリコール-ものの対話-ブリコラージュ-があるという²⁴。ブリコールとはありあわせの間接的な方途を用いて、自分の手でものを作る人であり、神話的思考において見られたのは上述の意味において自分を表現する一種のブリコラージュであった²⁵。自分の手でものをつくる人がものに見出す潜在的有用性は、その材料の限度から、あらゆる目的に利用可能ではない。目の前の存在としてのものに無限大の可能性はなく、ものにはある一定の枠組みでものが持つ物質性という形が課せられる。この物質性により事前拘束を受けるブリコールとものの関係により、ブリコラージュは恣意的ではありえない。この恣意性の無さから、ブリコールはものとの対話を行う必要が生じるのだ。この時の対話は、「つくり手としての我を通すのではなく、ものに譲歩しもののために場所を空けておく²⁶」という形を取ることになる。

ブリコラージュの拘束性・非恣意性とは、ブリコールの自己のうちに「他者」と化す「もちあわせ」のための「空洞」があることであり、ものづくりを通して、ありあわせのもの・環境世界・自己との関係が捉え直されているのであれば、そこにはブリコールの「自己」に変容が生じていると考えるべきなのである²⁷。

ブリコラージュとは、自身のうちに他者としてのものを受け入れることであり、そのうちに起こる人との出会いは自身を変容させる。このように、ブリコールそれ自体の変容を視野に入れて多木は「生きる」という言葉を使ったのであろう。ここで新たに、「生きる」という言葉に自己それ自身の変容が含意されていることが見出せる。この「生きる」という言葉の中には、目の前の存在との出会いによる記号化と解釈の過程における自身の変容が含まれるということである。UC はそれを可能にする

²⁴神話論理の思想 p298 出口頭

²⁵構造と解釈 p92-93 渡邊二郎 ちくま学芸文庫

²⁶神話論理の思想 p299 出口頭

²⁷神話論理の思想 p299 出口頭

状態のことであり、冒頭のレヴィ＝ストロースの言説において言及された UC における創造性が含意するのがこのことである。それは人-もの-場所との対話を通じた自身の変容であり、つくることでもたつくられるという関係である。多木が述べた物質的世界と感覚的世界の相互作用における夢とは、目の前の存在との出会いに見る自身の変容でもあるのだ。また、この「生きる」という多木の言説の根底に響くのが、哲学者ハイデガーが「詩人のように人間は住まう」と題した講演の中での詩についての描写である。ハイデガーはヘルダーリンの詩の一句「…詩人のように、人間は住まう…²⁸」を引用しながら、詩人のように住まうとは何か、詩を詠うとは何かという問いを投げかける。

同一であることと、一致することは、決して同様であることとは違うし、また単に同じようなものが意味のない 1 つのものとなったものとも違う。同様であることとは、両者の間に差異がないこととつねに置き換えられる。同様であることとはこの差異が無いという点に尽きるのである。これに対して、同一であるとは、差異を介して出会うことで、異なるものが一体を成すことである。差異の区別が考えられる時にのみ、われわれは同一であることが言える。差異を有し続けているから、出会い集まるという同一なるものの本質が明らかになるのである。同一であるとは、異なるものが同様なるものとして均一化しようとすることを阻むのである²⁹。



図 16 哲学者の語る建築 伊藤哲夫水田一征・訳

同一であることは差異を介して出会うこととしたハイデガーは、それを天上に潜む神的存在と自らの距離を測ることに当てはめて「人間とは人間である限りつねに、何か天上的なものにてらして、そして天上的なものに促されて、すでに自己を測っているのである³⁰。」と述べる。そうして、詩を詠うことを何か天上的なものを見据えて同一のもと測ることであると言い、ヘルダーリンの詩から、詩人のように住まうことは測ることであるとする。

測る行為とは、一般的にまずある尺度が採用されて、その尺度にてらしてそのつど測るということである。ところが詩を詠うことにおいては、尺度を取ることが行われる

²⁸哲学者の語る建築 p18 伊藤哲夫/水田一征編・訳
²⁹哲学者の語る建築 p16 伊藤哲夫/水田一征編・訳
³⁰哲学者の語る建築 p21 伊藤哲夫/水田一征編・訳

のである。詩を詠うとは、語のもっとも厳密な意味での尺度を受け取ることであって、これによってはじめて人間は自分の存在の広がりについての尺度を受け取ることになるのである³¹。

ここに多木の言う「生きる」という言葉との繋がりを見たい。独自の記号化と解釈の過程による象徴性は、詩を詠うことにおいては天上的なものと自己の距離を測ることに置き換えられる。それは何かの存在と同一のもと出会うことであり、差異による一体化を通して行われる。つまり、多木が言う「生きる」とはある尺度を借りた生活を行うことではなく、目の前の人もの一場所との出会いにより「自らがある尺度をつくりだす生活の仕方」ではないだろうか。そしてそれは記号化と解釈の過程を通じた自身の変容を伴いなされる。シュヴァルは建てることにおいて住んでいたと同時に、建てることにおいて詩を詠い、独自の意味で散りばめられた意味の網目としての家をつくることでまたつくられていたのである(図17)。



図 17 シュヴァルの理想宮 出典 france-ex.com/tour/item/4749/

かれらの家のもっともユニークな点は(かれら自身にはそうは思えないだろうが)、それが夢の中で出会う風景に似ていることである。つまり、外界の理性的秩序とかかわりなく結びついた諸断片の非合理的な集積であり、それはどんなにキッチュであっても夢と同様にかれら自身について語りはじめる³²。

多木が「生きる」ということの独自の記号化と解釈の過程による象徴性が家となり、作者の自身のことについて語りはじめるテキストとして扱うのは、詩人のように住まうことを想定しているからに他ならない。そして、UC とはこのような「生きられた」テキストを綴る出会いであり、それは目の前の存在が「生きる」という具体性を帯びた出来事となって私達に迫ってくる創造性を帯びた在り方である。エドワード・レルフは著書において、引用文とともに生きられている空間について述べている。

「我々は空間を自らの感覚だけで把握することはできない。……我々はそこに住み、その中に自らの人格を投影させており、感情的な絆でそれに結びつけられている。空間はただ知覚されるのではなく……それは生きられている。」空間は

³¹ 哲学者の語る建築 p22 伊藤哲夫/水田一征編・訳

³² 生きられた家 p142 多木浩二 青土社

決して空虚なものではなく、人間の意志および想像と、空間そのものの特性との両方に由来する内容と実体を持っている³³。

空間を内容と実体という 2 項で見る視点は、多木の物質的世界と感覚的世界という視点とも重なる。ここで言われている空虚なものではないという視点は生きられた空間にはかかせなく、ともすれば、目の前の存在との独自の出会い方であり、それは満たされながら「生きる」ことに繋がる。このことが、アーリが述べた「刹那的な資本主義」に抵抗できる 1 つの方法であると言える。またイーファー・トゥアンは生活に含意される意味についてこう語る。

生活というのは、生きられるものであって、パレードの行進のように道端から見物されるものではない³⁴。

「生きる」こととは、パレードの行進という比喩を借りるならば、行進への主体的な参加である。そこにあるのは、自ら動き、見物客と応答し汗をかく行進があるはずだ。

ここまで UC の 1 つのありようを確認したところで、次項では布野修司の均質空間と生きられた空間の問題を、「刹那的な資本主義」への抵抗と繋げて考えてみたい。

³³場所の現象学 p47 エドワード・レルフ ちくま学芸文庫

³⁴空間の経験 p259 イーファー・トゥアン ちくま学芸文庫

1-1-3 均質性への抵抗と「生きる」

布野修司は、著書において近代化の過程の中で発生した空間を均質空間と呼び、それに対置できるのが生きられた空間であると述べた。



図 18 廃墟とバラック 布野修司 1998

「均質空間」とは、どこでも同じ質をもった空間のことである。等方等質で、無限に広がるデカルト座標の空間、ニュートンの絶対空間の中の空間である。その空間イメージの建築的表現を目指したのが近代建築なのである³⁵。

アーリの言説を借りるなら、均質空間とは時間-空間の圧縮を可能にするものであり、それはレヴィ=ストロースの言うOC的なものでもある。布野はインターナショナル・スタイルの均質空間をこう述べた後で建築（空間）について触れながら近代建築の生産方式の特徴を述べる。

建築（空間）というのは、本来、具体的な場所に建って初めて建築でありうる。移動する飛行機や自動車なども建築（空間）である、すべての空間が建築（空間）である、という言い方もあるけれど、建築（空間）は特定の地面の上に建って初めて建築（空間）となる。建築は移築されることがあるけれど、場所が違えば空間は同じではない。一品生産が基本である。地域地域で利用できる材料を用いて、地域地域で固有の形態がつけられてきた。ところが、近代建築の場合、どこでも同じ質の空間を同じようにつくることのできるというのが基本である。空間の生産システムが違うのである³⁶。

工場で作られた部品や建材を現場で組み立てるようなプレファブ住宅を例に、そのようなものをただ容器としてある空間とする。そして、このようなものの極致としての均質空間と「具体的な身体によって生きられることにおいて空間は意味を持つ³⁷、」とされる生きられた空間を対置させる。この布野の図式は、OCに対するUCという図式ともかぶる。そしてそれは明らかに多木の言説を前提にしており、そのために前項では多木の「生きる」

³⁵布野修司建築論集 I 廃墟とバラック-建築のアジア- p216 布野修司

³⁶布野修司建築論集 I 廃墟とバラック-建築のアジア- p217 布野修司

³⁷布野修司建築論集 I 廃墟とバラック-建築のアジア- p218 布野修司

という言葉とUCの繋がりを探ってきた。布野は続けて生きられた空間についてこう述べる。

「生きられた空間」とは、具体的な生活空間、生の歴史が刻み込まれた空間、居心地よく身体化された空間、それぞれに意味づけられた空間、意識の内にイメージされた空間である³⁸。

多木が「生きる」という内に個人的な記号化の過程とその解釈による意味付けと自身の変容を含んだように、布野も同様のことを述べる。布野は、住み手による部屋の飾りつけを例にそのような暮らしの中での小さな空間実践とでも呼べるものを評価する。

どんなに醜悪であれ、そうした行為によって、空間は生きたものになる。そして、空間は生きられてこそ、それぞれにとって意味をもつのである。そうでなければ、住居はただの容器のままである³⁹。

それぞれにとって意味のある装飾を飾るところにあるのは、前項で述べたような「自らがある尺度をつくる生活の仕方」であり、それは空間に対しての独自の意味づけのことである。布野が述べたような近代化の過程による均質空間へのささやかな抵抗としての生きられた空間は、再度言葉を借りて言うならば、こうした行為を通して「刹那的な資本主義」による均質性への抵抗にも繋がるものだ。そしてそれはUCにおける人-もの-場所との出会い方にヒントがあるはずであり、布野の言う小さな空間実践を可能にするものを探る必要がある。次節では布野が述べた空間の仮設性への言及からヒントを貰いながら、仮設的空間にUCにおける人-もの-場所の関係を適応してそれを考えていく。

³⁸布野修司建築論集 I 廃墟とバラック-建築のアジア- p219 布野修司

³⁹布野修司建築論集 I 廃墟とバラック-建築のアジア- p220 布野修司

1-1-4 UC の定義とアンダー・スペースモデル

前項までの考察から、レヴィ＝ストロースの述べた UC を以下のように定義する。

「目の前の存在との出会いの中での個人的な記号化とその解釈を含むが故に、独自の意味づけと自身の変容を帯びる一種の創造的行為」

また、UC を通した目の前の人-もの-場所の出会いが期待できる空間的性質をもつものを便宜上アンダー・スペースモデル(以下 USM) とする。USM には、布野が言うような「生きられた空間」や多木の「生きる」ことが含意され、それは空間の均質性への抵抗を「自らがある尺度をつくる生活の仕方」をすることで成し遂げる。またそのために、USM はときに極めて個人的なもののもとにある。次節では UC に依拠した USM とは何かを考えていく。

1-2 アンダー・スペースモデルと仮設性

第2節では第1節における定義を利用し、仮設的空間とUCの関係性を述べ、USMと呼べるものについて考察する。まず、建築において志向される永遠性と仮設性について布野の言説を引用しながら述べる。そして布野の言及した仮設性を評価した上で、ここで見逃される側面にUCとの繋がりを考慮しながら、USMへの適応可能性を考察していく。

1-2-1 永遠性と仮設性

布野修司は著書の中で、建築の永遠性について「廃墟のスケッチ」を引用しながら述べている。「廃墟のスケッチ」の中にある、これ以上一切の変化を許さない姿勢が逆説的に永遠性へと繋がることに触れ、例えばナチスドイツのヒトラーはそれを認めていたと述べる。そしてそのような建築におけるあくなき永遠性への探求は無くならないとしている。しかし建築は具体的な構築物であり、時間による変化を受けないものはない。「廃墟のスケッチ」が描かれるのは、この時であると布野は述べる(図19)。



図 19 再び廃墟になったヒロシマ 磯崎新

出典 diyappy.com/2023

あらゆる構築的なものが崩壊した廃墟において、変化はありえない。生成、消滅はそこでは起こりない。変化がないということは、時間は静止したままであるということである。時間を静止させることにおいて、すべては不変でありえる⁴⁰。

具体的な構築物としての建築から逃れた先にある「廃墟のスケッチ」に、永遠性への探求という視点がある。そしてこの廃墟のスケッチを通じた永遠性の探求はあくまで西洋的なものとし、「諸行無常」に代表されるように時間の観念が違う日本には、また別の形で永遠性と対置されるものへの探求があると述べる。

「一切無常」「諸行無常」という仏教の世界観において、恒久不変の建築物といった観念はそもそも存在しえない。建築も一刹那一刹那の生滅の繰り返しのなかにある。理想とされるのは、永遠性ではなくむしろ仮設性である。というより、「永遠のいま」といった時間を表現するのは仮設的な建造物がよりふさわしい⁴¹。

⁴⁰布野修司建築論集 I 廃墟とバラック-建築のアジア- p18 布野修司

⁴¹布野修司建築論集 I 廃墟とバラック-建築のアジア- p20

そしてそれを鴨長明による方丈庵に照らし合わせる。「そうした建築のありかたを考えると、いつも想起するのは、鴨長明の方丈庵だ⁴²。」と言い、方丈庵に見られる仮設性に、時間の変化による空間の消滅を跳ね返す質を見出す。そしてそれを日本の時間の観念に繋げるのだ。この方丈庵について布野はこう述べる。

現代でいえば、モバイル・ホーム、プレファブ住宅ということになる。いつでも解体でき、どこでも組み立てることができる。建築が具体的な土地との関係においてのみ建築でありえるとすれば、それはもはや建築ではないのかもしれない。しかし、住家が無常であることの具体的な表現たりえてはいるはずである⁴³。

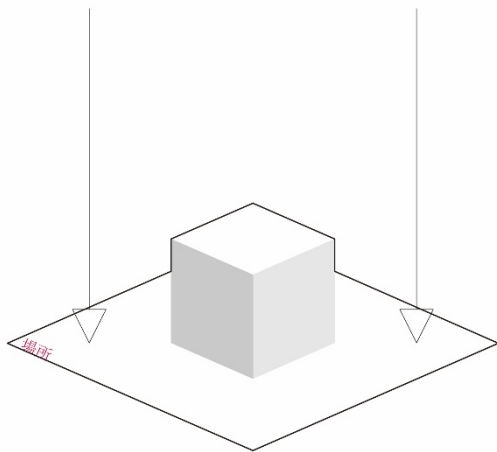


図 20 大地との接続 「建築」 筆者作成

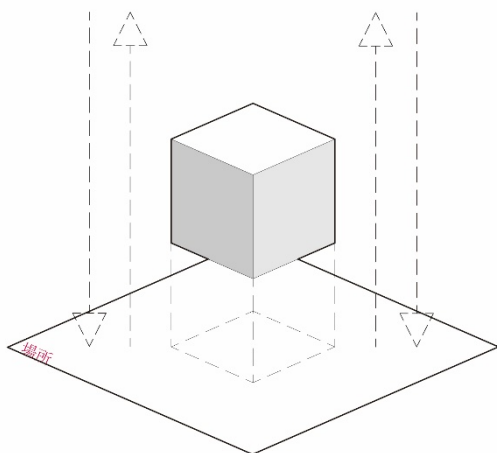


図 21 大地との非接続 「建築ではないのかもしれない」もの
筆者作成

方丈庵は解体することで持ち運びが可能な移動する住居である。「建築ではないのかもしれない」という言葉が示すのは、方丈庵が持つ仮設性が具体的な土地を想定したものではないための不安定なありようのことである。しかし、方丈庵はこの不安定さ故に布野の言及する日本の観念と接続し「住家が無常であること」に重なる。布野が述べた「具体的な土地との関係においてのみ建築でありえるとするならば」という言葉は、西洋的な観念による建築のことであり、それに照らした時に方丈庵は建築と呼べない何かであろうということである。布野の図式を整理すると、一方で永遠性という言葉を使い志向されるものがあり、一方では仮設性という言葉で志向される「建築ではないのかもしれない」ものがあるということだ。ここで布野が言う永遠性とは具体的な土地との関係であり、言い換えると、容易に切り離されない場所との接続関係である(図20)。そしてその場所との非-接続、切り離され、移動することを志向するのが方丈庵に見られる空間の仮設性である(図21)。しかし、具体的な土地を想定していないものだとする布野の言及のみでは、永遠性に対置される仮設性には言及できるがそれ以上のものではなく、場所から切り離される過程を含めた視点がない。これでは、布野の言う空間の仮設性というあいまいな言葉に潜む、UC 的な性質を見逃すことになる。そのため、この場所と接続するものと場所から切り離される非-接続の関係を含む布野の図式に踏み込み、「建築ではない

⁴²布野修司建築論集 I 廃墟とバラック-建築のアジア- p20 布野修司

⁴³布野修司建築論集 I 廃墟とバラック-建築のアジア- p21 布野修司

のかもしれない」ものの場所から切り離される過程そのものに UC を当てはめたい。そのようにして今一度空間の仮設性を考察してみることで、前節で述べた UC における人-もの-場所の出会い方を通じた空間の均質性への抵抗の糸口が見えてくるはずである。そしてその USM とともにある均質性への抵抗は、「建築ではないのかもしれない」という言葉で語られる方丈庵の仮設性と共に考察することでより具体的なものとなる。そこで問題となるのは、移動することそのものに焦点を当てるのではなく、移動することの背後に潜む小さな実践を見出すことである。次項ではそれを確認する。

1-2-2 方丈庵の仮設性

そもそも仮設性の「仮設」とは何であろう。辞書で意味を引いてみると次のように出る。

仮設 ①必要な時期だけ、仮に作り設けること。②実際にないことを仮にありとすること。③ある推理の出発点として設定される命題⁴⁴。

続いて常設を引いてみる。

常設 ①常に設けてあること⁴⁵。

仮設に対して対になるのは常設であり、両者を引いてみると分かるようにそれらは何かを設けることに関する言葉だ。両者で違うのは、必要な時期にだけあるのかそれとも常にあるのかという時間にそった視点である。ここで重要だと思われるのが仮設という語に意味される、必要な時期だけあるという点である。それは継起する終わりを点的に見たときにある、1つの大地からの切り離しである。仮設とは一時的なものであり、方丈庵はその中でも移動による一時的な場所との関係を志向した。そしてそれには継起する解体と組み立ての間の終わらない関係のイメージのために仮設性という言葉が付属した。しかし、そのような中でも点として1つの区切りがあり、その区切りの不安定なありようが、既に触れたように布野の言う「建築ではないのかもしれない」という言葉の背景にあるものである。

仮設性という言葉に含まれるニュアンスはこのように微視的に捉える必要がある。布野が方丈庵を例にいう仮設性とは、一時的な場所との関係を志向した解体と組み立てのイメージの中に点としてある区切りの連続のことであり、後述するように終わらないイメージが付属されることで永遠の持続性と接続した(図23)。

ここで、布野とは違う視点で仮設性を捉えてみたい。方丈庵は一時的なものであり、それはあるタイミングで大地から切り離される1つの終わりを志向したものであった。しかし、だからと言って鴨長明は建てる時にどこに建ててもいいと考えたわけではない。というより、一時的であり1つの点として、場所との非-接続を志向するが故に目の前の場所との関係、すなわち接続の



図 22 広辞苑 2008

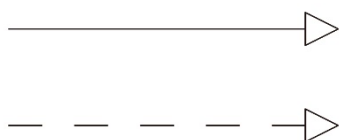


図 23 区切りの連続としての「建築ではないのかもしれない」
もの 筆者作成

⁴⁴広辞苑 p557 岩波書店

⁴⁵広辞苑 p1442 岩波書店

仕方に特徴があり、ここには布野が述べなかった仮設性を持つが故の場所との「出会い」が含まれるのである。それは1つの区切りとしての点を微視的に見たときに、点をまた1つの起伏を持ったものとして確認するようなイメージである。その起伏をつくるものたちが、前節で述べたUCに依拠する人-もの-場所の出会いである。鴨長明による方丈記を確認しながらそれを見ていきたい。



図 24 復元された方丈庵 出典 bou-tou.net/hojoki/

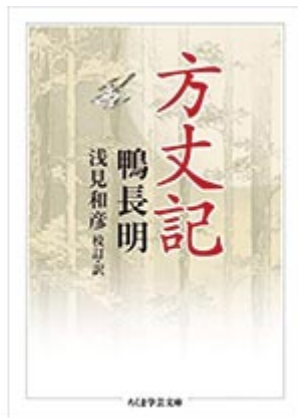


図 25 方丈記 浅見和彦・訳 2011



図 26 方丈記と住まいの文学 島内裕子 2016

ゆく河のながれは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつむすびて、久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人と栖と、またかくのごとし⁴⁶。

訳 流れゆく河のながれは、絶えることはなくて、しかも、もとの水では決してない。河のよどみに浮かぶ水の泡は、片方で消えたかと思うと、片方で生まれ、永くとどまるということはない。世の中にある人間も住まいも、またこれと同じようなものだ。

有名な一文で始まる方丈記は、主に4つのパートに分けられる⁴⁷。人間と住まいのはかなさを記した1部、災害について写実的に記す2部、災害との関連から鴨長明の住まい遍歴や方丈庵での生活を述べる3部、そして方丈庵での生活を満足なものとしている自分への批判を行い、自問自答する4部である(図24)。全編を通して貫かれるのは、鴨長明の永遠なものへの懐疑的な態度である。

たましきの都のうちに、棟を並べ、薨を争へる、高き、賤しき人の住まいは、世々を経て、尽きせぬものなれど、これをまことかと尋ねれば、昔ありし家はまれなり。中略 住む人もこれに同じ。所も変はらず、人も多かれど、いにしへ見し人は、二、三十人が中に、わづかに一人二人なり。朝に死に、夕に生まるるならひ、ただ水の泡にぞ似たりける⁴⁸。

訳 玉を敷きつめたような美しい都の中で、棟を較べ合い、薨を競い合っていた、身分の高い、あるいは賤しい人の住居は、何代たっても、不朽のものであるはずなのに、これを本

⁴⁶方丈記 p39 鴨長明 校訂・訳 浅見和彦 筑摩書房
⁴⁷方丈記と住まいの文学 p35 島内裕子 放送大学叢書
⁴⁸方丈記 p42 鴨長明 校訂・訳 浅見和彦 筑摩書房

当かとあちらこちらをたずね回ってみると、昔あった家はほとんど残っていない。中略 住む人もこれに同じだ。場所も同じ、人の数も多い。しかし、昔に見た人は、二、三十人がうち、わずか一人、二人である。一人が朝に死に、また一人が夕に生まれるという、この世のならわしは、ちょうど水の泡と似ている。

住居や人、場所を水の泡のようだと言うことから、永遠とされるものに対する懐疑的な態度を持っていたことが分かる。方丈記において長明は、度重なる災厄の中での人々の営みのはかなさに触れ、人も家もはかなく、永遠のものはないと言う思想を築く。方丈記において触れられる災厄は5大災厄と呼ばれるものであり、それぞれ、安元の大火(1177)、治承の辻風(1180)、福原への遷都(1180)、養和の飢饉(1182-83)、元暦の大地震(1185)である。このような災厄から長明が出した結論が、人や住居のはかなさであった⁴⁹。そして布野が触れたように、最終的には大地との切り離しが可能な仮設性を持つ方丈庵に住むことになるのであるが、これはとても逆説的なものであった。世のはかなさを直視したからこそ、簡素で決して大きくもない仮の庵を住居として選択した。そして方丈庵の仮設性は、それ故に永遠性とも接続しえた。しかしここで言及したいのが、布野が永遠性との図式の中で言及しなかった部分であり、方丈庵の仮設性のもう1つの側面である。それは、世のはかなさへ抵抗するための長明自身の「ある尺度をつくりだす生活の仕方」である。方丈庵の「方丈」とは1丈4方の広さのことであり、それは縦横3メートルほどの広さでおよそ4畳半から5畳半である⁵⁰。長明はこの小さな家を解体し台車で持ち運んだとされる。「継目ごとにかけがねをかけたり⁵¹。」というように、かけがねで作られたために、解体と組み立てが容易だったとされる。長明が実際に方丈庵に住んだのは彼が60にもなった頃とされ、それまでは普通の住居に住んでおり、方丈庵が出てくるのは晩年になってからである。

訳 ただただ仮の庵のみが安らかで、心配がない。広さは狭いというが、夜寝る床もある。昼居る所もある。我が身1つを宿らせるに不足はない。ヤドカリは小さい貝を好む⁵²。

⁴⁹方丈記 p130 鴨長明 校訂・訳 浅見和彦 筑摩書房

⁵⁰方丈記 p5 鴨長明 校訂・訳 浅見和彦 筑摩書房

⁵¹方丈記 p154 鴨長明 校訂・訳 浅見和彦 筑摩書房

⁵²方丈記 p194 鴨長明 校訂・訳 浅見和彦 筑摩書房

長明は、自らのことをヤドカリのようだと言い、方丈庵の生活に不自由ないことを述べる。この方丈庵での生活を満足のいくものとした長明は、その生活を庵の周辺環境まで丁寧述べている。そしてここに、方丈庵のUC的な性質をみるのできるのである。

その所のさまをいはいば、南に懸樋あり、岩を立てて、水をためたり。林の木近ければ、爪木を拾ふにともしからず。名をとはやまといふ。まさきのかづら、あとをうづめり。谷しげけれど、西晴れたり。観念のたよりなきにしもあらず⁵³。

訳 その場所のさまをいうならば、南に懸樋がある。岩を立てて、水を溜めている。林の木は近くにあるので、薪を拾い集めるのに不足するということはない。名を音羽山という。まさきのかづらが、人跡を覆い隠してしまう。谷は草木が茂っているが、西の方角は見通しがよい。極楽浄土の観想がないわけではない。

長明は、京都の日野山に定住の地を見つける。上記の描写はその定住の地の周辺環境を記したものである。長明が実際に何回庵を解体し、持ち運んだかは定かではないが、とにかくにも最終的には気に入った場所を見つけ、そこに住んだ。薪のための林が近くにあり、見通しの良い場所である。そして長明が言うのが、極楽浄土への言及である。その描写から、UCにおける「個人的な記号化とその解釈による自身の変容」があったことが分かる。解体し組み立てる住居という、はかなくも動的なイメージを持つものに住んだ長明は、自身の気にいった場所に建て、そしてそこに極楽浄土の観想を持つまでになったのだ。場所との切り離しが可能なために、ある場所との関係を能動的に生むことができたのだ。そしてそれはとても個人的なものであるが故だった。

すべて、世の人の住みかをつくるならひ、必ずしも、事のためにせず。或は妻子、眷属のためにつくり、或は親昵、朋友のためにつくる。或は主君、師匠、および財宝、牛馬のためにさへ、これをつくる。われ、今、身のためにむすべり。人のためにつくらず⁵⁴。

訳 だいたいにおいて、世の人が住家を造るやり方は、必ず

⁵³方丈記 p169 鴨長明 校訂・訳 浅見和彦 筑摩書房

⁵⁴方丈記 p199 鴨長明 校訂・訳 浅見和彦 筑摩書房

しも、やむをえない事情によってということではない。あるいは妻子、従僕のために造り、あるいは親しい人、友達のために造る。あるいは主君、師匠、さらに財宝、牛馬のためにさえ、家を造るのである。私は、いま、我が身のために庵をしつらえた。人のために造ったのではない。

人のためではなく、ただ自身のためであった方丈庵はそれ故に極楽浄土の観想を持ちえた。前述した仮設という言葉の意味には「②実際にはないことを仮にありとすること。」というものもあったが、極楽浄土の観想を持った方丈庵はこのような意味でも仮設性があった。それはまさしく、布野が述べなかった部分の仮設性の側面であり、移動を志向するが故の仮設性と関連してあるもう一つのありかたである。ここに解体と組み立てを通じた空間の仮設性とUCの繋がりを見ることができる。このような場所との切り離しが可能な仮設性をもつものは、独自の意味づけを伴う個人的な人-もの-場所の出会いを可能にする。

また、UCには過程という言葉が方丈庵の仮設性同様に付きまとうのは既に述べた通りだ。1節で述べた「目の前の存在との出会いの中での個人的な記号化とその解釈を含むが故に、独自の意味づけと自身の変容を帯びる一種の創造的行為」としてのUCには、終わりが無い。あるのは、人やものの終わりのみである。変容が終わるのは即ち死ぬときであり、そのため目の前の存在との出会いを通じたやり取りは過程でしか存在しえない。前節での多木の言葉を思い返してみよう。多木はシュヴァルの理想宮を引用しながら生きられた空間を説明する際「その場かぎりでは目的は明確であり、仕上がりのイメージをもっているが、もともと完結することのない過程でしかない。」と述べた。これはまさしくUCにも繋がる視点なのだが、この視点は方丈庵のような仮設的空間にも言えることである。UCは「目の前の存在との出会い」によるものと定義したが、方丈庵のような仮設的空間は「目の前の存在との出会い」が欠かせない(図27)。方丈庵においてそれは人-もの-場所の出会いを通して極楽浄土の観想となった。そしてUCの過程それ自体は終わることがないため、それに依拠したものの見方で方丈庵を見たとき、その仮設性にみる不安定さはUSMに依拠したものであるとすることができる。

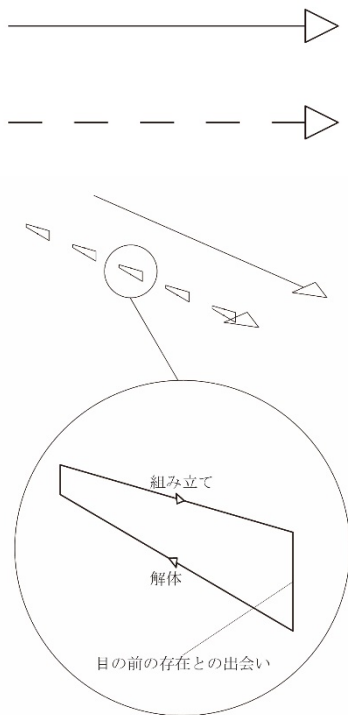


図 27 点を微視的に捉えた場合 継起する解体・組み立てによる目の前の存在との出会い 筆者作成

仮設的であることが、むしろ、「永遠のいま」を表現するように、常に過程であることを表現することによって、永遠の持続性を感じさせることは一般的にあるはずである⁵⁵。

⁵⁵ 廃墟とバラック-建築のアジア- p21 布野修司



図 28 サグラダ・ファミリア 出典 Twitter

布野はサグラダ・ファミリアの終わらない建設を引用しながら、永遠の持続性による永遠性と仮設的であることによる過程のイメージを結び付け、そうしたイメージは繋がりと述べた(図 28)。過程の連続としての動的なイメージが不安定さの中に見出されるとき、永遠性が対置される。そこで言う仮設性とは、方丈庵における継起する終わりの連続する過程そのもののことである。このことから布野が述べる仮設性という言葉に 2 種類の仮設性を見ることができる。1 つは永遠性に対置される仮設性であり、それはサグラダ・ファミリアやシュヴァルの理想宮のように、連続する作業から来る一時的なありようのことであり、変化を受け入れる建築である。

もう 1 つは方丈庵のような解体と組み立てによる移動を可能にする中で、UC 的な質を人-もの-場所と結ぶ「建築ではないのかもしれない」ものにある仮設性であり、USM に含まれるものである。2 つあるうちの 1 つである方丈庵の仮設性にはもう 1 つ大事な視点がある。方丈庵の仮設性には、常設される空間とは違い、解体と組み立てという視点が常につきまとうのはすでに述べた通りだが、その解体と組み立てを行うのはだれか。それは空間を使用する主体によるものである。その主体である実践者と人-もの-場所の動的なイメージの間の終わらない関係を捉えることで、仮設性は再度「目の前の存在との出会い」の中にあるという視点を獲得し UC と接続する。解体することと組み立てることは、その動的なイメージの中で実践者の存在を常に浮かび上がらせ、USM を作り出す。解体するのは実践者である主体であり、組み立てるのもその人である。USM には、解体と組み立てによる目の前の存在との出会いが含まれる。というより、仮設性を持つ空間での解体と組み立ての終わらない関係としての動的なイメージには、UC に依拠する「目の前の存在との出会い」という視点が欠かせないのである。このことから、布野が述べた方丈庵のもつ仮設性は USM に関連すると言え、それはサグラダ・ファミリアのような絶え間ない変化がありながら仮設性をもつものと関連しながらあるもう 1 つの仮設性に依拠した空間である。

このことは、UC を移動可能なものだけに適応することの無意味さを表している。解体と組み立てを通したものからくる USM が、場所との接続がありながら変化を受け入れる建築のもつ仮設性という質に繋がるように、むしろ建築を考えるがために、「建築ではないのかもしれない」ものを土台に据えることが必要である。

1-2-3 アンダー・スペースモデル

ここまで、方丈庵の仮設性における布野の言説に依拠しながら、UC の下にある USM との繋がりを考察してきた。布野は永遠性と対置される仮設性の存在について言及したが、この仮設性という枠組みと関連してある仮設性をもつのが USM である。そして UC における「目の前の存在との出会い」という視点は、仮設性の中の、解体と組み立てという視点を持つものに适应できることが確認できた(図 29, 30)。方丈庵のような仮設的空間の中に UC の質を見ることで、布野の言うそれとは違った側面を指摘したが、それらは解体と組み立てを通して動的な過程を生む主体の存在が欠かせなく、USM はこれに依拠するものであった。そのため、UC を通した人-もの-場所の出会いのありようとしての USM は、解体と組み立てを通した仮設性という視点を持ったものであると言え、それは例えば方丈庵のような、「建築ではないのかもしれない」ものに当てはめられる。しかし、USM と仮設性の間にある人-もの-場所の出会いのありようが繋がる視点を、UC をかませることで獲得できたが、そのうちの具体的な実践にはまだ触れられていない。引用した文献は何も具体的な実践は述べていなく、それは仮設性を持つ空間の解体や組み立てを通した小さな空間実践の内に求められるものである。方丈庵の記述だけではここに到達できない。本節で述べた USM という枠組みを補完するためにも、次章以降では世界に存在する仮設的空間の種類を確認した後、実際にある仮設性を持つ住居と屋台に焦点を当てたフィールド調査を行い、そこに潜む小さな空間実践を探る。またその際、ハイデガーの道具的連関という存在概念に依拠した分解空間と呼ぶ空間の存在を仮定する。それにより布野が言う仮設性という言葉では捉えきれない小さな空間実践を含んだ枠組みである USM の、人-もの-場所の出会いのありようを考察していく。

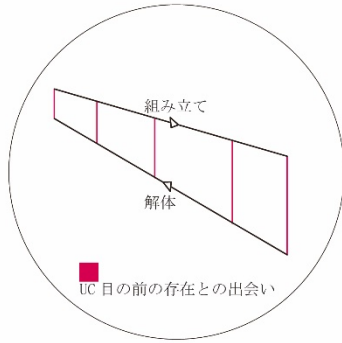


図 29 解体と組み立てと目の前の存在との出会い、筆者作成

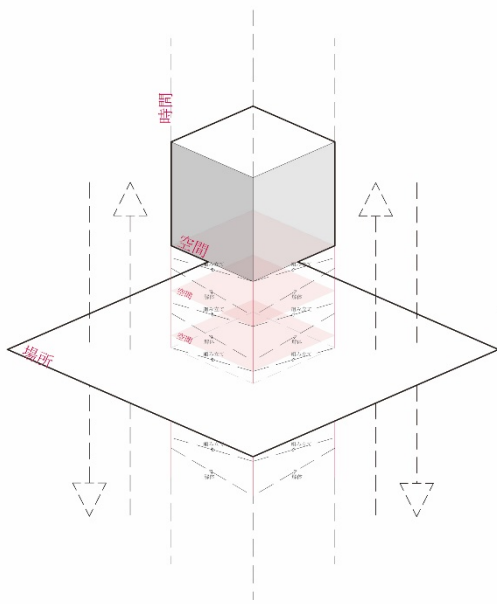


図 30 アンダー・スペースモデル 筆者作成

2章 建築以下身体以上の存在と分解空間

2-0 2章の構成

2章では、「建築ではないのかもしれない」という言葉に含意される建築以下身体以上という視点を確認した後、布野やT・フェーガー、佐藤浩司らによる世界に存在する仮設性をもつ住居の種類を確認しプロットを行う。

2-1 建築以下身体以上

前章で述べた、USMは主体による解体と組み立てを含む仮設性を持つ空間に適応できるとし、それは方丈庵のように大地との切り離しにより移動可能な形を取った。しかし今現在方丈庵は使われていない。では現代においてそれが当てはめられるのは何であろうか。住居においてそれは、遊牧・牧畜・狩猟・採集民が居住する仮設性を持つ住居に見出せるのではないだろうか。それらの住居は実践者による解体や組み立てが欠かせなく、それでいて現在にも残るものである。移動を伴うそれらのUSMを探るためにも、たびたび引用する布野の「建築ではないのかもしれない」に含意される視点を改めて考察した後、それらが見られる可能性のある仮設性をもつ住居の種類を確認していく。

2-1-1 「建築ではないのかもしれない」に含意される視点

布野は、仮設性を持った移動式住居の中でもアジアのものに限定して触れているが、それによるとアジアに広がる移動式住居の形態には3つあるとされる⁵⁶。それぞれ、ゲルのような円形住居、テント、そして円錐形住居であり、共通するのは解体と組み立てを志向するが故の比較的簡易なつくりである。これら3つは木の骨組みを使用し、フェルトなど天幕地で覆う住居であり仮設性を持った住居の原型の1つと言える。そしてそれらは布野の方丈庵における言説同様、「建築ではないのかもしれない」という視点が付加されるものであろう。ここで挙げられたのは遊牧民や半農耕民の住居だが、このような住居に対して布野同様の投げかけを挙げているのが、建築家無しの建築を紹介したことで知られるB・ルドフスキーである。彼は、著書の中の遊牧民の建築と題する文章において、布野が言った「建築ではないの

⁵⁶アジア都市建築史 p41 布野修司編 昭和社

かもしれない」という言葉と似た視点を引用しながら、遊牧民の住居について言及している(図31)。



図 31 モロッコの黒天幕 出典 建築家無しの建築 1976

歴史家アーサー・アブハム・ポープはテントや大天幕について、「この壮麗な構造体は、何千年もの間、西アジアの帝王たちの誇りであった。その布地は広くまた高価であり、永久的なものではないにせよ、しばしば驚異的な美しさをもっている」と述べ、**それらが芸術家たちに真剣に建築として認められたことがないことに不満を唱えている**⁵⁷。

建築として認められたことがないという視点は布野の言説と明らかに近いものがある。布野もB・ルドフスキーもこれら仮設的空間について多くを言及しなかったが、その背景にあるのは、不安定なありようのもとにある空間の仮設性への興味であり、住居の原型への興味であったはずだ。しかし、「建築ではないのかもしれない」が確実に住居であるこれらの空間はどのように説明可能だろうか。前章でも触れたようにUCに依拠したUSMは、目の前の存在との出会いがあるこれらの「建築以下」と言えるものたちにふさわしいはずであるが、住居について考えることでもう一度それを確かめたい。中谷礼人は著書で、人間の住まいについてこう述べている。

人間の住まいの原則とは何か。端的に主張すると、それは大地から縁を切ることである。座ったとき、寝たときに大地の状態を直接身体が受け止めないようにすることである⁵⁸。

そもそも住居にあるのは、上で述べられているような大地からの切り離しである。私達は生活を送る上で当たり前のように布団で寝、キッチンで作られた料理を食べ、壁に囲われたトイレで排便し、机で勉強する。これらは全て大地から切り離された状態だからできることである。中谷は大地の持つエネルギー量の変化に人間の身体維持のエネルギーでは太刀打ちできないと述べ、続けて「身体維持が可能な範囲を大地が保証することは、まったく幸運な偶然である⁵⁹。」と述べる。例え大地に直接住まうことができても、それは幸運な偶然であるというのだ。そして日本の民家の土間住まいから床へという変遷に触れた後、逆にその土間住まいが発達した地域で起こることとして、寝台や椅子

⁵⁷建築家なしの建築 p52 B・ルドフスキー著 鹿島出版会

⁵⁸動く大地、住まいのかたち p229 中谷礼人 岩波書店

⁵⁹動く大地、住まいのかたち p230 中谷礼人 岩波書店

を用いた身体の大地からの切り離しに触れる。

レンガや石を室内に敷きつめるのは土間の延長であり、室内でも土足歩行が発達する。その場合でも、人間の足元は靴やサンダルによって薄く、しかし確実に大地との縁を切っているのである。靴底は最小限の移動する「床」であるとも言える⁶⁰。

大地との縁を切ることへの言及と関連して中谷が述べるのが、そのような縁切りの作用を靴にも当てはめるものである。そしてそのように、靴を住居の一部であるかのように述べることで、身体に接する靴と身体外の床を大地からの縁切り作用という共通点のみで繋げる。このような身体を覆う被膜である靴を移動する床と捉える視点が可能ならば、大地との縁をその都度切ることが可能な仮設性を持ち、移動を伴う住居そのものも人間の身体が拡張されたものと捉えることも可能だろう。ここに「建築ではないのかもしれない」という投げかけの真意があるように思う。「これは建築ではないですね」と、人が言うのならば「建築ではないですねこれは、ただの私の居場所であって、私の体の一部みたいなものです」とも言えるような、身体以上の私という視点がそこにあるのではないだろうか。また、身体を起点があると仮定することで考えられるのは、人が住居を建てる場所そのものを、もののように使用しているという視点である。そこに含意されるのは、解体と組み立てが可能にする場所との対話である。そのような視点をもつことはつまり、USM が場所に対して「いかに使いこなすか」という眼差しを持つことを可能にする。そしてそこには、まるで道具を扱いものを見るような視点の存在が想定できる。このような、場所を使いこなすという視点が USM にあると仮定することで、ようやく布野の言説から離れることができる。「建築ではないのかもしれない」ものは身体の拡張された領域に存在し、ある場所に対しては住居などの空間をもってそれを使いこなすのである。そしてそこにあるのは、ものや場所に対してのズレを伴う関係性である。

朝、まだ夜が明け切らない寒さの中で、突然、コーランが流れてくる。モスクの方角から朗々と聞こえてくるのだ。すると、包を取り巻くあらゆる方角で、ありとある動物が声を上げはじめる。犬、ロバ、駱駝……。コーランの朗唱とともに叫ぶように声を上げる。

⁶⁰動く大地、住まいのかたち p230 中谷礼人 岩波書店

「するとね」と磯崎さんは言った。

「不思議と人間というやつも、その動物たちのひとつにすぎないのだということが、よくわかるような気がするんだな」

私にもその時の磯崎さんの感動が伝わってくるように思えた⁶¹。

アフガニスタンで建築家の磯崎新が遊牧民住居に泊まった時のことに、沢木は著書で触れている。そこで述べられているのは、身体が在る住居から外へ広がる存在観の広がりであり、自身が動物たちの一部となった「身体以上の私」の世界である。この視点は動物たちへの眼差しに限定されるものではない。なぜなら、動物たちとの出会いがある以前に、USM としてある空間には解体と組み立ての仮設性による他のものや場所との出会いがあったはずであるからだ。そのような住居において、身体外部のものたちとの出会いで獲得できるのは、人-もの-場所の間のズレた関係性としてある、建築以下身体以上の間を行き交う「ある尺度をつくる生活の仕方をする私」だろう。1章にて前述した、多木が「生きる」ことと関連して言及するブリコラージュの概念は、**潜在的有用性-まだ何かの役に立つということ-**をものに見出すことを基点とし自身の変容を伴った。USM において、身体以上の私が見出せると仮定するならば、それは上記の意味が身体の拡張されたものとしてある-もの-に当てはめられることを意味する。すなわち、身体以上の私である住居それ自身の変容を伴うのである。これは場所をものに見立て、住居や動物を身体以上の私にすることで、対応関係を結ぶ仮設性の1つのありかたであり、ブリコラージュにおける人とももの関係を仮設性に当てはめたものである。

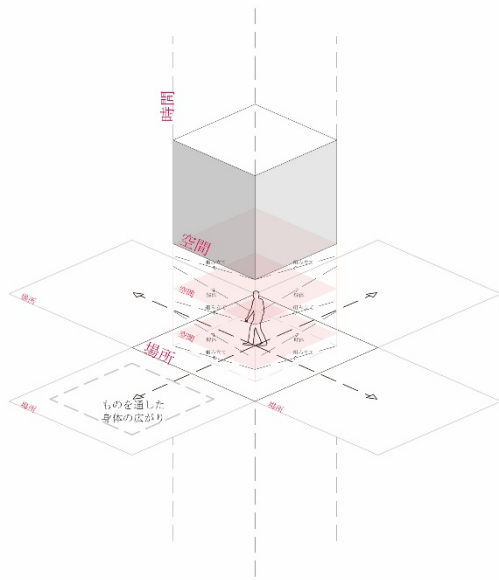


図 32 アンダー・スペースモデル

ものを通した身体の広がり
は場所の潜在的有用性を受け入れる
筆者作成

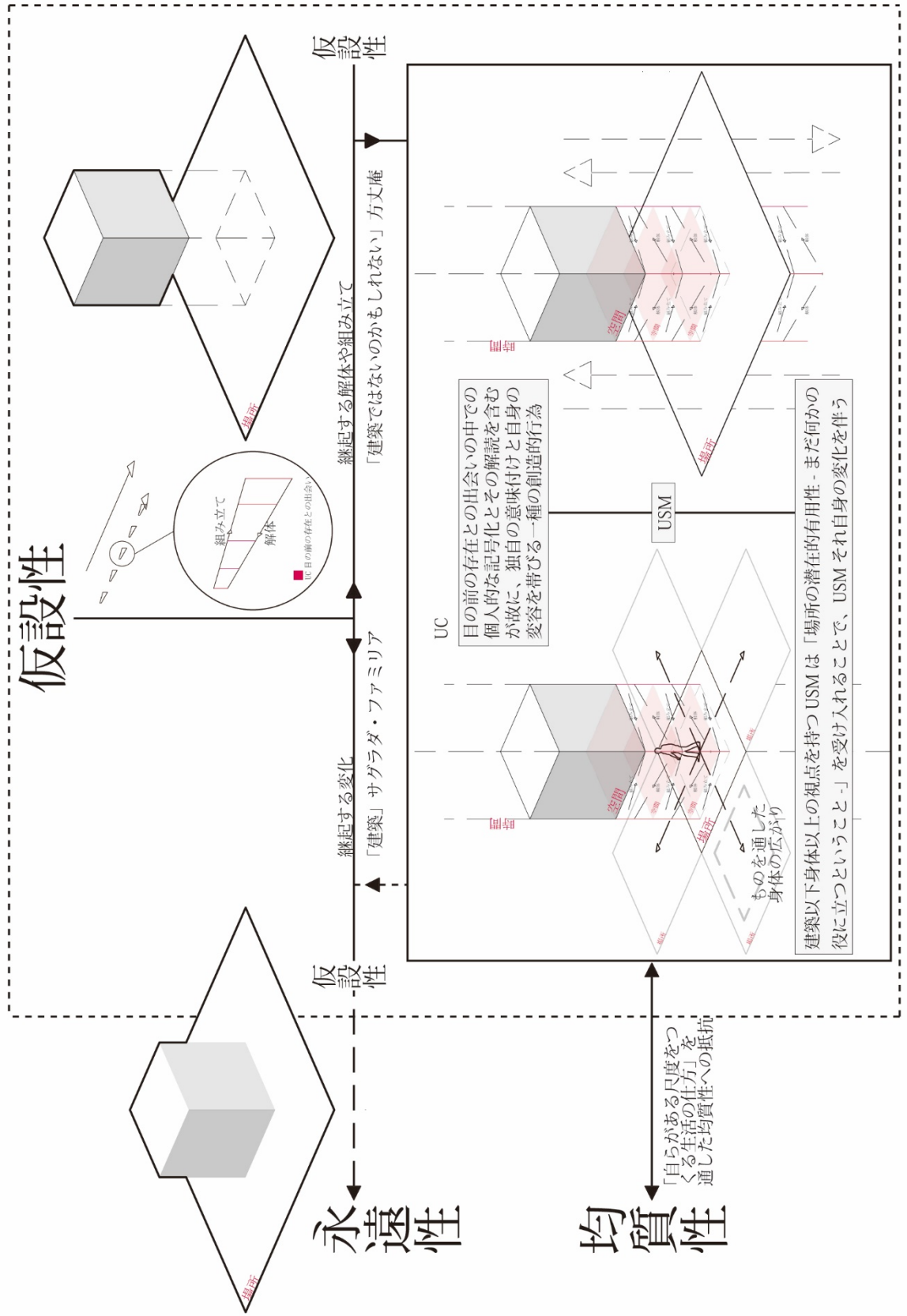
そのような関係性において人は、ものを通して場所の潜在的有用性-まだ何かの役に立つということ-を受け入れる(図 32)。ここにあるのは、場所に対する配慮とともにある独自の意味づけであり、解体や組み立てを通した自身-もの-の変容である。これはつまり、継起する解体と組み立てを通した USM の変容である。UC というフィルターを通し仮設的空間を見ることは、上記のような意味で人-もの-場所の出会いの関係性を想定することを可能とする(図 33)。そしてそれは、如何に独自の意味づけをもってものや場所を使いこなしているか、またはそのような出会い方が可能なシチュエーションとは何かを確認することに繋がる。ここにあるのは、仮設的空間のなかにある具体的な身体の身振

⁶¹深夜特急第2便 p262 沢木耕太郎

りと空間の組み立ての関係であり、逆に解体される空間と身振りの関係である。

仮設的空間の建築以下身体以上の私の視点を確認した上で、これらの関係性を探り USM に潜む性質を考えてみたい。そのために、次項では今一度世界に存在する仮設性をもつ住居の種類を確認しておく。解体や組み立てを通した仮設的空間を確認する際、前述した布野の住居分類や大工ながら世界の仮設性を持つ住居を類型したトーボー・フェーガー、建築人類学者の佐藤浩司らが記述したものをまとめ、それらの住居の概観を示す。

図 33 空間の仮設性をめぐる関係性 筆者作成



2-1-2 移動するものたち

この項では、布野やトーボー・フェーガーらの記述による解体と組み立てを伴う仮設性をもつ遊牧民の住居の概観を示す。また、トーボー・フェーガーや佐藤らがまとめた、仮設性をもつ住居のうち、必ずしも全体的な解体を伴わないものの概観も示す。それらは、部分的な解体と組み立てや居住者の移動を通じた変化を受け入れる仮設性がある住居であるとし、他の住居同様に確認する。なおそれぞれ引用する記述は筆者の意識を含む。まず、布野が著書において述べる住居の記述を引用しながらアジアのものについて限定して述べる⁶²。

① ゲル/蒙古包/ユルタ

モンゴル平原を中心に広範囲に分布する形態であるゲルは、地域により名称が異なるが一般的にはユルタである。ゲルは円輪のついた中央の支柱と円形の壁、垂木からなり、それぞれロープで縛られる。丸い天窓用の部材には臍穴が刻まれ、垂木材をそれに差し込み屋根を形成する。円形の壁材は垂木材に縛られる。組み立てには2時間程度とされ元々は女性の仕事であった。住居内部には民族独自の世界観が反映されており、ゲルの場合は入口正面に神聖な火を扱う炉が配置され、その奥が主人の居場所となる。主人に向かって左が男性の空間、右が女性の空間という構成になる。住居は固定式のものもあり、農耕生活を行う定住地域ではゲルは常設の形を取る。半農耕半狩猟の場合はゲルと一般の住居の併用となる。また、ゲルを台車の上に乗せ解体と組み立てを伴わず移動するゲル車もあったとされる。

② 各種テント

ユルタ同様遊牧民の間で一般的に使用されるテントだが、ユルタより簡便なものとされる。その分機能性には劣り寒冷地には向かないとされ、草原や砂漠にふさわしいものである。西アジアに広くみられるものに黒テントがあるが、北アフリカからアラビア半島、イラン、アフガニスタンまで広範囲に分布し、代表的なものにベドウィン族の黒テントがある。切妻、入母屋、方形など形は様々であるが、それぞれ支柱を立てフェルトで覆うものであり、支柱の数によっては大規模化も可能である。

⁶²アジア都市建築史 p41-43 布野修司編 昭和社

③ 円錐形住居

シベリアー帯などの北方で用いられるのが円錐形住居である。一般的には骨組みを円錐形に組み獣皮などの葎で覆う。腰折円錐形と呼ばれる形式のものもあり、これは骨組みで壁を立ち上げその頂部を梁でつなぎ、その上に円錐形の骨組みをつくるものである。なお布野は不確定ながら、村田治郎の説を引用して円錐形住居→腰折円錐形住居→ゲル/蒙古包/ユルトの順での発展過程に触れている。

このように、アジアにおけるおおまかな分類では①-③の3つがあることが分かる。この中には、遊牧民の住居もあれば狩猟民のものもある。そのため、次にトーボー・フェーガーによる仮設性を持つ住居の記述をもってこれを補完する⁶³。彼の記述から、布野が述べたアジア諸地域での仮設性を持つ住居を含め、世界に存在する仮設性をもつ住居をおおまかに確認していく。この中には今現在使用されていないものや変化しているものも含まれていることが予想されるが、ここでは如何に様々なものが使用されてきたかを確認するのを主目的とするため、順を追って見ていく。なお、トーボー・フェーガーの著書において骨組みと天幕地で構成される仮設性をもつ住居を総称して天幕と呼んでいるため、表記はそれに従う。また分類は基本的にトーボー・フェーガーのものに倣うが一部改変し内容は筆者がまとめたものである。

ここで言及される天幕は主に3種類あり、それぞれ①黒天幕②葎・獣皮・樹皮の天幕③ユルタなどの円形天幕である。素材やつくられかたは民族や部族ごとに異なる部分があれば共通する部分もある。以下それを確認していく。

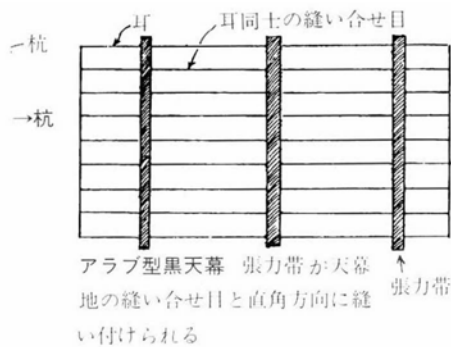


図 34 A型の天幕地 出典 天幕 1989



図 35 B型の天幕地 出典 天幕 1989

① 黒天幕

布野が言及したテント形式の黒天幕は、トーボー・フェーガーによれば2種類あるとされ、それぞれアラブ型とペルシャ型である(図34,35)。以下、アラブ型の黒天幕をA系列で示し、ペルシャ型の黒天幕をB系列で示す。A型はサウジアラビアやイラク、シリアに住むベドウィン族とそれらの影響を受ける西の地域で使用され、B型はイランからチベットにかけての東の地域で使用される。それぞれの違いは、人を環境から覆いつつ守る役目をもつ天幕地のつくりかたの差であり、B型は天幕地側面の耳同士を縫い付け1枚の天幕地

⁶³天幕-遊牧民と狩猟民のすまい- トーボー・フェーガー/梅棹忠夫監修 磯野義人 訳 エス・ピー・エス出版

をつくる最も簡素な形式であるが、A型は縫い合わされたそれらに直行するように張力帯を縫い付けられるペルシャ型の強化版である。つまり、B型は天幕地が縫い合わされる面を長手に、長手方向に主張力が張られるシンプルな形態に対し、A型はそれに直行した張力帯を介して主張力が張られる。黒天幕の主な役割は3つあるとされ、まず第一に日射から守ることであり、それから、寒さや風、砂および埃から守ることと、人目から守ることである。黒天幕で使用される黒色は熱を吸収する役目を果たすために広い範囲で使用されてきた。

A-1 ベドウィンの天幕

ベドウィンとはアラブの民を示し、広い範囲に住む遊牧民である。住居はバイト・アル・シャアルと呼ばれ、遊牧民である彼らは運搬にラクダを使用している。「ベドウィンの天幕は、黒天幕の中でも最も広く普及している型式で、砂漠での使用に最も優れている⁶⁴。」と言われており、平らな屋根幕や必要最小限の柱など環境に最適化した形である(図36)。天幕の大きさは経済状況によるためまちまちである。張力帯の両端は装飾が施される木または皮の張り綱止めと張り綱で構成され、張り綱は杭で固定される。それらは柱の本数により数が異なる。天幕をつくるのは女性や子供であるため、天幕の管理は女性のもとで行われ、1時間ほどでつくられる。乾季の夏はオアシス近くに場所を取り、雨季は砂漠にて過ごす。季節や天気による環境の変化に対応するために、側幕と呼ばれる壁の役目を果たす天幕地や内部には仕切り幕をつけ、それにより男性の居場所と女性の居場所を分ける。側幕は暑い日には取られる。アラブ人の天幕は東-メッカの方角-か南に向けて張られるとされ、その場合男性部屋は東に位置されるが、この向きは部族、地形などにより異なる。ベドウィンの天幕では棟木が神聖視され、装飾が施される。砂漠での生活では野営地での廃出物は全て砂に飲まれるが、それでもたまってしまいう汚物を嫌い、10日に1回ほどの間隔で移動する。

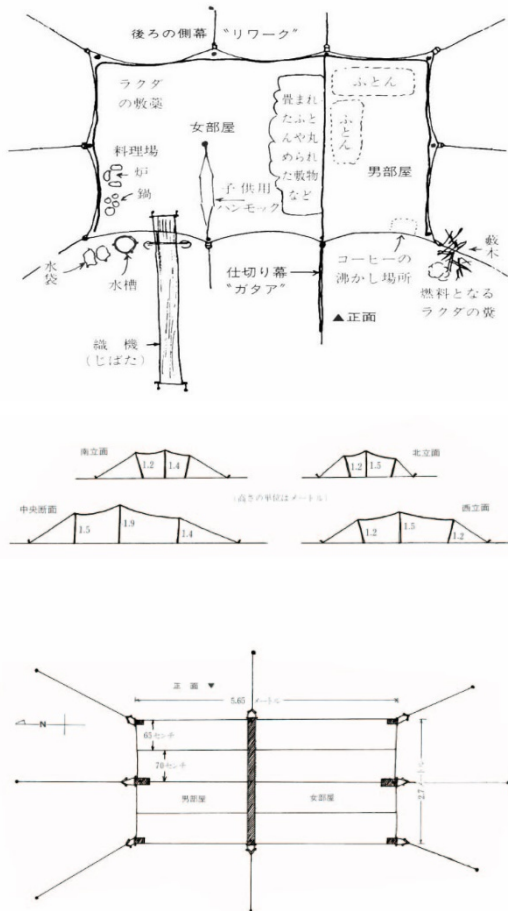


図 36 ベドウィンの天幕 出典 天幕 1989

A-2 北アフリカの天幕

北アフリカでは、アラブ人の影響下にあったために黒天幕が普及した。しかし、その中でも変遷を経て独特の形態を

⁶⁴天幕-遊牧民と狩猟民のすまい- p18 トーゴー・フェーガー/梅棹忠夫監修 磯野義人 訳 エス・ピー・エス出版



図 37 ベルベル族の天幕 出典 天幕 1989

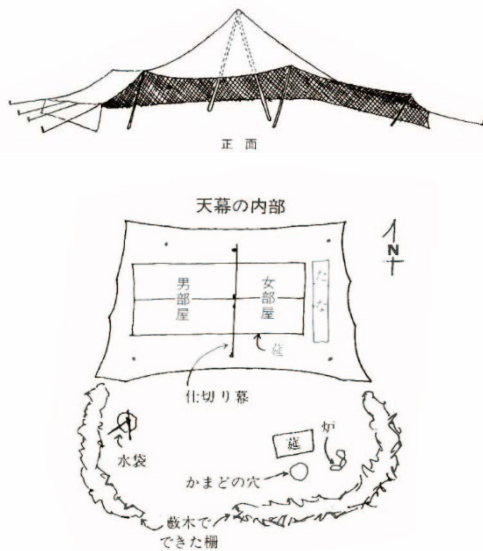


図 38 ムーア人の天幕 出典 天幕 1989

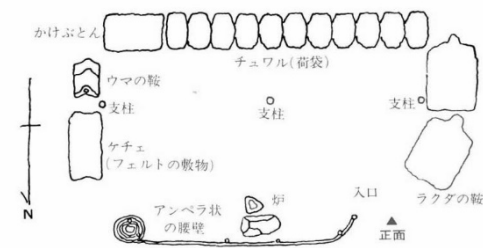


図 39 トルコ人の天幕 出典 天幕 1989

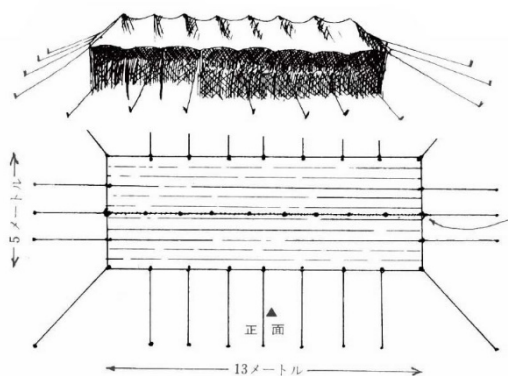


図 40 クルド族の天幕 出典 天幕 1989

もつようになったものをトーボー・フェーガーは記述している。北アフリカの黒天幕は、曲線を伴う形態が特徴である。

モロッコのベルベル族のものではいくつかある張力帯のうち真ん中のものが太くなっており、形態が一般的な黒天幕と比べ変化している。曲線を伴う形態は船を裏返しにしたときのようなイメージである(図 37)。この独特の形態は、ベルベル族の住む山地の雨量と関係している。雨量が多い地域ではその雨をうまく受け流すために勾配をつける必要があったため、そのような曲線を伴う形態となった。ベルベル族でも天幕をつくるのは女性の仕事である。キャンプ地における天幕はそれぞれ円状に配置され、入り口が円の中心に来るようになっている。

ムーア人の天幕は、なだらかに傾斜する屋根幕が地面すれすれのところまで張られるが、これは砂漠の熱風をやり過ごすためである(図 38)。ムーア人の天幕は黒天幕の中でも比較的小さいものであり、それを著者は屋根幕そのものと形容している。短い棟木を 2 本の柱で支える内部には草で織られた藁が一面に敷き詰められ、寝る場所にはその上に敷物が置かれる。部族の仲間が集まり野営する場合は一列に配置される。ムーア人の天幕は他のものと比べると張力帯がないのが特徴であり、これは B 型のもと同じであるが地理的なものを考慮し、著者は B 型の影響を受けたものというよりムーア人独自の発明としている。内部は仕切り幕により男性の居場所と女性の居場所が分けられる。

アルジェリアの天幕はベルベル族の天幕と形態構成が似ている。ジェベル・アムール族の天幕は中央柱と真ん中の張力帯に吊られる仕切り幕で女性と男性の居場所が異なる。また、炉から出る煙を出すための排煙穴があるが、これは黒天幕が見られる地域では東のチベットとアルジェリアにしか見られないものである。

B-1 トルコの天幕

トルコのアナトリアで遊牧を行うユルックの天幕はチャドルと呼ばれ、中央アジア系遊牧民の影響を受けたものである(図 39)。運搬はラクダが使用される。3 本の柱で支えられた天幕地は傘が開いたような形態になる。冬営地では、天幕の周辺に小枝であんだ腰壁を設け、風よけとする。

B-2 イランの黒天幕

イランの山岳民の天幕はそれぞれ構造的に似通ったもの

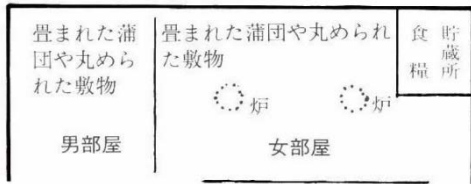


図 41 クルド族の天幕 出典 天幕 1989

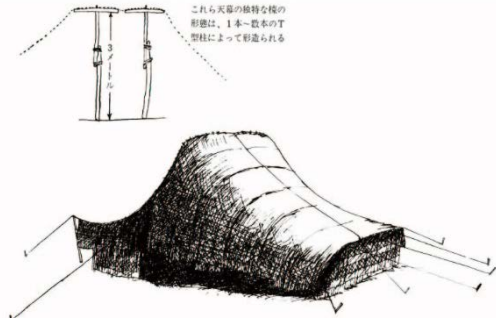


図 42 ルール族の天幕 出典 天幕 1989

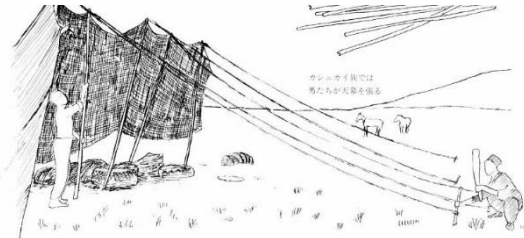


図 43 カシュカイ族の天幕 出典 天幕 1989

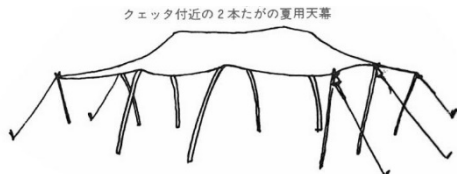


図 44 バルチ族の天幕 出典 天幕 1989

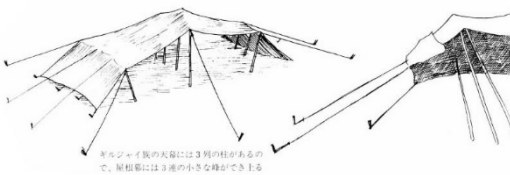


図 45 ギルジヤイ族の天幕 出典 天幕 1989

であるが、内部の骨組みや張り方に差が見られる。

クルド族はトルコやイラク、イラン等に住む民族である。イラン北部のクルド族の天幕は中央の柱が屋根幕から少し突き出る形態をとり、その様はクルド族が生活する山脈の連なりに似る(図40,41)。天幕の寸法は所有者の身分によって異なる。内部では葎が男性の部屋と女性の部屋を分ける場合もある。

クルド族の南部に住むルール族の天幕は2枚の天幕地を掛け合わせてつくられる切妻型である(図42)。棟は3本のT字型の柱により支えられ、中央の柱は継がれたものを使う。壁面は葎でつくられ、冬は寒さから身を守るために葎に泥を塗ったりもする。

カシュカイ族の天幕、バフチアリ族、バッセリ族の天幕は似た形態をとる(図43)。カシュカイ族の天幕では冬には水はけをよくするためT字柱を使用し棟を高くするが、夏の移動時には中央のT字柱を使用せず箱型の天幕となる。バッセリ族の天幕も、冬用と夏用で形態が異なる。

B-3 バルチ族の丸屋根型天幕

バルチ族はイランからパキスタンにかけて住む民族である。この天幕は、丸い屋根が特徴的であり、丸屋根の小屋に天幕地をかぶせたものという形容もされる(図44)。丸屋根型的小屋はかつて中東全域に広まったこともあるが、他の小屋や天幕の普及によって押しつけられたとされる。その丸屋根型天幕はアフガニスタンのパシュトン族などにも見られる。丸い屋根幕は2本のたがが使用され、そのたがは2本の曲がった木からつくられる。たがの数は天幕の大きさによって変化する。

B-4 アフガニスタンの天幕

アフガニスタンはトルコ、アラビア、イラン、インド、中央アジアなど、様々な地域の文化交流の場として栄えたために、そこではさまざまな形の天幕が見られる。また、アフガニスタン北部のヒンズー・クシ山脈はユルタが見られる地域との境となっているとされるが、一部の地域では黒天幕とユルタの境界が重なり合ったりもするため一概には言えない。ただ言えるのは、アフガニスタンにおいてはじめてユルタが確認できるということだ。事実アフガニスタンにおいては、チャパリと呼ばれるユルタ型の半定住用住居も見られる。

ギルジャイ族の天幕は、3列に並んだ柱を使用し天幕地が張られ、中央の列の柱たちが一番高い(図45)。

ドゥッラーニー族の天幕の中には唯一、定住用住居から遊牧民の住居への発展過程を見ることができる(図46)。彼らの天幕の骨組みは5本たがの丸屋根型からT字柱による簡素な天幕まで幅広い形態の天幕を使用する。天幕の形態はそのように何本ものアーチ状の骨組みから徐々に単純で簡素な形態へと変化してきたのである。

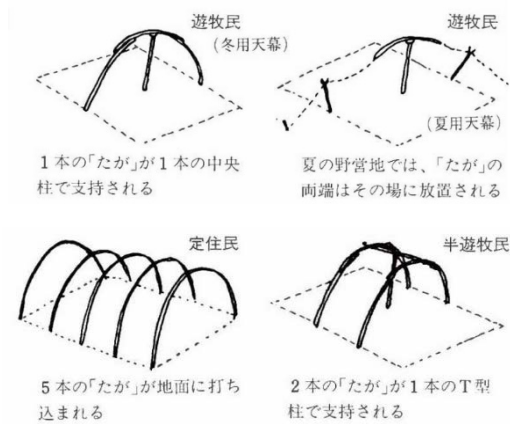


図 46 ドゥッラーニー族の天幕 出典 天幕 1989

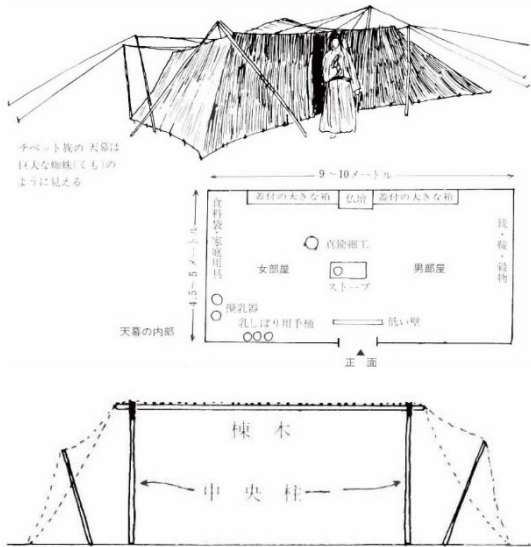


図 47 チベット族の天幕 出典 天幕 1989

B-5 チベットの天幕

黒天幕の分布域はアフガニスタンまでは連続しているが、アフガニスタンからチベットにかけてはその連続性が途絶えている。ここから先にはヒマラヤ山脈があるために、黒天幕分布域を分断しているのだ。チベットの遊牧生活はヤクという動物によって成り立っている。天幕地の産出から食料、そして運搬とその役割は幅広い。野営地は円に並べられた10棟ほどのキャンプからなり、円形に並べる隙間がない場合は列をつくる。彼らは半遊牧の形態をとり、冬には村の定住地で過ごす。天幕の見た目はイランのカシュカイ族の夏用天幕を彷彿とさせる箱型である(図47)。屋根幕は棟木に対して平行に張られる。天幕地は2つに分けてつくられる。アルジェリアのジェベル・アムール族の天幕と同様に中央部に排煙穴が設けられる。骨組みは棟木を両側から支える2本の柱からなり、それとは別に天幕地を外側から引っ張る柱が張り綱と共に使用される。この形態はチベット族独特のものであり、屋根幕の端に3-4カ所取り付けられる。ダライ・ラマの天幕は300人を収容できたと言われる。なおチベットもアフガニスタンやイラクと同様にユルタとの境界に接する地域である。内部は入口を基点に男性と女性で居場所を分ける。

② 葎と獣皮・樹皮の天幕

骨組みに葎や獣皮・樹皮をかぶせたような簡素な住居は狩猟・採集民の間では珍しくない。生活上取れるこれらのものは柔らかいものなので、巻くことで容易に運ぶことができる。その形態は黒天幕同様幅広く、丸屋根型、箱型、ドーム型に加え丸屋根型と箱型を組み合わせたもの、円錐形天幕である。これらに共通するのは、骨組みの自立性が比較的強いことである。葎や獣皮・樹皮は素材の特性上引張りに弱く、強く張ることができないためである。そのためこれらの天



図 48 トアレグ族の葎天幕 出典 天幕 1989

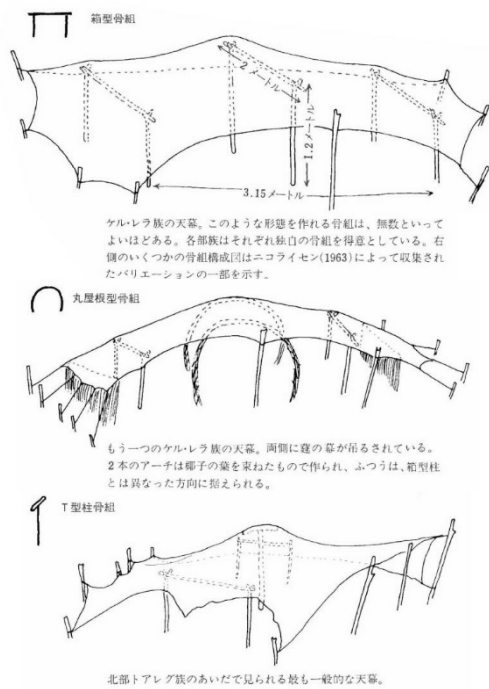


図 49 トアレグ族の獣皮天幕 出典 天幕 1989

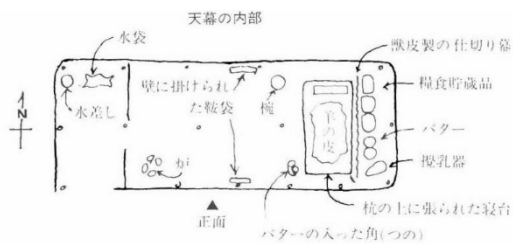


図 50 テダ族の箱型天幕 出典 天幕 1989

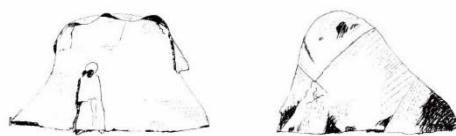


図 51 ベジャ族の天幕 出典 天幕 1989

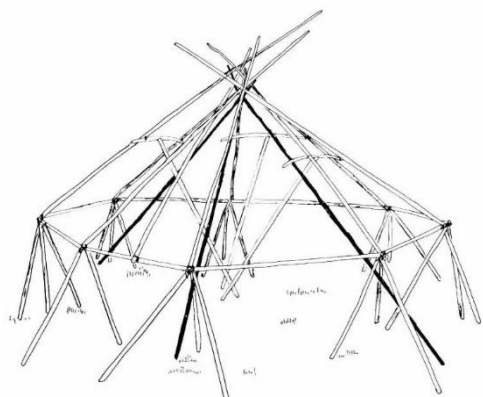


図 52 コリヤーク族・チュクチ族の天幕 ヤランガ 出典 天幕 1989

幕の骨組みは黒天幕のそれより複雑になる。最も広く使用される型はドーム型であるとし、次いで丸屋根型、そして箱型であり、ときに箱型は丸屋根型と組み合わせられる。また著者のトーボー・フェーガーは、ドーム型が最も古いと推測している。これらの仮設性をもつ住居をC系列で示す。

C-1 アフリカの天幕

トアレグ族の天幕はモロッコのベルベル族の天幕と似ているものである。しかしトアレグ族の天幕には様々な形態があり、そこが特徴となっている。

トアレグ族の葦の天幕は、アーチ状の骨組みを用いてつくられる(図 48)。このような葦の天幕は半遊牧民から遊牧民まで使用される。

トアレグ族の獣皮天幕は砂漠向きのものである(図 49)。背が低く屋根幕が平坦なので、砂嵐に耐えられる。骨組みは門型、丸屋根型、T字型を用いたものと様々だ。素材には山羊の皮が良く使用されるがスーダンのトアレグ族では牛の皮も使用される。トアレグ族の野営地は5-6棟でつくられ、2週間ほどで移動する。暑い夏には葦天幕が使用される。

テダ族の葦の天幕はトアレグ族のものとよく似ているが、箱型に近いものである(図 50)。骨組みは3列に並んだ先端がフォーク型になった柱でつくられ、長手方向の中央列は高くなっている。こうして箱型でありながらもわずかに勾配がかかった屋根幕をつくることができる。この住居は正確には完全な可搬性はなく、骨組みはしばしば敷地に放置される。天幕の奥には寝台が骨組みと同じようなつくりかたで設けられる。また内部は手前と奥でものの配置が決まる。

ベジャ族の天幕は3-5本のアーチからなる丸屋根型であり、その点ではトアレグ族やテダ族との共通点が見出せる。一般的にアーチは棟木で支えられる(図 51)。葦は天幕の両側に打ち込まれた杭で固定される。

C-2 北の天幕

シベリアでは、ユルタに似た形態の腰折円錐形の天幕や円錐形の天幕が見られるが、これは大量に降る雪を処理するための形態である。シベリアの最南部にはユルタを使用する民族が住んでいる。そこから北に向かって広大な草原であるステップがあり、そして凍てつく北極圏のタイガ、ツンドラが広がっている。北極圏の民族はトナカイ遊牧しており、彼らにとってトナカイなくてはならないものであ

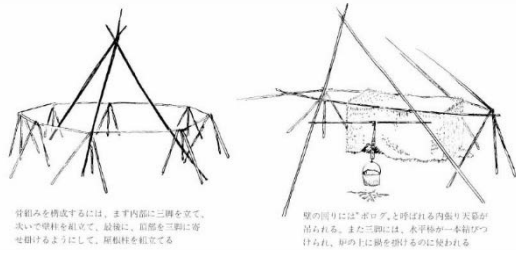


図 53 コリヤーク族・チュクチ族のテンマクヤランガ

出典 天幕 1989



エベンキ族のホラマ・デュの組立て

図 54 ユカギール族・エベン族・エベンギ族の天幕

ホラマ・デュ 出典 天幕 1989

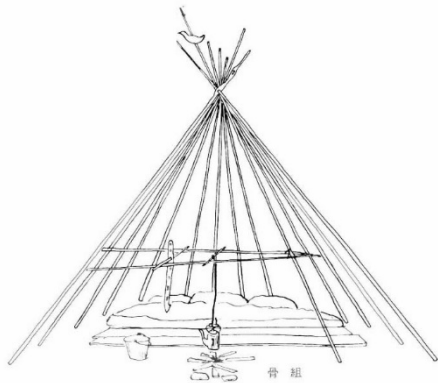


図 55 タイガの円錐形天幕 出典 天幕 1989



図 56 ヌガナサン族の天幕内部 出典 天幕 1989

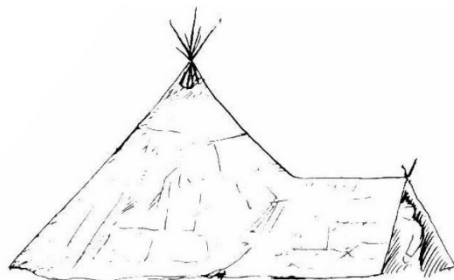


図 57 ネネツ族の天幕 出典 天幕 1989

る。トナカイの獣皮は衣服やボート、天幕の覆いとなり、骨は武器や道具、肉や内臓は食料となる。彼らのほとんどは漁や狩猟、牧畜の兼業を行っている。円錐形天幕はシベリアに端を発したものとされるが、その分布範囲は広く、西はラップランドから東は北アメリカまでである。その円錐形天幕は分布の広さと共に多様な種類があるが、基礎柱の形態や組み立て方から識別することができる。

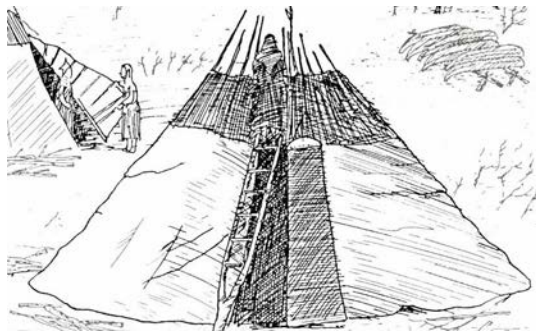
コリヤーク族とチュクチ族は北部の山岳系民族である。彼らは多くのトナカイと共に生活を行っている。季節ごとに移動をしながら生活を行い、必然的にそれはトナカイの生活に合わせたものとなる。彼らの天幕はヤランガと呼ばれ、ユルタに似た腰折円錐形天幕である(図52,53)。遊牧民の天幕では大きい部類に入るもので非常に頑丈につくられ、強風にも耐える。骨組みは内部に3本ほどの柱をたて、その周囲に円形の壁を設けその頂部から屋根材を内部柱に向けてかける。また内部から、屋根幕を押し上げるようにT型柱をたて、屋根幕をなだらかなドーム形状にする。入り組んだ構造をしており、住人は骨組みの間に水平に棒をかけ、そこに鍋を吊るすなど、骨組みをうまく利用し生活をする。内部にはポログと呼ばれる内張りの天幕が張られ、その中で眠る。著者はヤランガについて、本格的なユルタの前身であったに違いないと述べている。

ユカギール族、エベン族及びエベンギ族は定住するものもいれば遊牧を行うものいる。彼らの天幕はホラマ・デュと呼ばれ、ヤランガと似たものである(図54)。両者の形態は基本的に同じだが、ホラマ・デュはより小さく軽い。しかしどちらかと言うとユルタに近い骨組みである。

シベリアの諸民族の円錐形天幕は材料が様々で、例えば北極圏のトナカイ遊牧民はトナカイの獣皮を天幕地に使用するのに対し、それよりも南に行くと樹皮を使用したりする。またより南の半遊牧民では、ユルタと同じフェルトを使用したりもする。

円錐形天幕の中でもタイガで使用されるものでは、骨組みを野営地に放置し天幕地のみ持って移動するため、骨組みだけ残ることがある(図55)。これは、樹が豊富で骨組みを運ぶよりも野営地で切り出す方が楽なためである。夏用の天幕地には樹皮が使用され、冬用には獣皮が使用される。

ツンドラのヌガナサン族及びネネツ族の円錐形天幕では、柱の先端に臍穴を設けそこに差し込み基礎柱がつくられる(図56,57)。ヌガナサン族の天幕内部は、女性と男性で居場所



を二分するために炉の周囲に厚板か丸太を置く。炉の後ろは神聖な場所であり、儀式用の供物などはそこに置かれる。シベリアの天幕では火が非常に大事であり、炉の光は生活するためには消してはいけないものなので天幕内部ではいつも火が焚かれる。また夜寝るときには内部に張られた内幕で寝る。

ラップランドはシベリアの西に位置する。そこにはラップ人が住み、シベリアと同様天幕を使用し生活している。ラップ人が発明したもので、アクジャと呼ばれる橇とスキーがある。これらの道具は彼らの生活に適応したものとなり、軽くて柔らかいタイガの雪を走るのに適していた。

彼らの天幕の中に円錐形天幕と共にあるのが、コタと呼ばれる独特の天幕である(図58)。コタはラップ語で彼らの家を示すもので、形態は様々だ。それぞれ、芝土コタ、フォーク型柱コタ、曲柱コタの3つである。芝土コタは定住用のもので、冬にも使用される。骨組みに土をかぶせたもので、その骨組みは後述する曲柱コタと同じである。フォーク型柱コタはタイガの他の円錐形天幕と似たものである。曲柱コタは1年中使用されるもので、曲がった垂木を使用するラップ人オリジナルのものである。曲がった垂木を使用することで長い柱を使用せずとも大きな空間をつくることできる。天幕は森や水場に近く、風を避けた場所につくられる。中央には炉が置かれ、その周りには平らな石が並べられる。著者は、コタは小さな宇宙と称する分を引用しながら、コタの内部について述べているが、これはユルタなどにも見られる世界観であり、彼らにとっては身体以外の拠り所としての住居が非常に大事なのである。炉を中心に木を配置し空間を分けるようにして、居場所を決める。

エスキモーの楕円形天幕は彼らの天幕の中で最も特徴的なものである(図59)。彼らは円錐形天幕やドーム型天幕も使用するが、それらはエスキモーの南に住むインディアンとの接触を思い起こせる。しかし楕円形天幕だけはインディアンのもものと比べても非常に特徴的なものである。骨組みは、入り口からかけられた棟木を支えるように半円錐形の骨組みがつくられる。材料の木が少ない地域では、セイウチの骨などが骨組みで使用される場合もある。天幕同士が繋ぎ合わされるように連結する事例もある。天幕地には鞣さない皮が使用される。グリーンランドの楕円形天幕は他のものより簡略化されたものである。エスキモーの円錐形天幕はインディアンのもものと関連するもので、ほとんど同じであるが

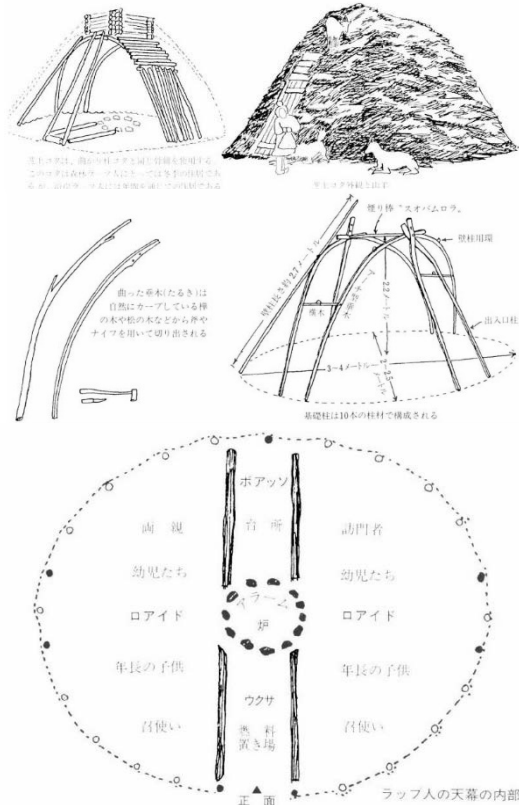


図 58 ラップ人の天幕 出典 天幕 1989

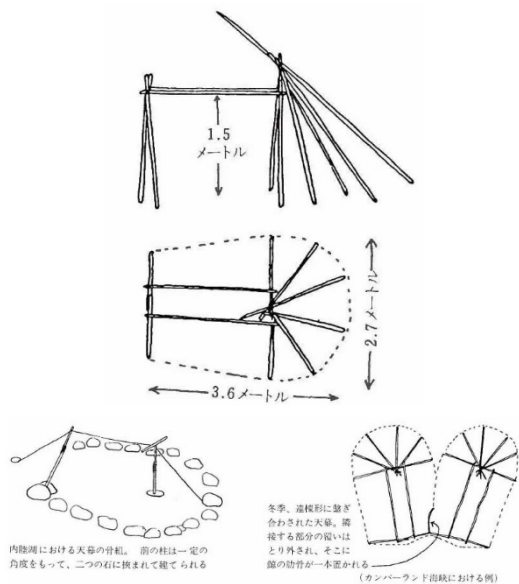
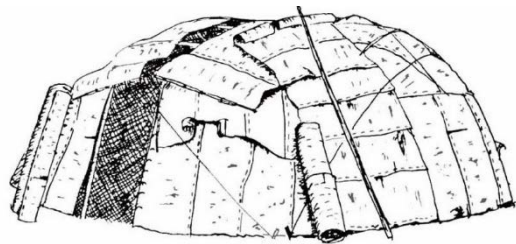


図 59 エスキモーの楕円形天幕 出典 天幕 1989



唐松(とうひ)の根を裂いたもので縫い合せた、幾枚もの樺の樹皮が被せられる。樹皮は、杭に結びつけた紐で押えられ、また柱をもたせかけられる

図 60 オジブワ族のドーム型天幕 出典 天幕 1989

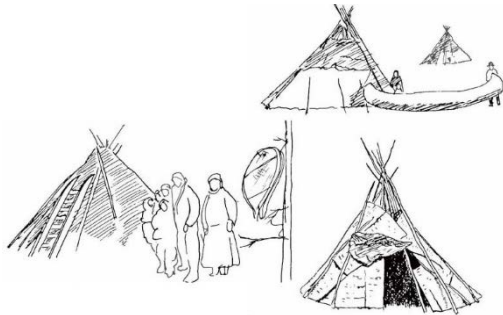
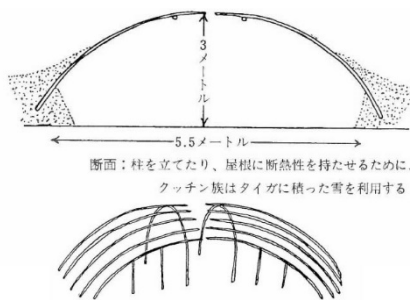


図 61 ナスカビ族、モンタグネイ族、ペノボスコット族、オジブワ族の円錐形天幕 出典 天幕 1989



断面：柱を立てたり、屋根に断熱性を持たせるために、クッチン族はタイガに積った雪を利用する

図 62 クッチン族の天幕 出典 天幕 1989

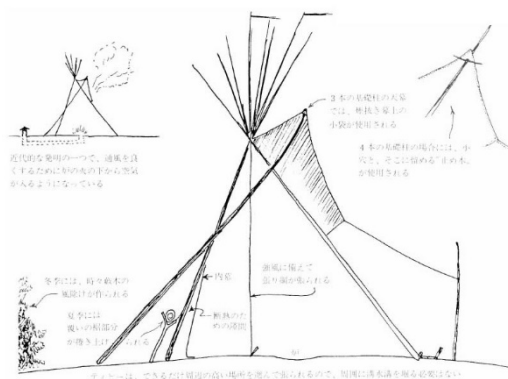


図 63 インディアンのティピー 出典 天幕 1989

煙出しの穴はない。ドーム型天幕について筆者は、エスキモーが作りだしたものであるとしている。それらは主に冬に使用される。

北アメリカの亜北極圏にはインディアンが住んでいる。彼らの生活はシベリアのタイガの諸民族と似たようなものであるが、トナカイの扱いに関しては異なり、彼らは飼わずに狩猟の対象とするのみである。北アメリカのタイガでは、円錐形天幕とドーム型天幕が使用されてきた。それらは移動の際骨組みは放置され、天幕地のみ運ばれた。

オジブワ族のドーム型天幕は、藎草の莖や樹皮、獣皮などが使用され、シベリアにもあるようなものである(図60)。北アメリカのタイガで最も使用されるのが、円錐形天幕である。それらは、ナスピカ族、モンタグネイ族、ペノボスコット族、オジブワ族などで使用されてきた(図61)。

クッチン族の天幕は北アメリカのタイガで見られる唯一の可搬性天幕であり、ハン族やタナナ族にも使用される(図62)。外観はインディアンやエスキモーが使用するドーム型天幕に似ているが、骨組みの構造はそれらとは異なる。大きな楕円形の内部空間をつくりだすために、アーチ型の柱を使用している。アーチ型柱にかかった垂木は、積もった雪が基礎となる。クッチン族は出入口を南に向けてつくる。天幕の1/3が雪の中から露出するような形態で、寒さに強い。

C-3 インディアンのティピー

ティピーは、これまで発明されてきた円錐形天幕の中で最も巧妙なもので、簡単に組み立てられ快適なものである(図63)。他の円錐形天幕では見られない排煙穴が設けられる。また内部に幕を追加することであたたかな内部になっている。他の円錐形天幕とティピーを区別できるものとして、排煙穴の有無の他に骨組みが入り口に対して少し後ろに傾斜することが挙げられる。骨組みの組み立てには5分とかからないとされ、天幕地の覆いなどを考慮しても15分ほどでつくられる。入り口は様々に装飾が施される。アジアの初期の円錐形天幕とアメリカのティピーは年代的にも距離的にもかけ離れているにもかかわらず、炉や神聖な場所の配置や内部の上座下座などの決まりがほとんど同じである。

③ ユルタ

ユルタとはトルコ語で住居を意味するもので、その形態

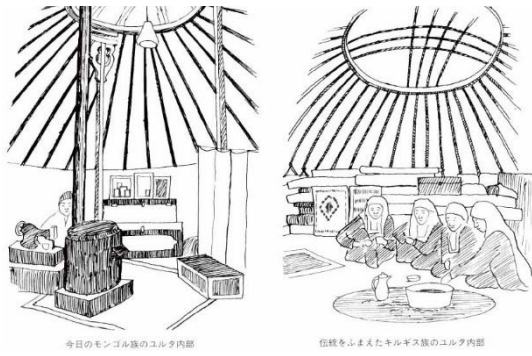


図 64 モンゴル型とキルギス型の天幕内部 出典 天幕 1989

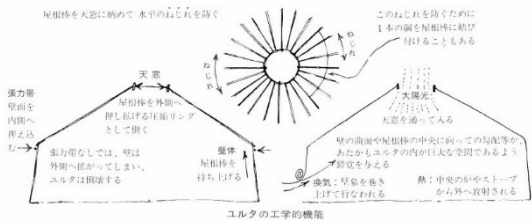


図 65 ユルタの内部 出典 天幕 1989

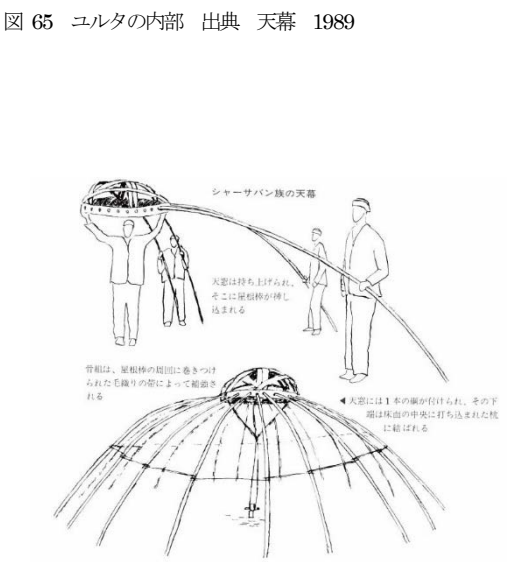


図 66 シャールサバン族の天幕 出典 天幕 1989

はドームに近くほとんど立派な住居である。入り口における木製枠や天窓など住居には加工された部材を用いるが、それらは大工によってもつくられる。アフガニスタンでは定住民も季節によってユルタを建てるなど、幅広い使われ方をする。分布範囲は広く、カスピ海から南ロシアに沿ってモンゴルを通り北のシベリアに達する広い地域に見られる。住居に張り綱が必要でないことや、骨組みに使用する木材の径が細いことが特徴である。ユルタは骨組みとフェルトで構成され、どちらも中央アジア発祥のものである。ユルタには2系列があるとされ、東部に住むモンゴル部族系で使用されるモンゴル型もしくはカルムク型か、西部に住む民族で使用されるキルギス型もしくはトルコ型である(図64)。ユルタの構造部分については前述したので省略する。これらのものをD系列で示す。

D-1 モンゴル型-カルムク型の天幕

モンゴル型の天幕は、モンゴル部族で使用される。重い天窓があるために中央に柱が設けられ、また垂木が直線である。住居内部は炉を中心に男性の居場所と女性の居場所が分けられ、中心の炉を基点に周縁にものが配置される(図65)。

D-2 キルギス型-トルコ型の天幕

キルギス型の天幕は、キルギス族、カザフ族、ウズベク族、そしてイランなどのトルクメン族など西部で広く使用される。モンゴル型と違い中央に柱は設けられず、垂木は曲線を帯びる。中央に炉が設けられる。

D-3 シャールサバン族の天幕

イラン北西部に住むシャールサバン族の天幕であるアラッチは、正確にはユルタではなく、その形態は丁度ユルタから円形の壁を抜いたようなものである(図66)。天窓には1本の綱が地面に向けて張られる。キルギス型ユルタがドームの形を持っていることから、その影響を考えられる。

以上トーポー・フェーガーによる天幕の分類を確認した。最後に、佐藤浩司らが記述する組み立てを伴う仮設性を持つ住居を確認する⁶⁵。なお、後述するこれらの住居は、必ずしも解体を伴わない。民族ごとに状況は異なるが、放棄し、新たな住居を設ける場合もあり、それは彼らの住居が敷地周辺の自然環境から取

⁶⁵住まいをつむぐ 佐藤浩司編 学芸出版社

ってきた材料できているためである。そこには都度の材料採取を含めた生き方がある。しかしながら、移動を伴った先でのこれらの住居では、解体と組み立ての2項が必ずしも付随しなくとも、継起するする組み立てによる過程からは仮設性という視点は取り除けない。またそのような住居をまとめた佐藤は著書の中で、住居の本質とは何だろうという問いかけとともにこのような言葉を述べている。

住まいなどはつまるどころ、それ自身が容易に置換可能な、使い捨ての道具にほかならないのである⁶⁶。

上記のように述べた佐藤の視点からは、前項にて述べた住居が表す身体以上の視点とかぶるものがある。以下、身体以上に拡張される住居たちをE系列で示す。

E-1 マレーシア/ブナンの住まい

マレーシアのボルネオ熱帯雨林に住む狩猟採集民ブナンの住居である(図67)。彼らはいくつかのベースキャンプを建て、その間を行ったり来たりする。移動は数週間から数カ月おきに行われる。熱帯雨林の生態と深く関わり合いながら生活してきたかれらは、行政の定住政策もありながら、森での生活を続けている。住居は高床式の小屋でありラミンと呼ばれ、ブナンの世界観が反映され間仕切りや家具がなく、祖先や精霊をまつる祭壇もない。外壁がないことさえしばしばである。ラミンには特定の間取りや建設ルールがあるわけではないが、ブナンは子供のうちからラミンを建設する方法を学ぶ。狩猟に行く際は、ベースキャンプであるラミンから離れるため、寝るスペースほどしかない仮小屋のタブン^{Tapan}を建てる。タブンは規模の違いはあるがラミンとほとんど同じであり、それらは手近に入手可能な材料からつくられる。敷地は水場の近くや周囲に食料が残っていることに加え、建てる際に必要な屋根葺材が手に入る場所が選ばれ、また強烈な多様な光や熱帯のスクールの直射を避けるため、森の中の平坦地が選ばれる。一般的に仮小屋のタブンは片流れの屋根であるが、規模の大きなラミンは切妻になる。骨組みを建てるのは男性の仕事で、1時間ほどあれば可能である。骨組みをつくる間に女性は屋根と壁に使う葉の採取と加工を行う。こうして、小さなタブンなら3時間あれば建てることができる。佐藤はタブンについて「それをつく

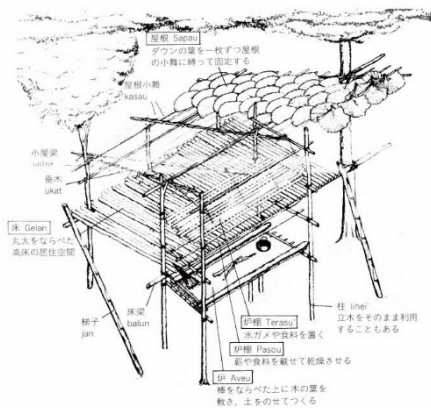


図 67 ブナンの住まい 出典 住まいをつむぐ 1998

⁶⁶住まいをつむぐ p7 佐藤浩司編 学芸出版社

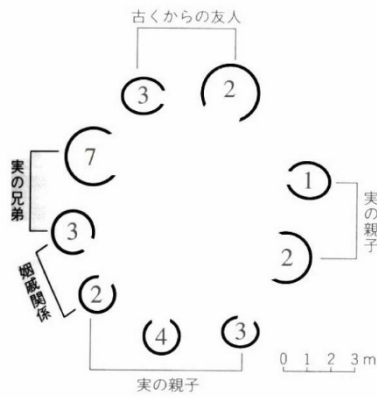


図 68 ピグミーの住まい キャンプの配置 出典 住まいをつむぐ 1998



図 69 ピグミーの住まい 出典 住まいをつむぐ 1998

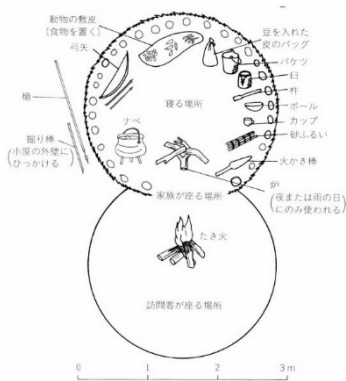


図 70 ブッシュマンの住まい 出典 住まいをつむぐ 1998

ることによって、彼らは彼らであることのよろこびを発見していく」と述べ、プナンの住居は実践者自身を変容せる質を持っていることが分かる。

E-2 コンゴ/ピグミーの住まい

コンゴ民主共和国に住む狩猟採集民エフェ・ピグミーの住居である。彼らは季節によっては森の中で狩猟採集を行い暮らしている。森の中での生活ではキャンプ地をつくり生活する。敷地は小川に近く、緩やかな斜面か周囲より少し高い場所が多い。1つのキャンプ地には20人から50人ほどが住み、10軒内外の家が建てられる。キャンプ地に円をつくるように家は建てられ、入り口は基本的にキャンプ地の中心を向く。親族などは隣同士となるように、家の配置は人間関係を如実に表している(図68)。約2週間から2カ月ごとに森の中のキャンプ地を移動する彼らは、その際に持ち物をほとんど持たない。家はドーム型をしており、高さ1.2-1.5m、床の直径は2-3mと小さい(図69)。骨組みの木とそれを覆う葉は森から採取される。骨組みをつくるのは1時間にもかからないが、葉で覆う作業は何度かの中断をはさみながらつくられるため、数日かかる。キャンプを移動する際に家は放棄され、新たなキャンプ地ではそれらを補修するか新しくつくられる。

E-3 ボツワナ/ブッシュマンの住まい

ボツワナ、カラハリ砂漠にすむ狩猟採集民のブッシュマンの住居である。元々は遊動生活を行っていたブッシュマンであるが、現在はそのような生活ではなく、集落の中で定住しその中でキャンプ地を定め生活を行う。キャンプのメンバーはとても流動的であり、変化が激しい。キャンプ地は、集落内のどこでもよく、いわば集落内で遊動した生活を行っているとも言える。その際、薪に利用する木々があることや、トイレのときに身を隠せる茂みがあるところを選び小屋を建てる。遊動生活を行っていた際の小屋は、木の骨組みのドーム型であり、2-3時間でつくられるものであったが、現在的小屋は数週間かけてつくられるものである(図70)。小屋は円形に組んだ木の壁と傘型の屋根でつくられ、2-3年ごとに小屋を解体して移動させるか、キャンプごとに移動する。小屋をつくるのは主に女性のしごとだが、最近は男性も手伝っている。

E-4 オーストラリア/アーネムランド・アボリジニの住まい

オーストラリアのアーネムランドにいるアボリジニの住まいである。彼らは、狩猟採集を生業としてきており、男性が大型動物、女性が小型のものの採集をするなど性による分業がなされてきた。彼らは他のアボリジニと比べて定住的であるが、季節に応じてキャンプ地への移動と、そこでの狩猟採集を行っている。住居は、乾季と雨季で異なり、乾季では雨がほとんど降らないため、掘立柱を2-4本立て桁をわたし、葉やテントをかけるだけのようなもので、30分ほどでつくられるきわめて簡易なつくりの住居になる。片流れの住居をクンジュレと言い、陸屋根のものをバラッバラと言う(図71)。バラッバラは犬や豚から食料を守るため上にのせる場合もある。壁はない場合とユーカリの枝をさしかける場合がある。また雨季の場合はバラッバラに樹皮を乗せたものをつくり、壁にも同一の樹皮を立てかける。土間形式の場合もあれば、状況に応じて30cmほどの床をつくる場合もある。これらは場合によっては柱を連続させ、ロングハウスの形式をとる。バラッバラ・ドロボッケンと呼ばれる住居では、床の高さが1.5-2mの高床になり、掘立柱6-8本たて、うち2本を棟柱としてたてる。屋根を支える柱の脇に束をたてることで、床を支える。バラッバラ・ドロボッケンでは、屋根を構成する骨組みのうちに床を構成する骨組みをたてるため、2重の骨組みの構成になる。



図 71 アボリジニの住まい 出典 住まいをつむぐ 1998

E-5 ネパール/グルンの住まい

ネパールのヒマラヤで暮らす移牧民グルンの住居である。羊の移牧を行う彼らは、定住家屋と移動先の住居の間を行ったり来たりする2拠点暮らしを営む。集落ではトウモロコシなどの二毛作や水稲耕作も行われる。定住家屋はガールと呼ばれ、移動先のキャンプのものはゴートと呼ばれる(図72)。グルンの集落が位置するのは標高約1000-2000mのところであり、そこから放牧地が位置する4000m近いところまで移動している。移牧とは、山地の標高差を利用し季節により上下移動することであり、グルンの移牧範囲はヒマラヤ山脈に広がっている。滞在は放牧地の状況により異なり、短くて1日長くて10日である。ゴートは、分解による持ち運びが可能であり、ギャン式ゴートとゴート式ゴートの2種類がある。ギャン式は、石を組積し壁をつくり、そ

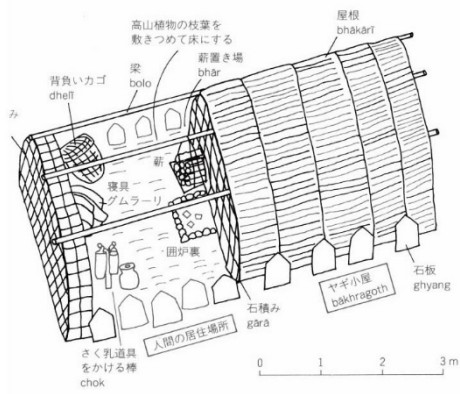


図 72 グルンの住まい 出典 住まいをつむぐ 1998

ここに垂木をわたし屋根をかける。石積みの壁のみ移動する先々に残してあるため、毎回それらを修復して使用する。ギャンとは、地面に埋め込まれた石板のことである。ゴート式は壁がなく、柱を立て梁をわたし屋根をかけるものである。彼らは、他の民族同様に移動する先の自然環境から住居素材をうまくとっており、例えばギャン式の石は高山緑地を流れる小川の石であったりする。住居は羊飼いが一人でつくり、30分程度でつくられる。それぞれのゴートは、内部を人と動物で分け合っており、彼らの暮らしは動物とともにある。そのような状況に応じてつくられる簡素なつくりの住居のもとにあるのが、人と動物が助け合いながら暮らす移牧生活である。

図 73 プロット図 筆者作成

天幕 トーボー・フェーガー 1985
住まいをつむぐ 佐藤浩司編 1998

<https://www.vectorworldmap.com/>を元に作成

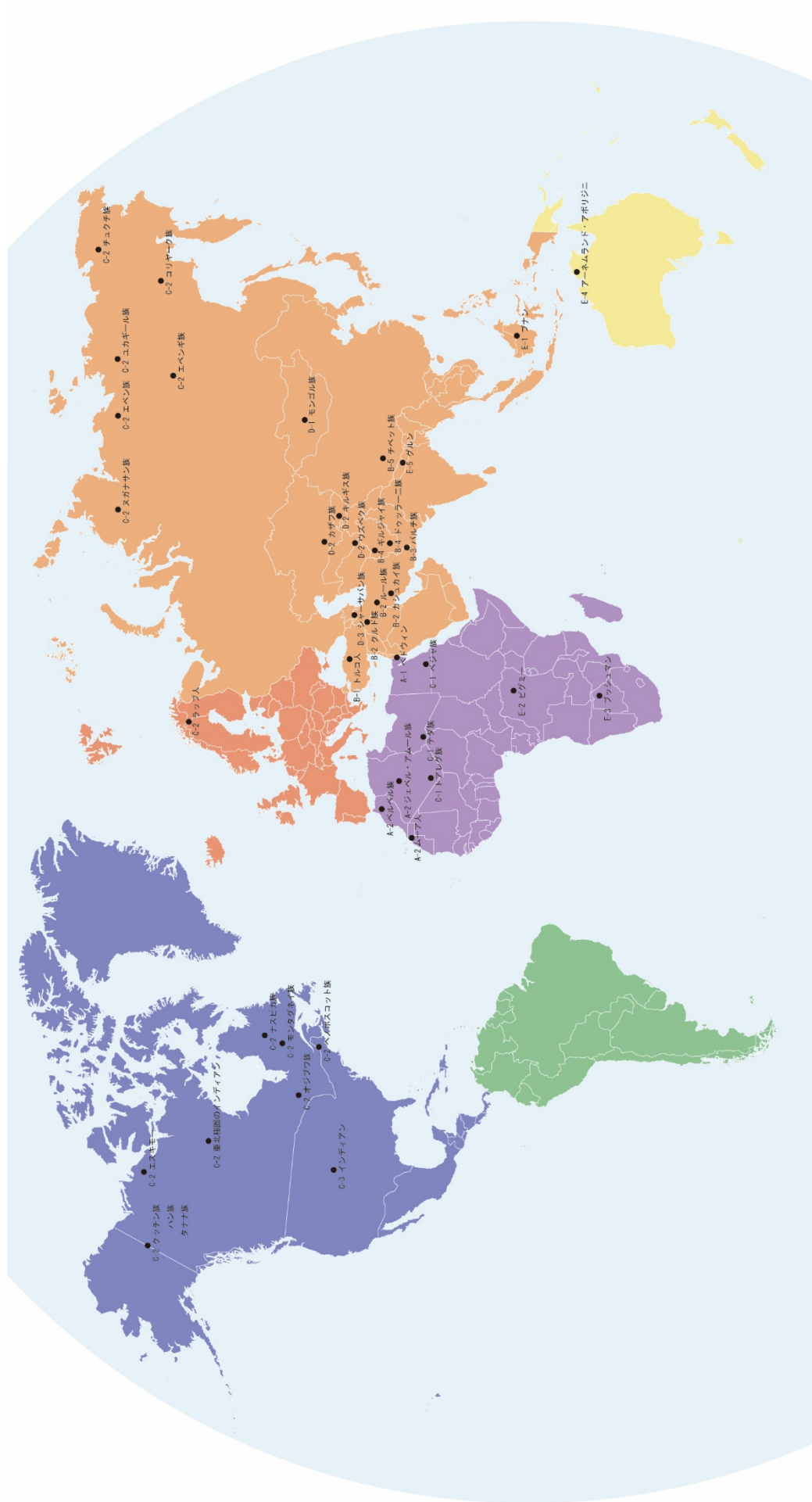


図 74 プロット図 筆者作成

天幕 トーボー・フェーガー 1985
住まいをつむぐ 佐藤浩司編 1998

<https://www.vectorworldmap.com/>を元に作成

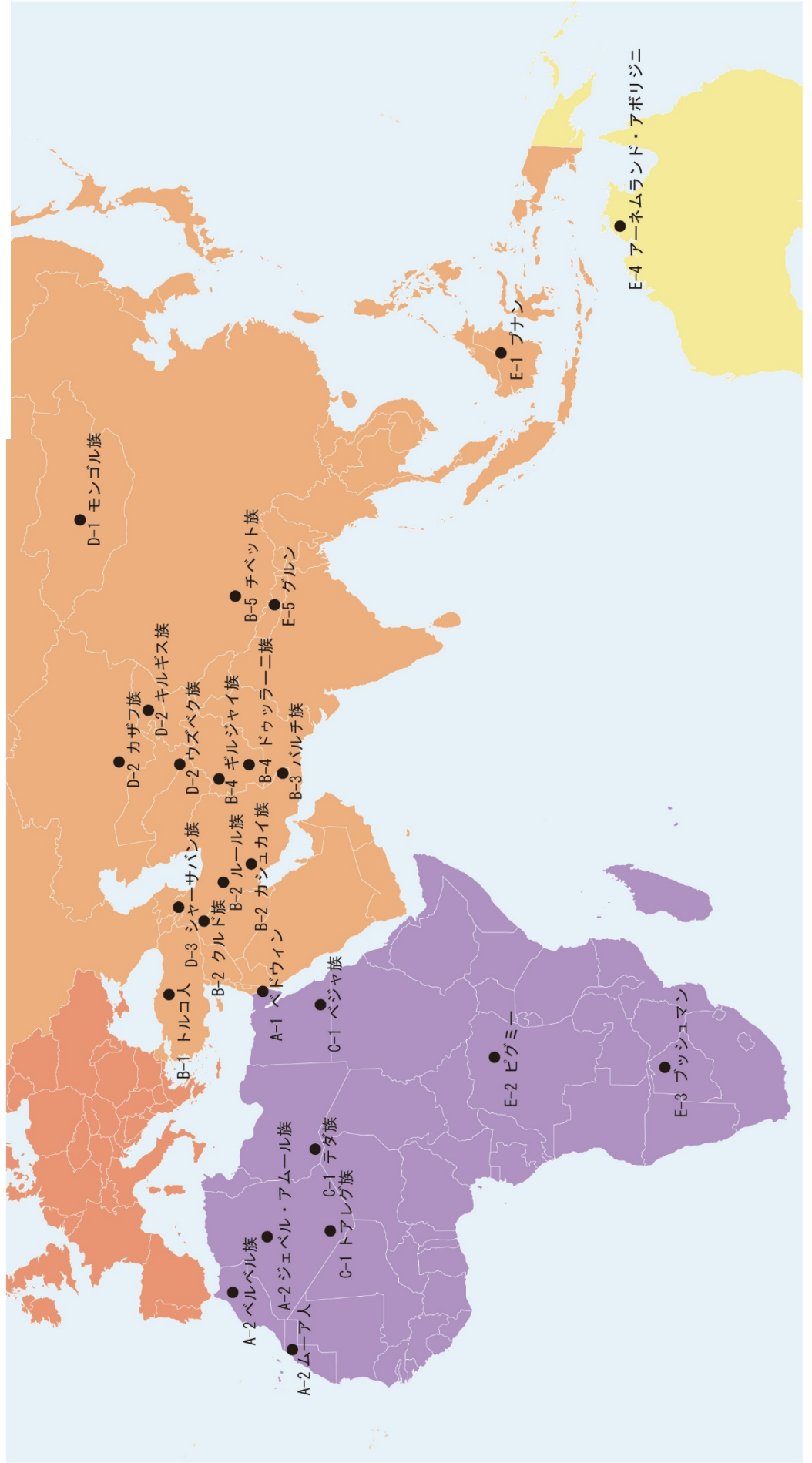


図 75 民族別参考図 出典 トーボウ・フェーガー 1985

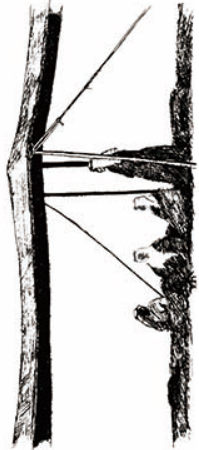


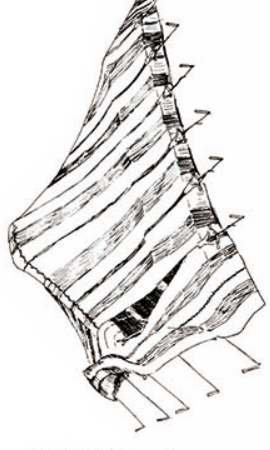
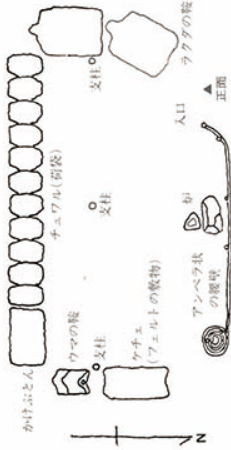


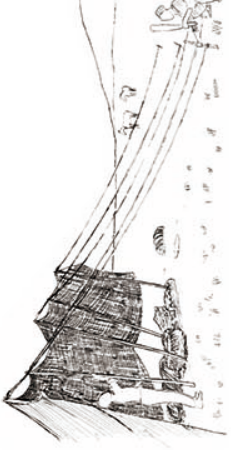


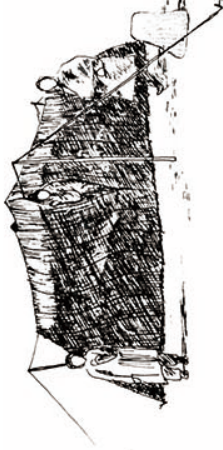
 <p>A-1 ベドウィン</p>	 <p>A-2 ベルベル族</p>	 <p>A-2 ムーア人</p>	 <p>A-2 ジェベル・アムール族</p>
 <p>B-1 トルコ人</p>	 <p>B-2 クルド族</p>	 <p>B-2 ルール族</p>	 <p>B-2 カシユカイ族</p>
 <p>B-3 バルチ族</p>	 <p>B-4 ギルジャイ族</p>	 <p>B-4 ドゥラナー二族</p>	 <p>B-5 チベット族</p>

図 76 民族別参考図 出典 天幕 トーポー・フエーガー 1985

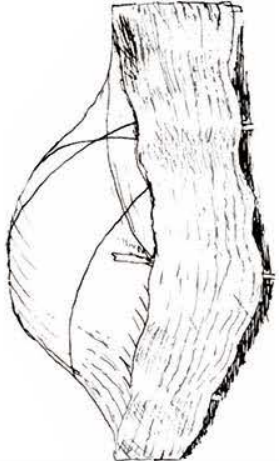
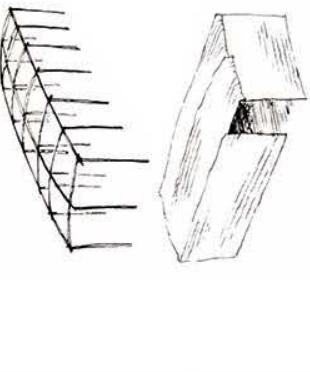
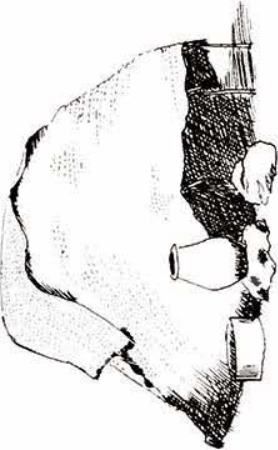
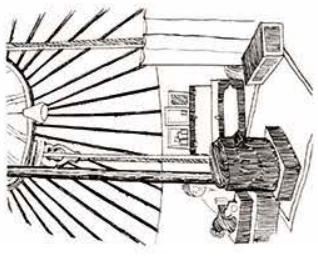
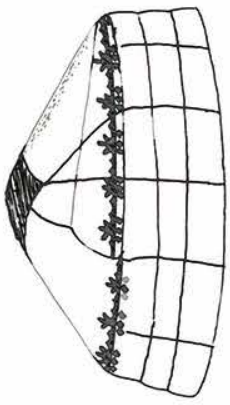

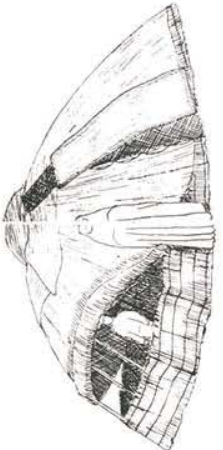





 <p>C-1 トアレグ族</p>	 <p>C-2 テダ族</p>	 <p>C-3 ベジヤ族</p>	 <p>D-1 モンゴル族</p>
 <p>D-2 キルギス族</p>	 <p>D-2 カザフ族 ウズベク族</p>	 <p>D-3 シャーサバン族</p>	 <p>E-1 プナン</p>
 <p>E-2 ピグミー</p>	 <p>E-3 ブッシュマン</p>	 <p>E-5 アボリジニ</p>	 <p>E-5 グルン</p>

図 77 プロット図 筆者作成

天幕 トーボー・フエーガー 1985

<https://www.vectorworldmap.com/>を元に作成



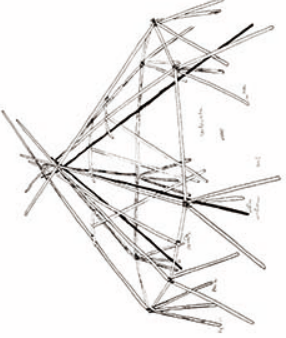
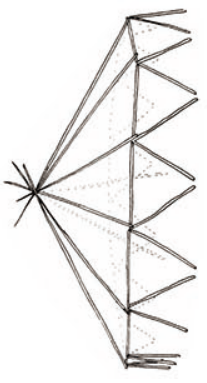
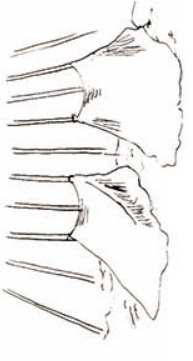

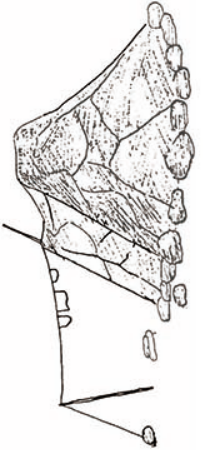
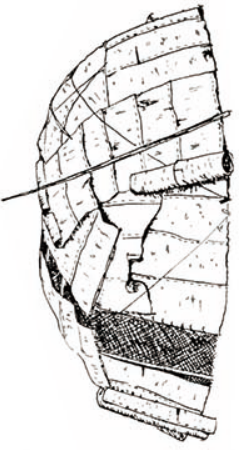
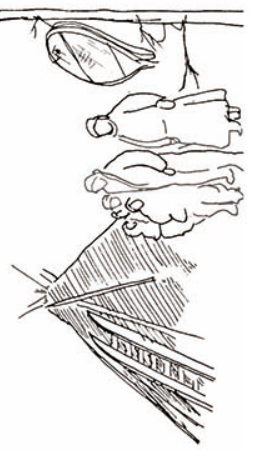


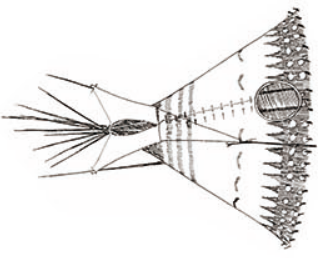
図 78 プロット図 筆者作成

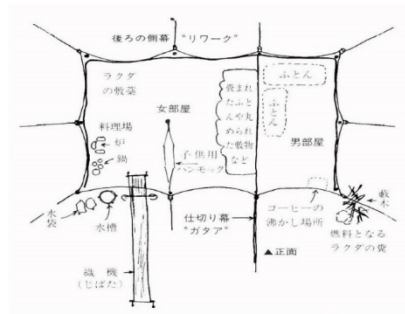
天幕 トーボー・フエーガー 1985

<https://www.vectorworldmap.com/>を元に作成

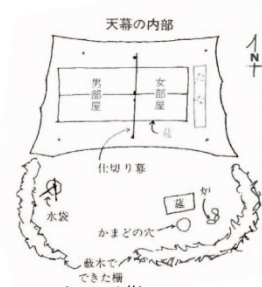


図 79 民族別参考図 出典 天幕 トーボニー・フェーガー 1985

 <p>C-2 コリヤーク族 チュクチ族</p>	 <p>C-2 ユカギール族 エベン、エベンギ族</p>	 <p>C-2 ヌガナサン族</p>	 <p>C-2 ラップ人</p>
 <p>C-2 エスキモー</p>	 <p>C-2 オジブワ族</p>	 <p>C-2 ナスカピ族</p>	 <p>C-2 モンタグネイ族 ペノボスコット族</p>
 <p>C-2 クッチン族</p>	 <p>C-3 インディアン</p>		

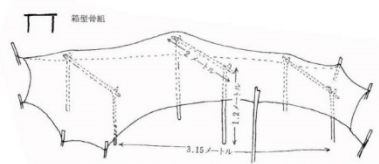


A-1 ベドウィンの天幕



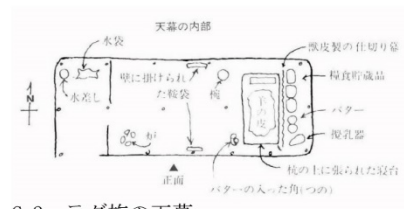
A-2 ムーア人の天幕

骨組みに仕切り幕をつけることで男性の空間と女性の空間を分ける。

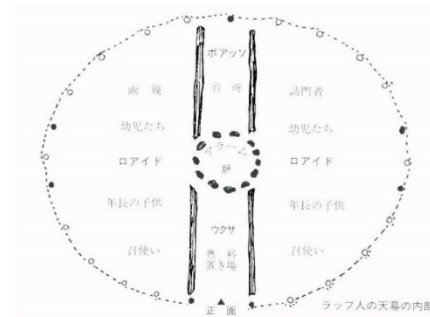


ケルレラ族の天幕。このような形態を作る骨組は、無数といってよいほどある。各部族はそれぞれ独自の骨組を得意としている。右側のいくつかの骨組構成図はニコライセン(1963)によって収集されたマリエーションの一部を示す。

C-1 トアレグ族の天幕

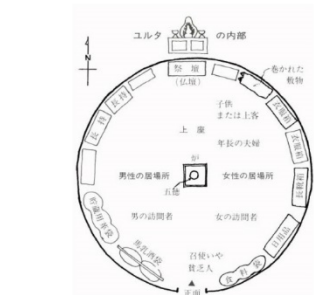


C-2 テダ族の天幕

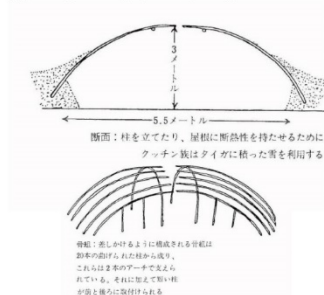


C-2 ラップ人の天幕

骨組みが囲むことで中心に炉を配置し手前と奥、右と左、中心と周縁などの秩序が生まれる。



D ユルタ
周縁にもものが配置される。



C-2 クッチン族の天幕

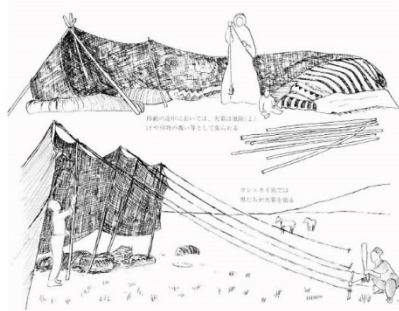


E-2 ピグミーの住居

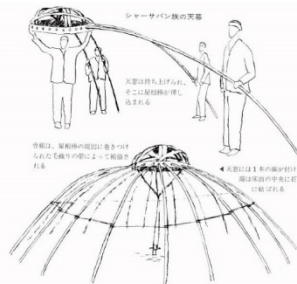
それぞれの諸民族は住居ごとに同じような骨組みを連続させることで住居を構成している。仮設的空間において重要視される簡素なつくりは、持ち運びやすさや加工しやすさを考慮しつつも周辺環境や自然の無秩序な猛威に対して、完成された秩序を内部にもたらすことで抵抗してきたと言える。この反復する骨組みを土台に暮らしは成り立っている。

▶▶▶▶▶ **反復性**

図 80 文献調査から得られた空間的性質 「反復性」



A-2 ベルベル族の天幕
天幕の骨組みを利用し、簡易な滞在場所をつくることもしばしばである。



D-3 シャーサバン族の天幕
多くの仮設的空間は、天幕の1人ではつくられず、協働のかたちを取る。

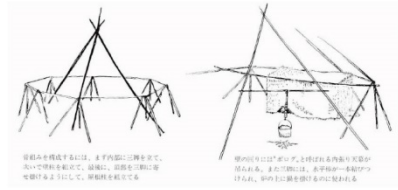


C-2 ヌガナサン族の天幕
タイガの円錐形天幕の骨組みは、ときに野営地に放置されることもある。



E-2 ビグミーの住居

放置されたものを補修し再利用することも。場所への意味付けの再生産とも言えるそのような振る舞いには、自然により手が加えられたことで、実践者以外の主体の存在を示唆するものである。



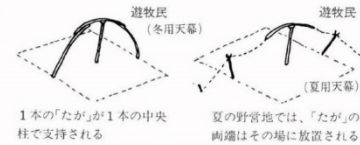
C-2 コリヤーク族の天幕

骨組みに掛けられる食器により、内部での食事等が可能になる。

住居を道具のように扱う生活の仕方は、骨組みに対して身体が存在を近付けることで成り立つ。そこには、主体による組み立てを通じた場所への馴染みがあり、場所と骨組みの深い結び付きがある。またそれは、住居それ自身の変容が、独自の意味付けをされることでなされる。ときに骨組みは何かを引っ掛けるものになったり、覆いは外部空間へ接する最初の皮膚となり、環境変化を内部に伝える。



半身体性



1本の「たが」が1本の中央柱で支持される

夏の野営地では、「たが」の両端はその場に放置される

B-4 ドウッラー二族の天幕

タイガの天幕のように、彼らの天幕の骨組みの一部は野営地に放置される。



E-5 グルンの住居

覆いだけを持ち運び骨組みを放置することは、途中で解体作業を中断することでもある。そこには実践者による部分的な解体と共に風や雨などの自然環境にさらされる骨組みがある。住居に対する様々な作用を受け止め、ときに実践者は再利用もいとわれない。そこにあるのは、住居に関わる複数の主体の存在に寄りかかりながらも抵抗する、転倒した関係性を内包するおおらかな生活である。

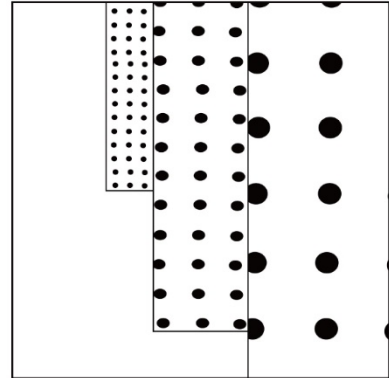


有転倒性

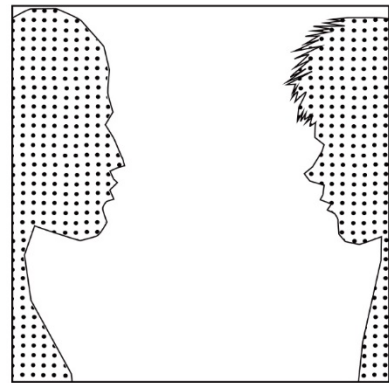
性質



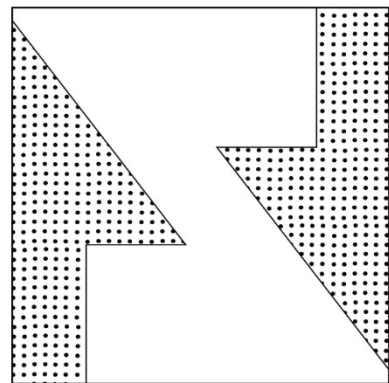
図化



反復性



半身体性



有転倒性



図 82 空間的性質の図化

2-2 「仮」の暮らしに潜む空間的性質と分解過程

前項では A-E 系列の仮設的空間の概観を示したが、それらから分かるように部分的もしくは全体的な解体や組み立ては移動と切れない関係を結ぶものだった。またそれを成り立たせる木の骨組みや葦や樹皮、獣皮などは一時的に周辺環境から「借りる」ことで「仮」の生活を営むものであり、その中で継起する解体や組み立ては移動という形態をとった。この移動とは、周辺自然環境の住居への転用と、場所の一時的な間借りを伴うものである。そうした場所との対面を通した暮らしは、住居内部を 1 つの宇宙と見なすような諸民族の価値観や文化を生んできた。イーファー・トゥアンは著書の中でそのような価値観を通した空間を神話的空間と呼び、それについて述べている。その中で神話的空間には 2 種類あるとし、1 つ目を経験的に知られているものの周辺に存在するものであり、他方がある世界観を構成する空間的部分としている⁶⁷。前述してきた諸民族の仮設的空間における住居内部へのそれぞれの価値観の反映は、彼が言うところのある世界観を構成する空間的部分に当てはめられるものであり、後者の神話的空間として説明ができる。

世界観とは、ある民族が環境の意味を何らかのかたちで把握しようとする試みのことである⁶⁸

仮設的空間における諸実践は、この試みを形作る手助けをしていると言えよう。そしてその根幹にあるのは、つくられる骨組みを通した場所の獲得であり、その場所への意識は神話的空間により再生産される。

この神話的空間は、空間に個性をあたえ、そうすることによって空間を実質的には場所に変化させる⁶⁹。

右と左、奥と手前や中心と周縁などの観念は、獲得された場所を空間化することで再獲得される 2 次的な場所である。それにより、敷地である場所→神話的空間→世界観が反映された場所、という連関により暮らしは成り立っていると言える。そしてこの連関は、解体と組み立てを繰り返すことで反復する。そのとき、後述するように場所は複層的なイメージを獲得するのである。

⁶⁷空間の経験 p157 イーファー・トゥアン ちくま学芸文庫
⁶⁸空間の経験 p160 イーファー・トゥアン ちくま学芸文庫
⁶⁹空間の経験 p166 イーファー・トゥアン ちくま学芸文庫

イーファー・トゥアンは未知のものを知るためには既知の背景があることが必要と述べたが⁷⁰、厳しい自然環境の中身体とわずかな道具や動物と共に暮らす彼らの暮らしには、自らの生活を形作るための既知の世界観が必要だったのだ。なお前章での鴨長明の方丈庵の描写における極楽浄土への言及は、この神話的空間を外の世界に見たものであると言えるが、これはイーファー・トゥアンが述べた1つ目の神話的空間のことである。方丈庵において見られた神話的空間は、「直接的経験を通して日常的に接触する馴染みのある諸空間を概念の上で拡大したもの⁷¹」と述べられるように、極楽浄土の観念を、住居の周辺環境に当てはめたものであった。このようにUSMとの繋がりが示すのは、前章で言及した「生きる」ことの内に「ある尺度をつくる生活の仕方」が神話的空間としてつくられていたことであり、仮設的空間にUSMを当てはめること確かさである。また、反復するのは場所への観念だけではない。骨組みは、間取りをつくる際の1つの尺度であり、構造の簡略化を伴う快適さを生んだが、それに伴う骨組みの反復も世界観を構成する要素であると言え、これらの反復する性質はUSMにおける1つの空間的性質であると言える。

住居の概観において骨組みをつくりそれを覆うという基本的な構成はA-Eで共通するものだが、その中でも部材を全て持ち運ぶか否かという違いが見られた。これは、部材を野営地に放置するときは次の野営地で再度部材を獲得するようなものや、過去使用され放置された部材を再使用するものなどがあったように、仮設的空間において全体的な解体は必ずしも付随しないことを示すものだった。しかし、骨組みを放置する代わりに天幕地のみを持ち運ぶように、部分的な解体はあった。これらの現象に対しては、解体という言葉を使用するよりもむしろ分解という言葉がふさわしい。分解という言葉に含意されるのは、実践者を取り巻くものや場所と動物や自然環境などによる相互作用である。藤原辰史は著書の中で、分解を生態学的な視点に依拠しながら人や生物など様々な存在のなかに現れる「うつろう作用」として紹介する⁷²。

分解は、一個体では完遂できない。分解する側の複数のアクターの協力関係のみならず、分解する側と分解される側の暗黙の協力関係が前提である⁷³。

70空間の経験 p160 イーファー・トゥアン ちくま学芸文庫

71空間の経験 p157 イーファー・トゥアン ちくま学芸文庫

72分解の哲学 p270 藤原辰史 青土社

73分解の哲学 p258 藤原辰史 青土社

解体という言葉では捉えきれない、複数の存在の空間への関りを分解という言葉は含意する。藤原の複数の存在を含意する視点は、イーファー・トゥアンが場所との出会いに関して述べる視点と共通する。彼は、親密な経験という曖昧な言葉を説明する際、場所への感覚の背後に潜む個人的な経験があることを述べた⁷⁴。この親密な経験とは、多木の「生きる」ことに含意される個人的な記号化の過程とその解読である。そしてしばしばその個人的な経験は彼が社会的な見解と呼ぶ、より巨視的で普遍的な経験に屈すると述べる。しかし、そうした中でもその経験は消えないのであって、むしろ社会的な見解の背後にあるものを見据えることを重要視する立場を彼は取る。

その場所の特質と、われわれとその場所の出会いの特質は、そのようにして捉えることはできない。つまり、そこには、われわれが視界の片隅で見ると、われわれの背後にあるほとんど凍てつくような陽光の感覚が存在していなければならぬのである⁷⁵。

場所との出会いとは、上記のような複数の存在の場所への関りである。そしてそれは「うつろう作用」としての分解が含意する複数の存在に対する眼差しと繋がる。USMにおける分解という作用は、解体と組み立てを通した物理的現象にのみ適応されるものではなく、場所へ複層的に積み重なる経験への意識を含むものであって、それは日常生活をおおらかに包む1つの「自らがある尺度をつくる生活の仕方」となるのである。仮設的空間における都度の部材の切り出しや覆いをつくる行為には、住居がより身体に負っていることを示すものであったが、そのような身体の拡張された先にある半身体という意識の中で放置された骨組みは、風雨に晒されることで劣化を伴う。そこにあるのは主体である実践者による部分的な分解であり、もう一方の客体である動物や自然環境による残りものの分解である。そしてそれらの客体が主体として住居に関わる関係が生まれることで、実践者のみが住居の構成に関わるのではなく、自分たちが居なくなった後の存在を見据える暮らしには主体と客体の転倒した関係性が付随する。そのように分解を介して時に主体と客体の転倒を伴う暮らしは、「それ自身が容易に置換可能な、使い捨ての道具にはかならない」と佐藤が言ったように、他の存在に負うも

⁷⁴空間の経験 p258-261 イーファー・トゥアン ちくま学芸文庫

⁷⁵空間の経験 p262 イーファー・トゥアン ちくま学芸文庫

のであるからこそ起こり得るのである。

USM の根底に潜む分解についてはこのように理解することができ、それは場所の潜在的有用性を受け入れる実践者が、受け入れるための根拠とするものである。容易に置換可能な存在に潜む相互的な分解があるからこそ移動を可能にするのであり、解体と組み立てを通した一連の流れを「うつろう作用」としての分解を基点に見据えることで、ある場所の潜在的有用性は実践者にとって意味のあるものとなると言える。仮設的空間における住居それ自身の変容は、場所の潜在的有用性とそれを受け入れる人の分解を見据えた眼差しがあって成り立つ。このようにUSMとしての仮設的空間の生活の営みは分解を基点に成り立っていると想定することで、前章にて「生きる」ことに関連し言及したブリコラージュにおける非-恣意性も、分解が含まれる空間のありかたに適応することができるだろう。完全に自由な形態は、USMにおいては場所への眼差しの中で否定され、代わりに場所の物質性に拘束されつつも潜在的有用性を受け入れることで、場所ごとの空間の「使いこなし」が生まれるのである。その背後にあるのは、分解のもとにある移動を通し最終的に「立ち去る」ことを見据えた生き方である。

移動を伴う生活にあるのは、そのような意味で住居を道具のように扱い場所に対面する建築以下身体以上の視点であり、そこには「うつろう作用」としての分解を通した半身体性、有転倒性と呼べるものが付随する。これら2つの性質もUSMにおける空間的性質と言え、前述した「反復性」に加えて「半身体性」「有転倒性」の3つを、文献調査を通して獲得できるUSMの空間的性質とすることができる(図80-82)。また上述してきた意味での分解を見据える空間への関りを便宜上USMにおける分解過程とする(図83)。

しかし、世界に存在する仮設的空間を確認してきたが、こと現代社会においてこのような「仮」の生活をするのはあまり現実的ではないだろう。それは多木がシュヴァルの理想宮において言及したように、1つの夢のようなものと言える。それは、分解過程を伴う移動生活にはまず広大な土地が必用であるし、国や行政の目をかいくぐる必要があるからである。

18年間、仮住まいで暮らしていた。だから、仮のものがずっと続くことが頭のなかに刻み込まれ、〈居住する〉って本当は何を意味しているんだか分からなくなってしまった⁷⁶。

⁷⁶移民の記憶 マグレブの遺産 p136 ヤミナ・ベンギギ

上で述べられているように、一時的でその場限りでの間借り暮らしは居住することの意味を揺さぶってくる。フランス植民地であった北西アフリカ諸国からの移民は、フランスで行政からの管理をある程度受けながら暮らしてきた。その中で彼らは「仮」の住まいを提供され、一時的な暮らしと称された間借り生活を長く続けた。現代における「仮」の住まいは、ときにこのようなびつな形態をとる。そこにある「仮」という言葉には、世界に存在する USM としての仮設的空間のような「借りる」内にある分解過程を伴わず、「貸される」という言葉を含意するものだ。「仮」を取り巻く居住環境の変遷には、環境要素を「借りる」暮らしから「貸される」暮らしへの変化があったと言えるのかもしれない。では、実際の USM での様々な間借りの仕方、人-もの-場所の出会いのもとにある、「使いこなし」はどのように営まれるのだろうか。次章から、ものや場所を「借り」ながら「仮」の生活を営む住居や屋台活動に焦点を当てフィールド調査を行うことでそれらを探っていく。

仮設性

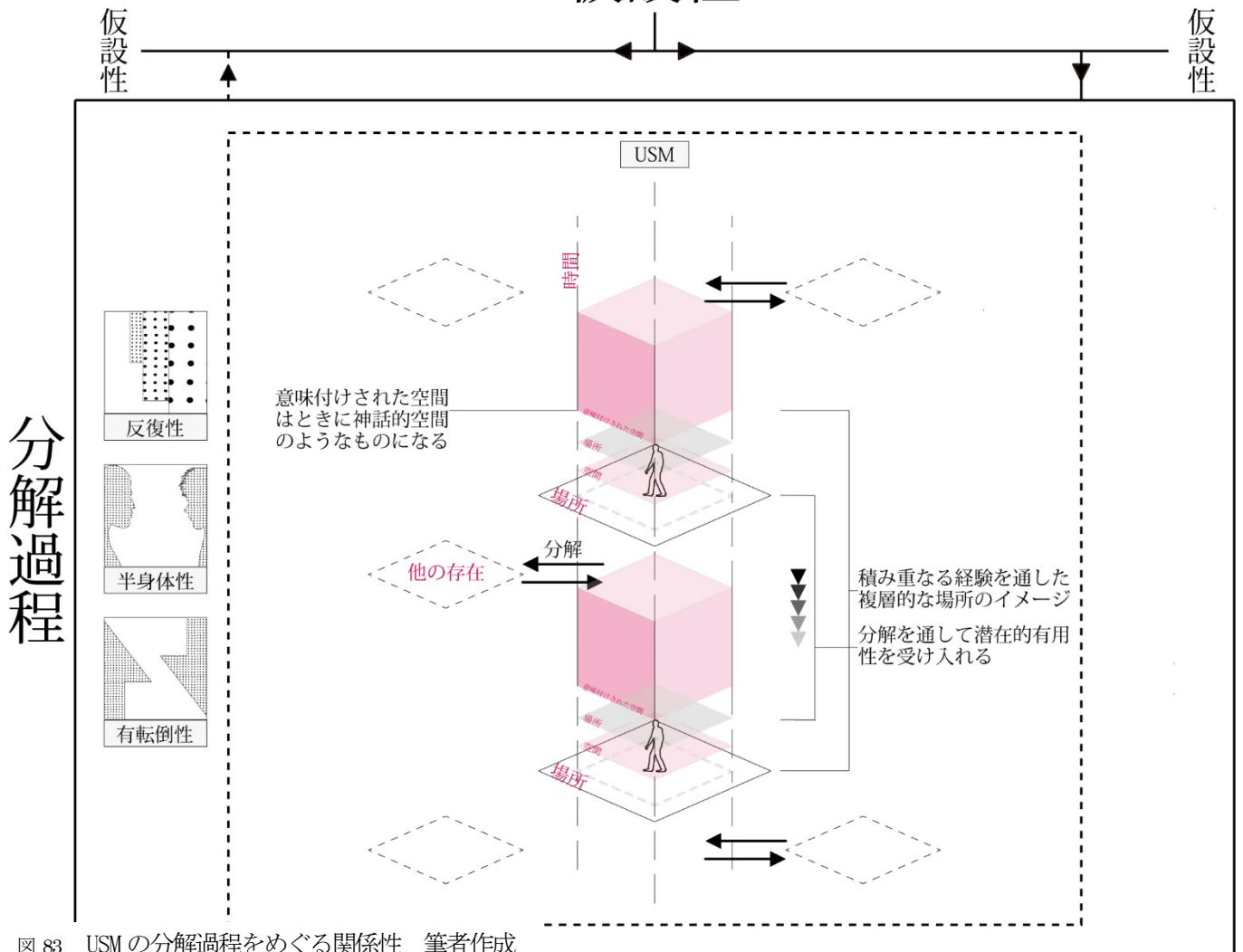


図 83 USM の分解過程をめぐる関係性 筆者作成

3章 フィールド調査-キルギスの住居とタイの屋台-

3-0 3章の構成

3章では中央アジアのキルギス共和国(以下キルギス)と東南アジアのタイ王国(以下タイ)におけるフィールド調査を行う。対象はキルギス族が使用する天幕住居と、タイ・チェンマイ市街地の屋台活動群である。まず、住居であるキルギスの調査について述べた後、タイ・チェンマイでの屋台活動について述べる。その際活動を行う主体を実践者として記述し、図面は特筆がない限り実測図を元に作成したものである。またその調査から得られた性質を図化し示した後、建築にあてはめ評価をすることで、出会われる空間の体系を考察する。

3-1 フィールド調査-キルギスの住居・ボズユイ-

前章で引用したトーボー・フェーガーの記述ではキルギス族の天幕はフェルトが使用されるユルタであったが、調査地では伝統的ユルタの使用は確認できず中国製の工業製品に代わっていた。しかしキルギス型の系譜上にあるものとして記述することで、前節の概観を踏まえた上での USM の人-もの-場所の出会いのありようを確認する。調査地が位置するキルギス国の概要について人類学者の吉田が書いた著書を参考に述べ⁷⁷、その後敷地について述べていく。調査は2019年8月5日-8日までに行われた。同行者はキルギス語-日本語通訳者が1名と調査地までの現地協力者家族である。なお、特筆がない限り写真は全て筆者撮影である。

3-1-1 キルギスについて

キルギスは天山山脈北西部に位置し、総面積は19万9900km²で日本の約半分程であり、平均高度が約2750mと高い山岳国である(図84)。首都はビシュケクである。多民族国家であるが、キルギス人とウズベク人、ロシア人を合わせた3民族で全人口の91.2%を占める。1991年にソヴィエト連邦(以下ソ連)から独立した元ソ連構成国であり、公用語はキルギス語とロシア語である。調査地であるナルン州はキルギスの中部にある山岳地方



図 84 キルギス

中央アジアに位置し、国境は左回りにタジキスタン、ウズベキスタン、カザフスタン、中国と接する。

⁷⁷中央アジア農村の親族ネットワーク p55-68 吉田世津子風響社

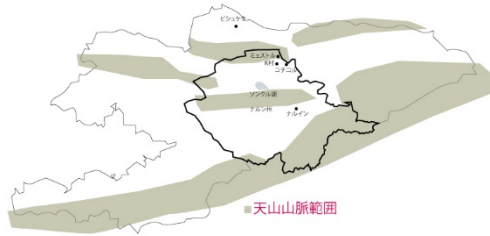


図 85 天山山脈範囲

中国国境から広い範囲にわたってある。

であり、中部山岳地方の生業としては伝統的に畜産が主体で穀物、ジャガイモも生産している。キルギス人の主要な宗教はスンナ派イスラームであるが、過去のソ連政府によるイスラーム弾圧によってかなり柔軟なイスラームとなっている。キルギスの特徴として、テュルク系諸民族のムスリムが多く住む南部の地域とスラヴ系が多く住み、ロシアの影響を受けやすい柔軟なムスリムが多く住む北部と、南北で地域性が異なることが挙げられる。現在のキルギスの領土原型は、1924年のソ連における「民族-国家別境界画定」によるものであり、中央アジア諸国の原型はこの時の境界画定によるものである。また当時は「ロシア共和国カラ・キルギス自治州」であったが、その後変遷を経て1936年にキルギス・ソヴィエト社会主義共和国が成立した。

調査地のコチコル地区があるナルン州は、天山山脈の北西部に位置し最低でも標高約1500mの高山地帯であり、州の人口は約25万人である(図85)。1920-30年代までは遊牧が主体だったが、91年の独立までに畜産に特化したとされる。主な家畜は羊・馬・牛であり、現在行われる夏営地の牧畜はこれら動物のためのものである。ナルン州の南部は国境が中国と接しており新疆ウイグル地区のカシュガルまで道路が通じている。このため中国産のものや中国企業の進出も多い。ナルン州の州都はナルインで、調査地はナルインとビシュケクの間位置する。

3-1-2 敷地概要と用語について



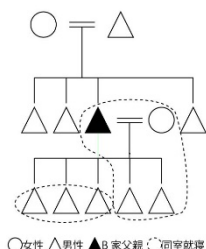
図 86 K村の境界

コチコルからの道中にある K 村の境界には天幕を模した看板がある。



図 87 ナルン州

コチコルからおよそ 40 分のところに K 村は位置する。そして K 村から車と馬の移動で 4 時間ほどのところにミュストルはある。



○女性 △男性 ▲B 家父親 ◻ 同室就寝

図 88 家系図



図 89 ミュストルから遠くの村が見える。

調査敷地はナルン州コチコル地区 K 村に住む B 家が活動する夏営地の 1 つである、ミュストルと呼ばれるところである(図 87)。B 家の家族構成について述べる。B 家は父親と母親、そして子供が 5 人の 7 人家族である(図 88)。子供は全員男性で、ミュストルでは一番若い 5 男を除いてそれぞれ放牧や搾乳、炉の燃料となるフンの回収などの仕事を担当する。K 村は地区の中でも最大級の定住村落で、村の中心には約 2km に及ぶ大通りがある。村人は主にスンナ派ムスリムで、ジャガイモなどの栽培や畜産をしている。その K 村から、北東に約 7km のところの天山山脈の一部であるキルギス山脈にミュストルはあり、標高は約 3000m である (GPS 42.386, 75.599)。ミュストルは傾斜を伴う谷形状の底に小川が流れるところで、傾斜を上がった先に住居、反対側の傾斜の先に馬のための放牧地があり、大地の上にはむき出しの岩が複数転がっている。見晴らしがよいところに位置するため、夜になると約 6km 先の K 村とは別の村の明かりが見える。夏営地に行くのは K 村に住む B 家のみではなく、B 家の親戚 2 家族も同様に夏営地に行き、それぞれ住居は別だが、生活上関わり合いながら夏を過ごす(図 90)。

敷地において、B 家家族の長男から 3 男は親たちの天幕とは別の寝床で就寝する。B 家が毎年夏に牧畜のために使用する夏営地は 2 つあり、筆者が確認できたのはこの内の 1 つである。もう 1 つは K 村から南に行ったところにあるソソクル湖周辺であり、2020 年の夏にそちらを使用予定なのは確認できたが、詳細は確認できなかった。B 家の活動時期であるが、毎年 7 月の終わりから 8 月にかけて夏営地に移動し 9 月の終わりまでそこで過ごす。

調査対象であるボズユイと呼ばれる円形天幕について、また敷地名義などの用語を確認していく。

ボズユイ フェルトと木枠を用いた円形天幕、移動式住居。1950 年代の村落集住化まではカラタル地域のキルギス人の主要な住居だったが、現在では夏季の一時的住居としてのみ使用されている⁷⁸。

上で述べられているように、ボズユイとはキルギスにおける円形天幕の呼び名である。一般的にユルタと呼ばれ、モンゴル圏ではゲルと呼ばれる円形天幕だが、キルギスにおいてはユルタ

⁷⁸中央アジア農村の親族ネットワーク p385 吉田世津子 風響社



図 90 隣の山並みに位置する B 家親族の住居
家の向こうには羊のための囲いが見える。この住居とは別にもう
1つ B 家親族が暮らすテントがある。

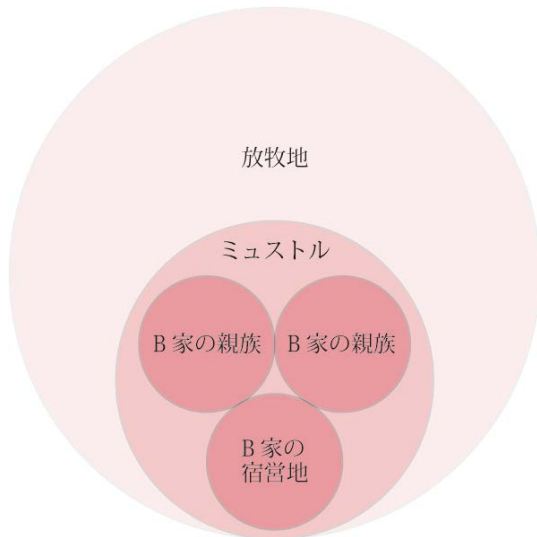


図 91 敷地名モデル図

でも通じる⁷⁹。本来のボズユイは、フェルトと木の骨組みでできるものを意味したが、それらを使うものは現在少なく、大半が中国製の鉄を使ったユニット式のものに変化しているため、中国製の～という意味の通称であるキタイスキーという呼び名が使われもする⁸⁰。なお、日本製の～はヤポンスキーと呼ばれる。そのため現在は、中国製のという意味の通称であるキタイスキーか、ボズユイまたはユルタという言葉で指し示される円形天幕であるが、調査地においてはボズユイが使用されていたため、以下調査地の円形天幕そのものを指し示す際はボズユイを使用する。B 家の場合、伝統的なフェルトと木製でつくられるボズユイが使用されなくなった時期は3～4年前であり、それ以降はキタイスキーである鉄製ユニットからなる新しいボズユイを使用している。また B 家の親族 2 家族も仮設的住居を使用していたが、ボズユイとは違う形態のテントであった。

敷地を示す用語についてだが、夏営地は B 家や親族が生活する敷地の総称とし、ミュストルと呼ばれる。B 家は、夏営地に行くときはミュストルに行くと言う。住居が建つところの具体的な土地のことを宿営地と呼ぶ。B 家や親族はそれぞれ違った宿営地に住居を建てるが、同じミュストルに位置する。また日々の暮らしにおいて、家畜を引き連れた移動を伴うが、移動中から移動先を含めた敷地のことを放牧地と呼ぶ。この放牧地が夏営地における最大行動範囲となり、その範囲は約 5km 先まで及ぶ(図 91)。またミュストルは B 家の所有敷地ではなく、K 村役場の所有であるため毎年使用料を役場に払っているとされ、B 家は村から一時的に間借りしている状態である。

⁷⁹住まいをつむぐ p196 佐藤浩司編 学芸出版社

⁸⁰筆者によるインタビューより

3-1-3 伝統的ボズユイについて

ミュストルにおいて実際に使用されているのが確認できなかった伝統的ボズユイについて述べる。現地の観光用ボズユイを見学したが、つくりかたは伝統的なものだった(図92)。しかし住居内部のものありかたは観光用のものの配置であるため、記載は行わない。

基本的な平面構成はゲルやユルタと同じ円形平面である。移動の際は馬によって運ばれた。木を使用した骨組みを使って組み立てられ、壁材は木を斜めに連続させて組み菱形が見える形になる。壁材のことをゲレゲと言い、屋根を構成する垂木をウーク、丸い円形の天窗部分をテュンデュクと言う(図93)。壁材はいくつかのユニットをそれぞれ紐で結び、天窗のテュンデュクは臍穴にウークを差し込み組み立てられる。内部の飾り布はシュルデュクと呼ばれ、飾り紐はチャチュラーと呼ばれる。

伝統的ボズユイでの天窗は開けっぴろげの状態か、フェルトがかけられる状態かである。断面的には、内側から外側に向かって壁材であるゲレゲ→チークと呼ばれ植物でつくられるすだれのようなもの→フェルトの順である。内部は男女の空間が分かれており、左は男性の空間、右は女性の空間である。奥から年齢の高い人順に座る。炉の位置は入口に近いところで、それに合わせて煙突が設けられる。重要なものは奥に置かれ、食事準備のための空間は女性がいる右側のため、右に関連する食器などのものが置かれた。

次に伝統的ボズユイの組み立て順序を述べる。最初に平坦なところに敷地を定め、草を抜き、壁材を組み立てて置く。その際壁材に沿うように土を少し掘り下げる。その間に手が空いている人が屋根をつくる。屋根をかけるとき、テュンデュクを1人が下から木で支え、その間にウークを臍穴に差し込み、壁材と紐で結び固定させる(図94)。骨組みの組み立てにかかる時間は1-2時間ほどである。骨組みが出来たら、何枚かのフェルトで覆い、紐等で固定させる。基本的にそれらの部材は馬の背に乗せられ持ち運ばれた(図95)。

前述のように、伝統的住居はゲレゲ、ウーク、テュンデュクの3つの部材による骨組みと天幕地からなつたが、調査対象である新しいボズユイでも同様の構成である。しかし、それぞれ鉄製のより細い部材になっておりそれに伴い若干構法の変化が見られた。



図 92 伝統的ボズユイで使用するフェルトの天幕地

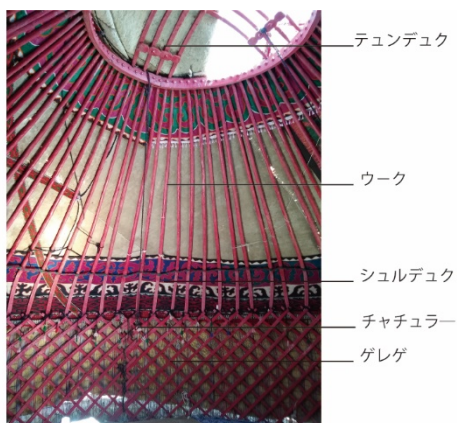


図 93 部材名称



図 94 骨組みの組み立て 吉田世津子撮影 1996



図 95 馬による生活道具の持ち運び 吉田世津子撮影 1996

3-1-4 宿営地の構成要素と空間構成



図 96 ミュストルまでの道中



図 97 ミュストル俯瞰写真

左には親戚家族のテントが見える



図 98 馬に乗りフン回収の仕事をするB家4男



図 99 遠くに見える羊の群れ

宿営地での暮らしを構成する要素の整理を行う。宿営地の構成要素は主に 13 要素に分けられた(図 100)。大前提として、彼らの暮らしはミュストル外部から来る諸要素と自然環境として把握される既存の諸要素との関りで成り立つ。それらの諸要素を、実践者を主体とし他の存在を客体としたときの主体→客体の指示関係における移動-可動性-の観点から整理すると、それぞれ半固定-固定-非固定要素となる。半固定要素は実践者のために運ばれ使用されるものであり、彼らの意思により可動させられる。それぞれ、ボズユイ、テント、木の柱、動物のフンの 4 要素があった。固定要素は実践者とは関係なく存在し彼らはそれに対して基本的に動かないものとしての眼差しを持ち生活する。それぞれ、草原、岩、獣道、小川、石の 5 要素があった。非固定要素は実践者が連れてくる動物存在であり、実践者に利益をあたえる存在であるが、ときにそれらは主体の意思とは関係なく可動するものである。それぞれ牛、羊、犬、馬の 4 要素あった。

住居のあるミュストルは車では来られないところに位置する(図 96, 97)。生活道具に関するものは全て道中で馬の背に乗せ替えられ運ばれてくるため、その中に極端に大きなものはなく、ミュストルに運び込まれるものは基本的に身体スケールの半固定要素である。ただ、それらのもののみで生活が営まれるわけではない。身体スケールに近い存在として扱われ、生活を構成することになるのが動物と周辺自然環境である。非固定要素である動物は、私という身体から離れた存在としてときに勝手気ままに動き回り、ときに人に利益を与える(図 98)。それは身体とは離れたところで別の意思を持つ存在であり、完璧なコントロールは不可能である。そもそも B 家らのミュストルにおける活動の出発点は、家畜のための放牧地を求めるものであった。夏の日を浴びた植物を求めて、放牧地を回るためにミュストルの活動はある(図 99)。羊や牛の放牧は朝から夕方にかけて行われ、その際の移動は馬に乗って行われるが、ときに人はそのようにして動物を身体の一部のように扱い生活を営む。固定要素である自然環境の存在も同様に、身体と離れたところで存在し得る。しかし動物とは違い、それらは実践者がいなくても独自の営みを構築するもので、彼らは固定要素を頼りながら生活を営む。その際、固定要素から実践者は様々なものを借りる。それは場所を間借りする生活の仕方として表出する。

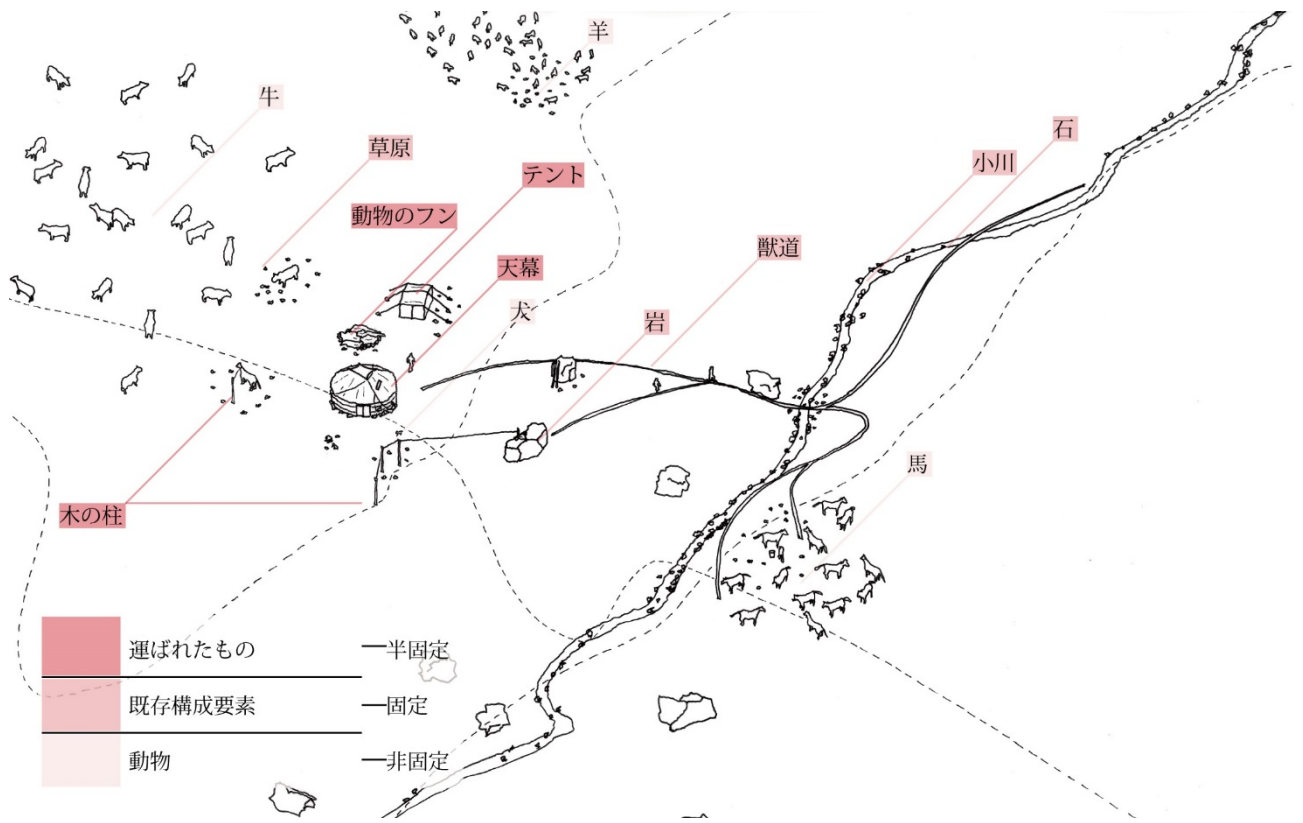


図 100 B家宿営地俯瞰図 構成要素の整理

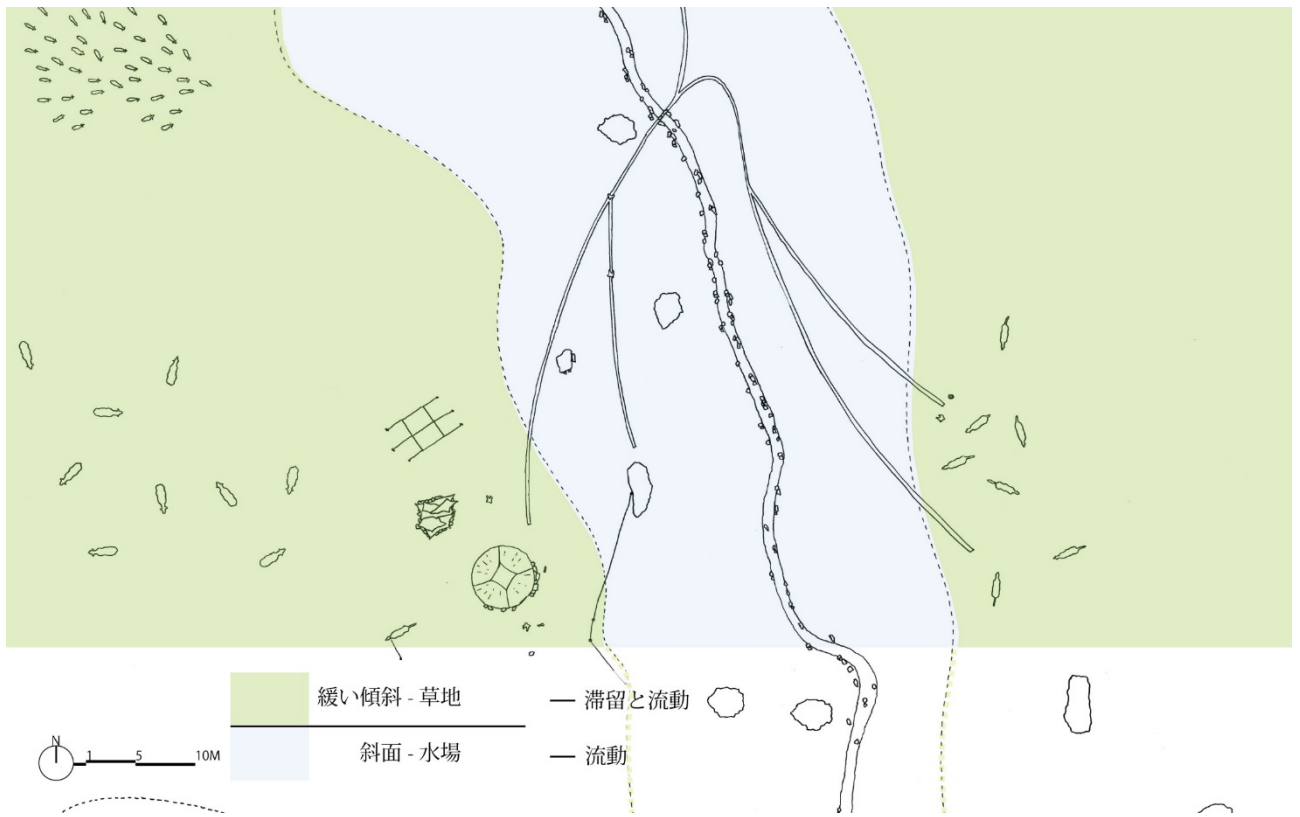


図 101 宿営地平面図

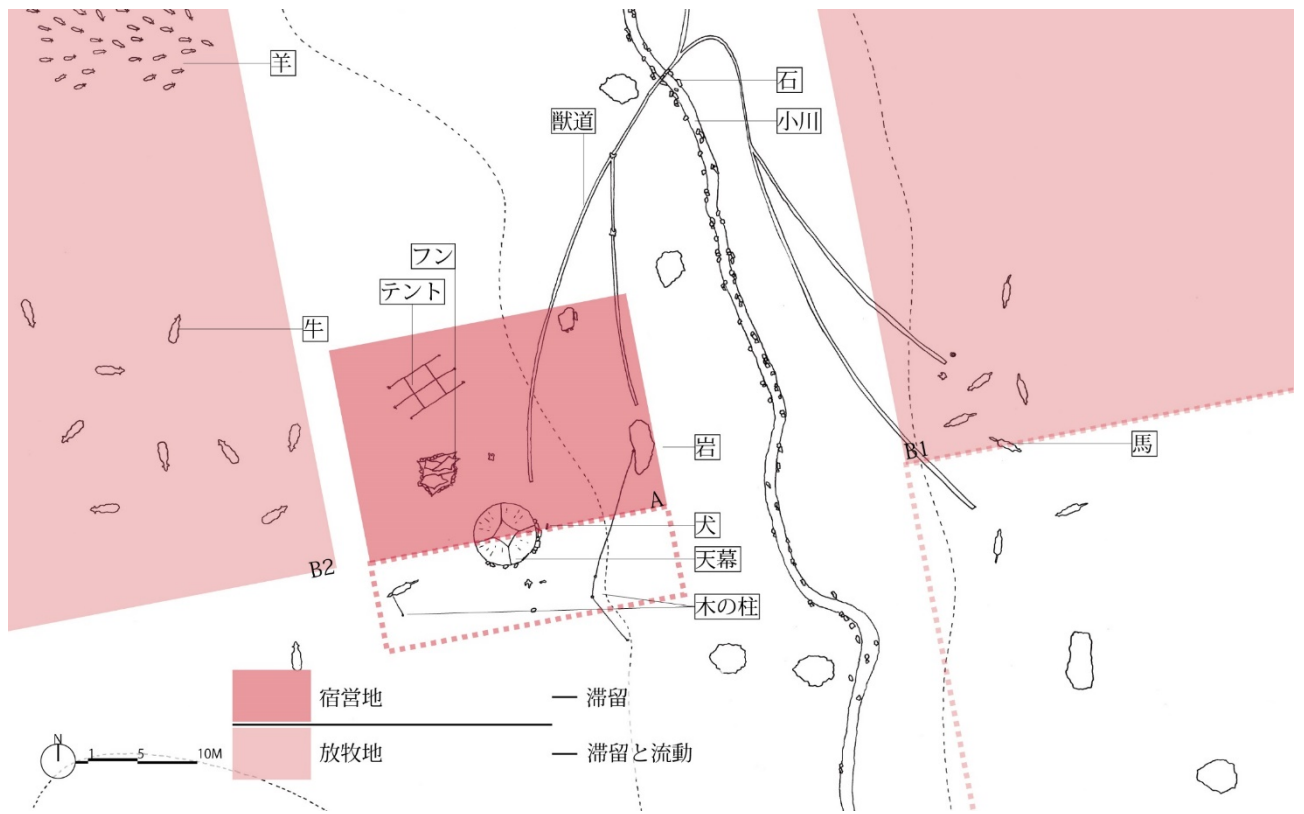


図 102 宿营地配置図 放牧地に挟まれるかたちで宿营地があることが分かる。

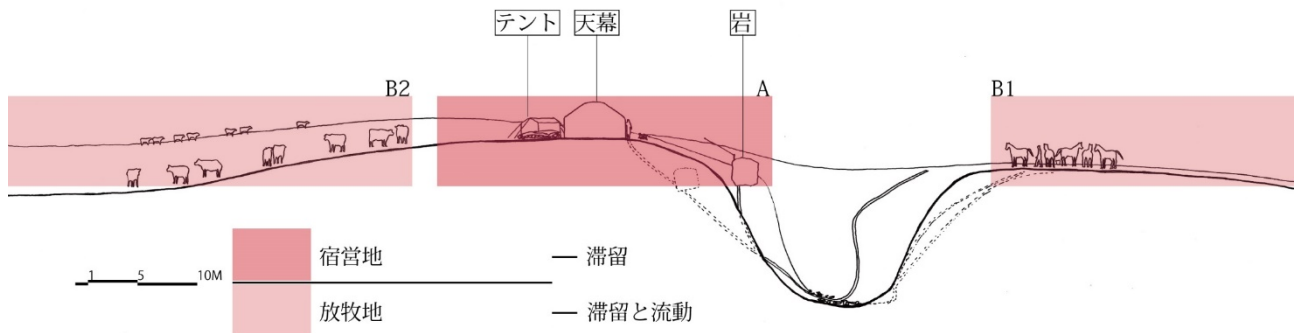


Fig.1 B1 から A にかけて
斜面には岩や石が多数転がっている。



Fig.2 A から B1 にかけて
斜面を下った先には小川が流れる。この小川の水
を使用し生活を営む。



Fig.3 小川の上流
上流の方にある放牧地へ移動する B 家の子供。

図 103 宿营地断面図 南から北にかけて

小川を挟んで馬の放牧地があり、搾乳仕事などで頻繁に行き来することで獣道が生まれる。



図 104 円形天幕であるボズユイ



図 105 木の柱

間に紐が張られ、洗濯物干しや肉の乾燥などに使用される。



図 106 B家の長男、次男、3男が就寝するテントAの範囲で

村のある方向を眺めながら休憩する3

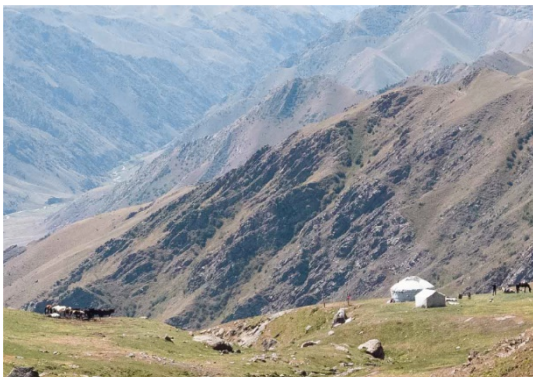


図 107 北から南にある宿営地方向



図 108 Aの範囲で村のある方向を眺めながら休憩する3男

宿営地での活動は、B2, A から B1 にかけて小川をまたぐように広がっている谷戸地形で展開される(図 100-103)。B 家の主な活動範囲は小川の上にある A の範囲で展開され、ボズユイやテント、フン置き場などが含まれる。B1 は主に馬の活動範囲であり、搾乳などを行う度に小川を通過する。B2 は主に牛や羊のための活動範囲である。宿営地で見られる活動は大きく滞留性をもつ行為と流動性をもつ行為に大別できる(図 101-103)。

滞留性行動では、睡眠や食事などの準備、休憩や余暇を楽しむことが含まれ、流動性行動では放牧や搾乳、フン拾いなどの仕事を通した動きが含まれる。ボズユイが配置される A では主に滞留性行動が展開され、放牧地である B1, B2 では仕事に伴い滞留性行動と流動性行動が展開される。ミュストルでの活動は A を基点に B1, B2 を行き来しながら行われる(図 103-108)。

まず、Aに含まれるボズユイの配置について述べる。B家の父親へのインタビューでは、ボズユイの配置について「何年も同じ場所を使用している。」と述べ、その前はどこに配置していたかについては、「もっと上の方。」と述べていた。宿営地の変化はK村住人の放牧地使用の減少と関係がある。K村の住人で夏営地を回るものは過去に比べて少なくなっているが、これに伴いB家は宿営地を移動させた。宿営地の場所決めは他のものに使用されていないことが前提であり、もし使用したい宿営地があっても他のものに使用されていれば放牧範囲との関係でそれは許されない。昔B家は現在使用している宿営地の範囲にはボズユイを建てることができなかったが、放牧地を巡る家庭が減少した結果使用できるようになった。このことが示すのは、B家が持っていた場所の獲得への能動的な姿勢であり、動物のために場所の潜在的有用性を受け入れた主体の存在である。父親は、何故この場所がいいのかという質問に「家畜が育てやすいし、川もあるから。」と答えた。家畜への配慮を第1に述べるのは、前述した通りそもそもの宿営地での活動は放牧のためであるからだ。で



図 109 馬の搾乳仕事をする次男



図 110 搾乳した乳をバケツに入れ運ぶ



図 111 木など様々なものが集積する岩

は何故動物のためにいいのかだが、これは宿営地がある地形と関係があると想定できる。B家の宿営地は丁度山並みの先端部分に位置し、北向きへの見通しが効く比較的平坦な草原地帯にある。放牧範囲はボズユイから北に向けて約5km先まで広がるが、その出発地点として丁度よく、滞留性行動がしやすいと考えられる。また谷戸はボズユイから南にかけて傾斜がきつくなり、それに伴い動物の小川へのアプローチは難しくなる。動物は小川から水を確保するが、山並みの端部に位置することで小川へのアプローチを確保しつつ、管理がしやすいことが挙げられる。

宿営地での活動は動物への眼差しを抜いては考えられないが、その配慮は動物から享受できる利益のためである。利益についてだが、まず家畜を育てることで得る計画的収入が挙げられる。B家とその親族家庭はK村に住む人々の家畜を預かっている立場でもあるが、これは夏営地に行けない家庭の家畜放牧をミュストルで請け負って収入を得るものである。ほかに収入手段としては、育てた家畜を売ることが挙げられる。この他に、ミュストルでの生活食の確保が挙げられる。羊肉はキルギスでは一般的な食材であるほか、羊や馬から搾乳したものは飲料として使用されたり、食料への加工が施されたりする(図109,110)。またその際に出る油を取って料理に使用したりする。ボズユイにある炉で使用される燃料は馬や牛のフンを利用したものであり、料理用の燃料に活用できるほか、夜の暖房用の燃料としても使用される。犬はB家に一番近い存在の動物であるが、羊や牛の放牧では犬と共に行動し協働する。

このように、ミュストルでは非固定要素である動物への配慮がまず初めにあり、そこから利益を得ることで日々の営みが組み立てられていると言える。これは、動物のための活動拠点であるボズユイなどの半固定要素が、動物の非固定要素を媒介にして固定要素に相対していることを示すもので、彼らの宿営地は動物への配慮→ボズユイの配置を通した場所との出会い→ミュストルでの生活という関係を持ち、他の存在との共依存性をもつことで成り立っていることを示す。

この共依存性は、既存構成要素に対する「使いこなし」にも表れている。ミュストルに存在する岩や石に対して、彼らは様々な用途を見出す。ボズユイ横に配置される岩には、様々なものの集積が見られた。岩を1つの場所と見出しその潜在的有用性をもとの置き場として見出す(図111)。共依存性のもとにある暮らしではあらゆる場所が何かの居場所となる。また、簡単なものの修理をするとき、机代わりに石を使用する状況にも、石の潜在的有用性を見出す主体の存在があることが分かる(図112)。



図 112 道具の修理をするB家父親と見守る子供達

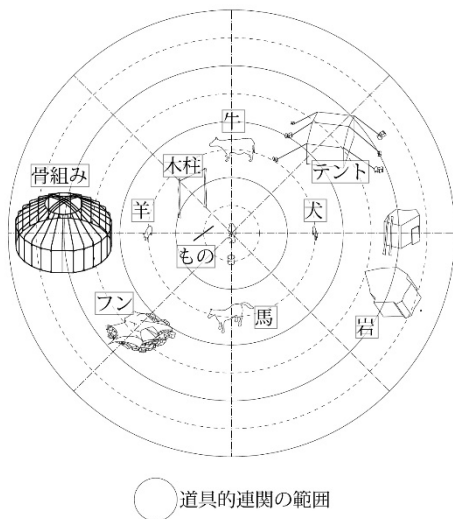


図 113 道具的連関モデル図

ボズユイの周囲に広がる A では、このように場所をもののように使用したりすることで、既存構成要素の潜在的有用性が見出されている。この意味の転用は、実践者による独自の連関をつくり上げる主体の実践があると言え、それは前章にて言及した USM における分解過程、場所やものを道具のように使用することと繋がる。ここでハイデガーの道具存在についての言説を取り上げたい。ハイデガーは著書の中で、道具について「配慮において出会う存在者」であるとしている⁸¹。そして道具の存在をそれ単体では存在し得ない関係性の総体とすることで、道具を取り巻く関係性を含めて道具について記述する。

道具というものは、本質上、〈…するためにあるもの〉である。この〈…するためにある〉ということには、有用性、有効性、使用可能性、便利性というようなさまざまな様態があるが、これらがひとまとまりの道具立て全体の全体性を構成している⁸²。

ハイデガーはこの道具立ての総体を道具連関としているが、ミュストルにおける分解過程でも、動物への配慮を持ちながら場所に接することで、間接的に場所の潜在的有用性を利用し「何かのため」の場所の存在が見出される。それは動物のための放牧地であったり、それに付随するボズユイでの活動のための敷地のありかたとして、間接的に様々な場所の繋がりを生む。この繋がりの連関の内に、岩がものを「置くための場所」としてはじめて認識されるのだ。このことから、ミュストルでの活動では道具連関のような関係性が人-もの-場所の間にあるといえ、これを分解過程における道具的連関とすることができ、それは身体を基点に住居の骨組みやものを扱うことで場所をつかひこなすことを示す。

一方、道具を使用し操作する交渉は盲目ではなく、それには固有の見方がそなわっていて、これが操作をみちびき、それに特有の即物性を与えている⁸³。

ミュストルでの活動にあるのは、固定要素を個人的な道具連

⁸¹存在と時間 p161 マルティン・ハイデガー ちくま学芸文庫

⁸²存在と時間 p162 マルティン・ハイデガー ちくま学芸文庫

⁸³存在と時間 p164 マルティン・ハイデガー ちくま学芸文庫

関に取り込むことで、意味づけられた即物的な場所をつくる生活の営みであり、分解過程における場所の潜在的有用性は分解を前提に見出されると共に、活動地に置ける独自の道具的連関を生み出しているといえる(図113)。

次に、B1 及び B2 の放牧地について述べる。前述したように放牧地での活動は遠いところで約 5km 先まで及び、移動には馬を使用する。イーファー・トゥアンは遊牧民や狩猟採集民の場所への感覚について、私有地と範囲を使い分けると述べている⁸⁴。私有地は伝統的に認められた根拠地であり夢を見る場所といい、範囲は行動圏のこととしているが、ボズユイでの放牧地としての B1, B2 は、範囲に該当し A は仮の私有地であると言える。

生存のためには、範囲の方が私有地よりも重要であり、また社会的、儀礼的生活のためには私有地の方が範囲よりも重要である⁸⁵。

上で述べられているように、範囲としての放牧地は生きるために重要なものであり、家畜のための放牧地に対して彼らは特別な意味をもたせる(図 114, 115)。彼らの放牧地には、約 2 千年前に岩に掘られたものと説明する馬をかたどった図形がある。説明によるとそれは「祖先が描いた⁸⁶。」ものである(図116)。どこの誰とも知らない過去の人が書いたものを彼らは自分たちの生活に結び付ける。放牧地を巡る生活は、未踏の地に行く意識とは反対の、誰かが馬と共に過ごした生活の系譜上にある。前節で述べた分解過程を通して複層的なイメージを獲得する意味づけられた空間は、彼らの生活においては、放牧地に対しても作用する。

土着の人は、祖先であり崇敬している不滅の人びとの生涯と事績についての大昔の物語が自分の土地に記録されているのを知っている。土地全体が自分の一族の系譜になっているのである⁸⁷。

何度も言うように彼らの生活は、放牧地がなくては成り立たない。行政から土地を間借りして放牧を営んでいる状態である彼らのアイデンティティの土台は、放牧地を含む山の上の生活で育まれる。彼らにとっては宿営地と放牧地は全体で 1 つの居



図 114 放牧地を犬と巡る長男



図 115 放牧する羊の肉から取れる油
パンをつけて食べる。



図 116 岩に掘られた馬の図形

⁸⁴空間の経験 p280 イーファー・トゥアン 筑摩書房

⁸⁵空間の経験 p280 イーファー・トゥアン 筑摩書房

⁸⁶筆者によるインタビュー

⁸⁷空間の経験 p281 イーファー・トゥアン 筑摩書房

場所であり、それは天山山脈の一部である山並みを 1 つの居場所と捉えるような感覚を生み出す。仮の私有地と範囲での活動を行き来することは、異なる場所を、あちらとこちらを結び付けるのだ。

3-1-5 住居の空間構成

次に住居であるボズユイの空間構成について述べていく。

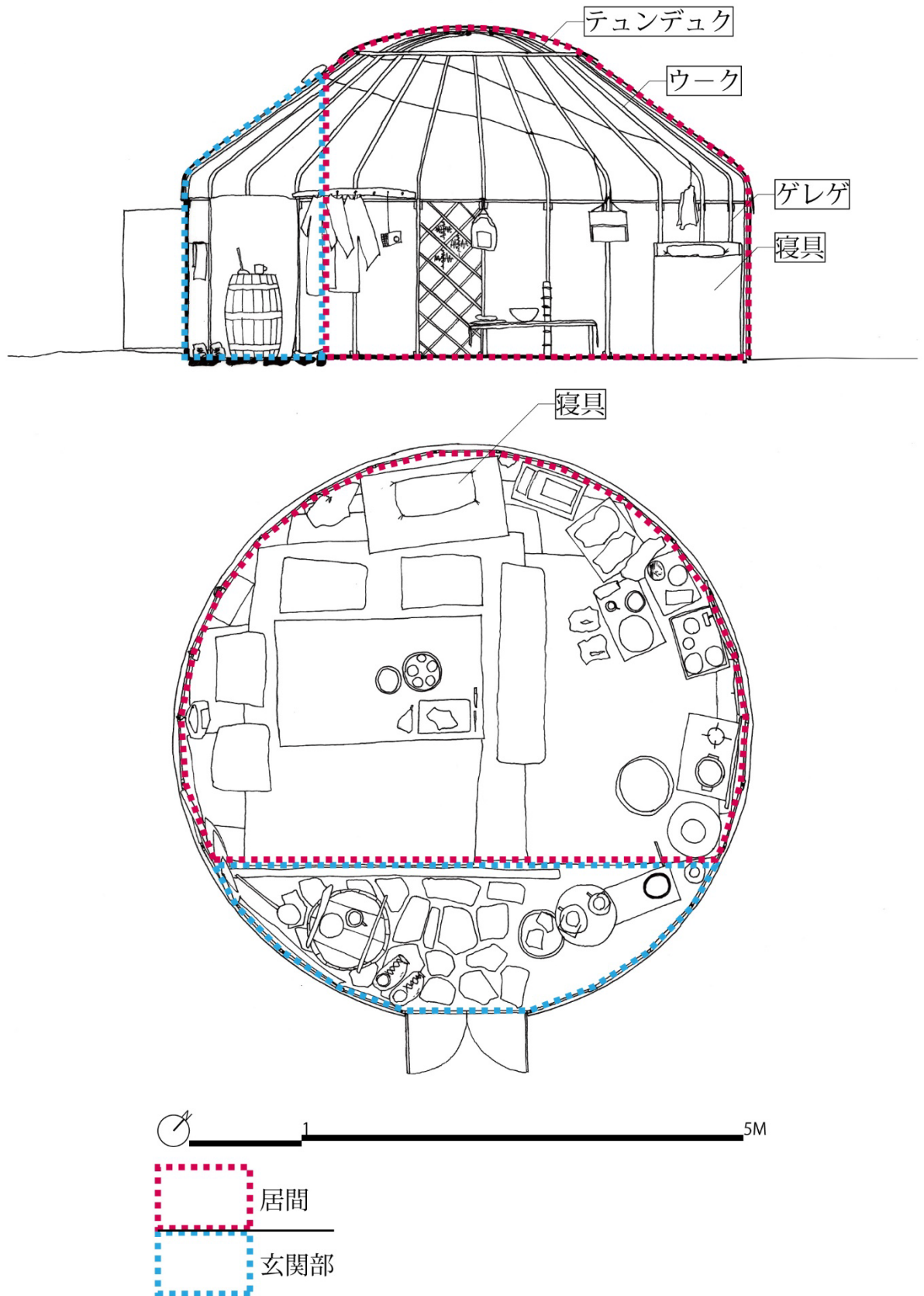


図 117 ボズユイ平面断面図

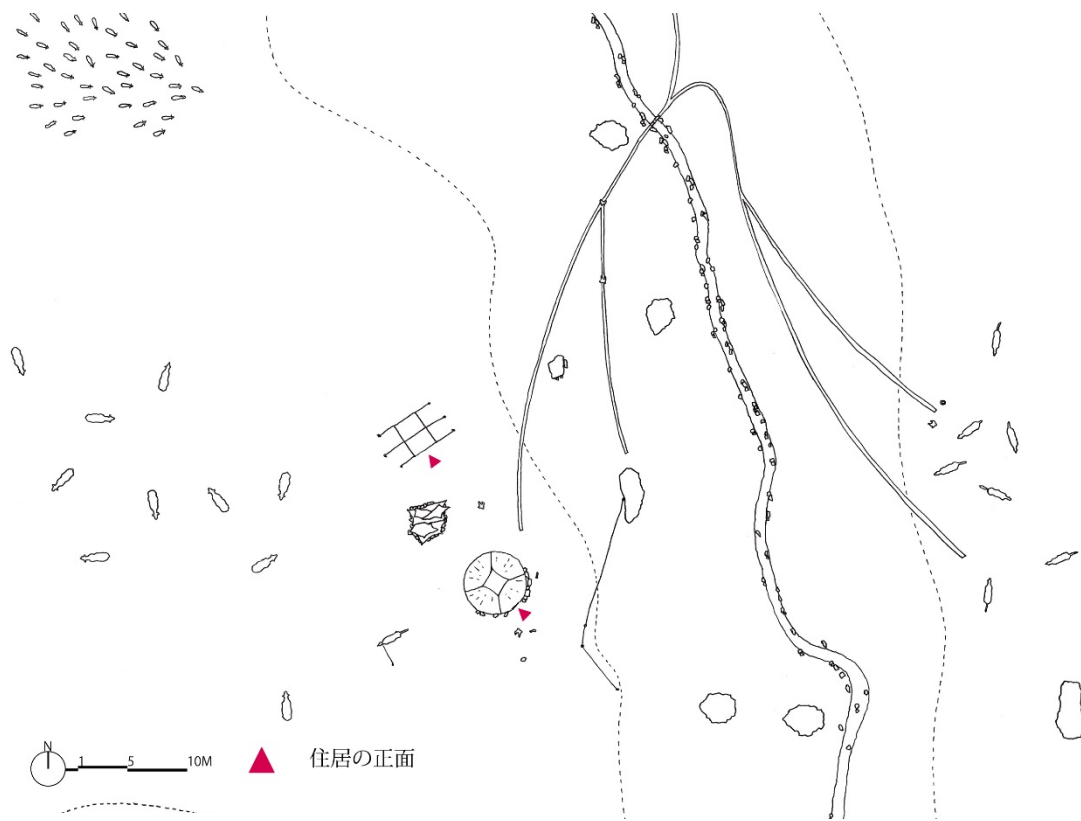


図 118 住居の向き

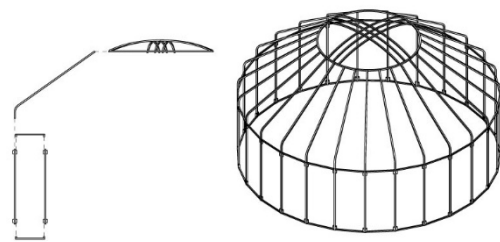


図 119 ボズユイ骨組みモデル図



図 120 炉

鍋でお搾乳したものからバターをつくっている。

住居は壁材ゲレゲと垂木材ウーク、屋根材テュンデユクからなる骨組みと、覆いである天幕地からなる(図117)。住居正面は「南の方に入り口が向くようにつくる⁸⁸⁾。」と言われたが、実際は少し東に振った南東方向を向くように配置されていた(図118)。伝統的住居では、木の骨組みとフェルトの天幕地が使用されたが、B家のボズユイでは、鉄製の骨組みと市販の天幕地に使われており、鉄部材の径は25mmで共通する。鉄部材からなるゲレゲを構成する壁は1ユニットW600・H1470mmで、ウークはH1300mmである。内部は中心が最も高さがあり、2770mmほどで、周縁部は1500mmほどである。部材は全て穴に差し込む形で連結され、伝統的住居のように紐で固定されるのは天幕地のみである(図119)。

南東に向く住居内部は、入り口から見て手前右に炉が置かれ、炉の位置する手前の空間は土に石を敷き詰めた玄関部である(図120, 121)。そして手前の玄関部から奥にかけては土の上に織物を敷いて大地との縁切りを行った生活空間である居間があり、睡眠や食事が行われる。このことからボズユイは手前の玄関部と奥の居間に分けられる。玄関部での炉の管理は母親が行い、居間での食事管理なども母親が行っている。伝統的住居にあるような男性の空間と女性の空間というような見えない境界は形骸化しており、それについてB家の父親は「昔はそうだったが、今はあ

⁸⁸⁾筆者によるインタビュー



図 121 玄関部



図 122 写真中央に積み上げられているのが寝具

まり気にしていない⁸⁹。」と述べていた。しかしそのような中でも、見えない境界に関してある一定のルールが存在は確認できた。次に、内部空間の見えない境界について述べる。

本来伝統的住居において女性の空間は入口から見て右側に位置した。そしてそれにより炊事場は右に位置したが、その名残からか B 家の住居においても炊事場は右に位置し、左には位置していなかった。このことと、父親の定位置が主に一番左の机端に位置することを考えると、男性の空間と女性の空間の境界は厳格なルールではなく、名残としてあることが分かる。そしてこの見えない境界の観念は寝具にも付与されている(図122)。寝具について父親は「一番大事なので一番奥に置く⁹⁰。」と言っていたが、これは奥と手前の見えない境界観念がものに適応された例である。伝統的住居においては、奥は位の高い人の居場所であり、重要なものを置く場所であった。同様の観念を持つモンゴルのゲルでは、奥に祭壇が置かれる例もあるが、ミュストルにおけるボズユイでは、そのような場所に置かれるのが寝具であった。ボズユイでは、夕方食事を終えしばらく経つとおもむろに寝具をひき寝床をつくる。寝具の構成は布団そのものである。夜、山地特有の夜の寒さに対して馬や牛のフンを乾燥させた燃料の燃え残りを少量部屋に置いておくことで、暖を取りながら眠りにつく。テュンデュクを少し開けているので煙は上部へ抜けるのだが、独特の匂いの中眠りにつくことを経験すると、寝具があることの安心を感じざるを得ない。床の敷物が広大な大地の側にあるとするならば、寝具は明らかに人の側にある。どちらも前節での中谷の言説に依拠するならば大地との切り離しを志向するものであるが、寝具は人の眠りを支える道具である以上に、背に合わせ変化する身体の一部であり、寒さと共に高山地が見せる一側面をどうにかやり過ごすためのものである。そして煙の匂いと寒さから逃れるように寝具に包まれると、外からは犬と牛の鳴き声が聞こえてくる。

前章で作家の沢木耕太郎による磯崎新が述べた身体外部のものへの眼差しをとりあげたが、同様のことはここでもあった。鳴き声が響く高山地の寒さは、煙の匂いとともに身体の一部となる。B家の住居における寝具はそのような大地への抵抗と身体のはざまにあるものであり、無防備な眠りの間、自然から人を守るものであった。寝具に対して父親が述べた「大事」という言葉は背のひんやりとした感触を通し身体外部へと広がる自身の存在とともにあるものであり、B家の見えない境界はそのような背景

⁸⁹筆者によるインタビュー

⁹⁰筆者によるインタビュー

とともにつくられるものであった(図123)。それは、イーファー・トゥアンが述べている事物への象徴性の付与の記述でも説明が可能だろう。

事物というのは、それ自体の本質が非常に明瞭で十分に明らかにされているために、みずからの独自性は保ちながらも、みずからを超えたさらに大きな存在について教えている場合に象徴になる⁹¹。

標高約 3000m の高地での夜は冷え込みが激しく、長時間外に居ることは身の危険と隣り合わせだ。掛け物なしに寝ることは困難である。半固定要素である寝具は、そのみで機能を果たす

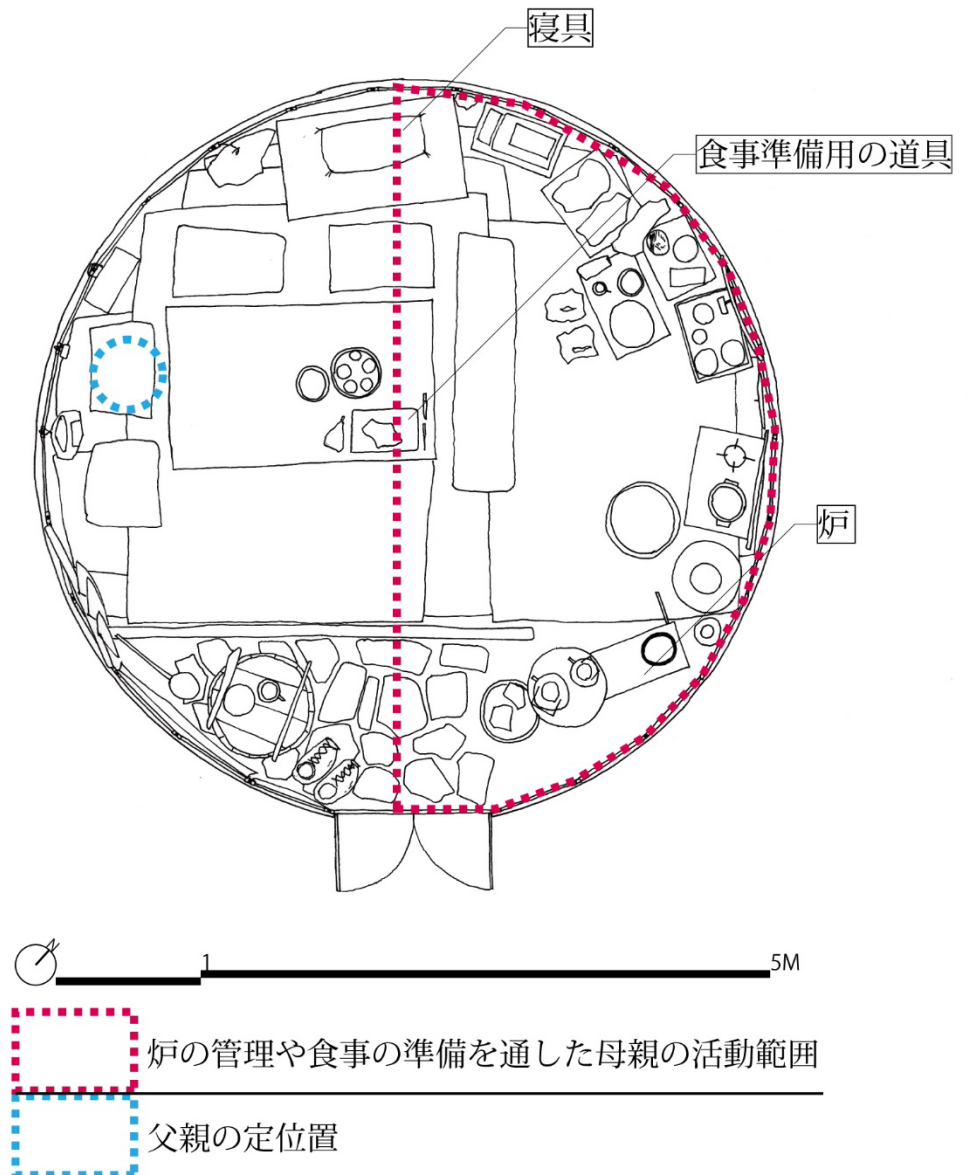


図 123 内部にある見えない境界

⁹¹空間の経験 p204 イーファー・トゥアン 筑摩書房

ものではなく身体との相互作用が不可欠である。その相互作用の中で、外の自然環境に身を晒した場合には決してできない水平方向での安心を寝具は保証する。逆に言えば、寝具にくるまることで自然に対する意識が生まれている。そのような意味において寝具は重要なものであり、元々伝統的の住居にあった奥・手前の価値観が合わさった時、前節で述べた神話的空間のような質が生まれる。形骸化した場所の意味を再生産しているとは言え、B家独自の場所への意味付けは合理的思考では説明ができない複層的な場所への意識に支えられていることが分かる。

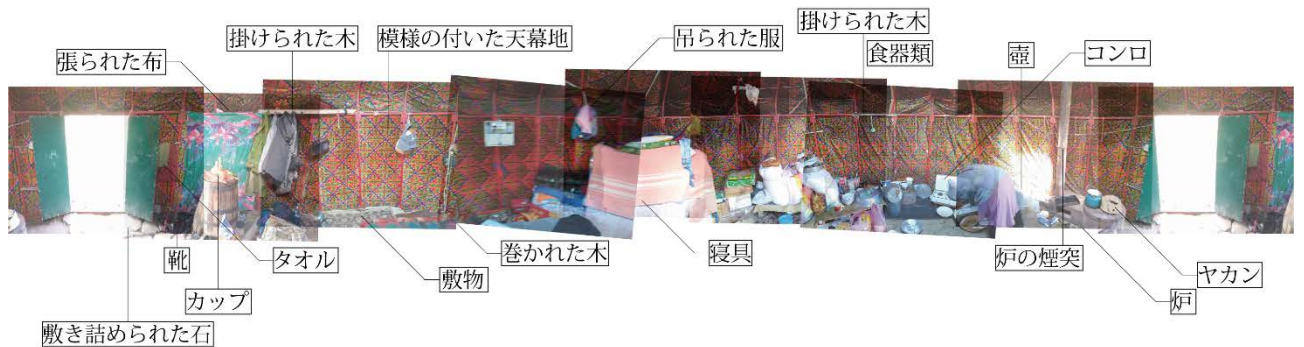


図 124 内観連続写真

次に、ボズユイ内部と外部のものの配置について述べる(図 124, 132)。ボズユイ内外では、骨組みそのものや、天幕地を固定するための紐をうまく使用しながらものを配置している。その配置する手段としての行為を類型すると、張る、掛ける、巻く、吊るす、置く、の5つが確認できた(図 125-131)。



図 125 ゲレゲに巻かれるもの

部材は赤色で統一され、幕地はカラフルな色をしている。



図 126 吊るされる

内部のものは基本的に壁沿いの周縁に置かれる。その際、ゲレゲやウークの骨組みを利用し、ものを収容する目的を達成するための手段が見られ、それは服や鞆などをゲレゲやウークに掛ける行為や、巻く行為などの形で表出している。これは、住居内部における骨組みや天幕を覆う紐の意味の変化を表すもので、そこには前述した岩場をものの置き場にするような独自の意味付けが見られる。これは住居を構成する骨組みや紐などの半固定要素を固定要素として捉える変化であり、前述した道具的連関が内部にも表出しているものである。骨組みは外部から持ち込まれた半固定要素だが、一度組み立てられるとミュストルでの活動がある2カ月ほどは分解されない。そのため、居間での生活を行う人々は固定要素として扱うことで、骨組みそれ自体の潜在的有用性を見出し住居の限られた空間を使いこなす。その結果、骨組みを「収容するため」の手段として扱うことで、張る、掛ける、巻く、吊るす、置く行為が表れてくる。またそのような使いこなしは生活空間から漏れるように住居の外皮である天幕地に

も表出する。

住居の外部では、天幕地を固定するための紐がボズユイを覆っている。彼らは、内部の骨組みにものを挟んで固定するように、外部を覆う紐にものを掛けたり、またボズユイの組み立て時に掘られた外周部の凹みにものを置いたりする(図 130-132)。これらの行為で掛けられたり置かれたりするものは、外部での活動に必要な馬用の道具や食用水を保管する入れ物、ガス缶やタオルなどを含む。ものを収納する手段を外部にも適応させるこのような姿勢は、住居の被膜に対して積極的に意味を見出す行為であり、住人は閉じられた内部の生活空間とは別に天幕地に沿うような形で生活のための行為空間を補完しているのである。この補完された空間はボズユイ周囲にある固定要素への意味付けと同様のものであり、道具的連関を住居にも適応したものと見える。



図 127 骨組みに掛けられる



図 128 骨組みに張られる



図 129 骨組みに巻かれる



図 130 紐に掛けられる



図 131 周囲の隙間に置かれる



図 132 外観連続写真 紐にタオルや放牧道具を掛ける行為や、住居周囲の凹みにはガス缶や飲料水入れを置く行為が見られた。

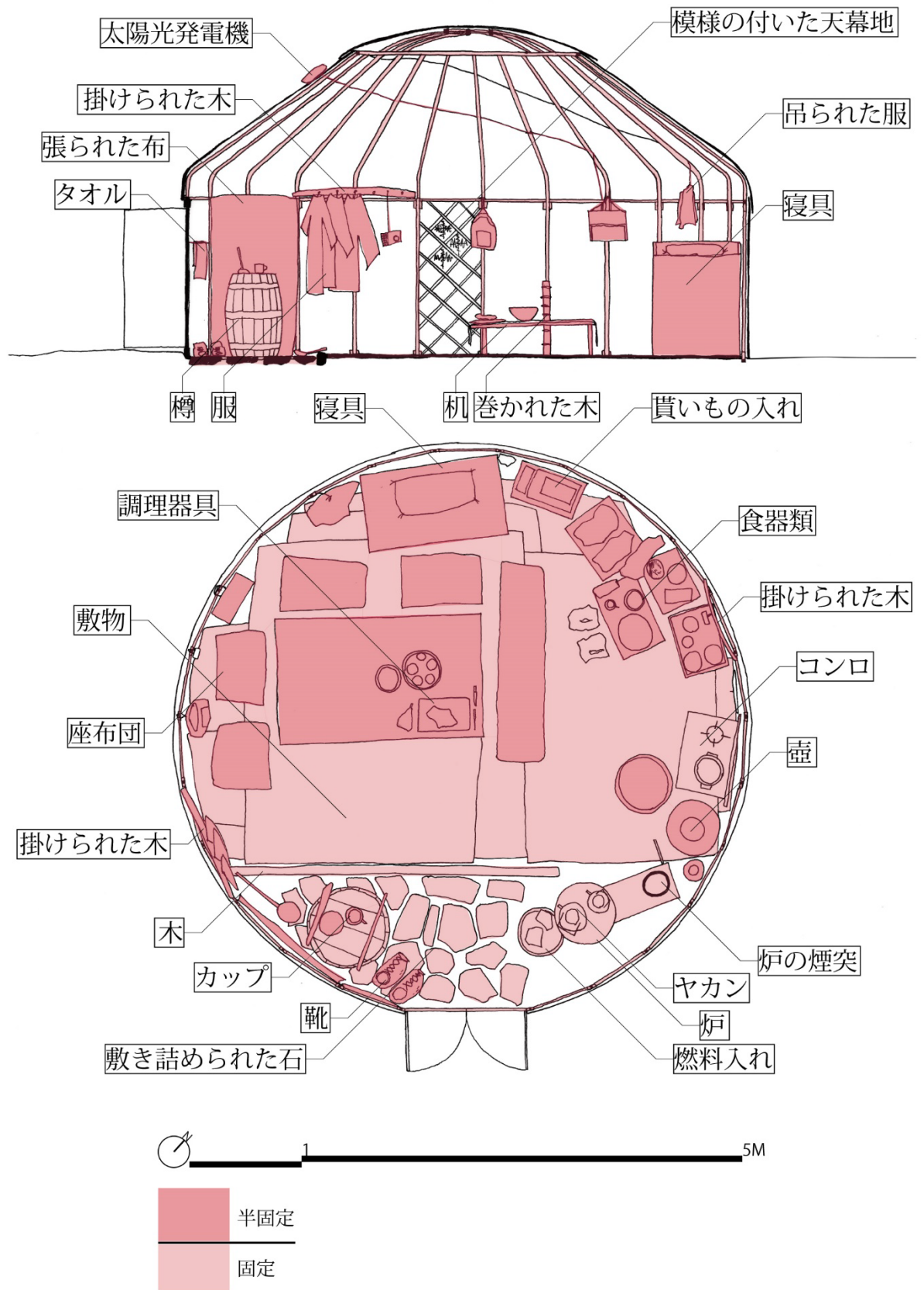


図 133 内部平面図 ものの配置



図 134 土に埋められたゲレゲ下部の横材

しかし、何故上述したような骨組みの内に固定要素への依存を示すような道具的連関が見出されたのか。それを明らかにするには、は骨組みを固定要素へと認識する変化を追う必要がある(図 133)。骨組みであるゲレゲは、円形の壁を構成するものだが、これはボズユイを構成するための土台であり、2 カ月ほどの期間風雨に耐える必要がある。そのために、ゲレゲは下部の横材が既存地面に埋められる(図 134)。部分的に埋め、それに伴い織物を敷くことで 2 次的な平面をつくり大地と切り離す。このように骨組みを埋め、隠すことで固定要素と同一のものとなる。そして既存構成要素の側へと寄せられるそのような操作は、掛けたりするような手段を可能とさせる(図 135)。場所との出会いにおいて、骨組みを埋め固定要素への変化を生むことは、元々ある構成要素へ依存することで領域を確保する操作といえ、USM における 1 つの断面的操作といえる。

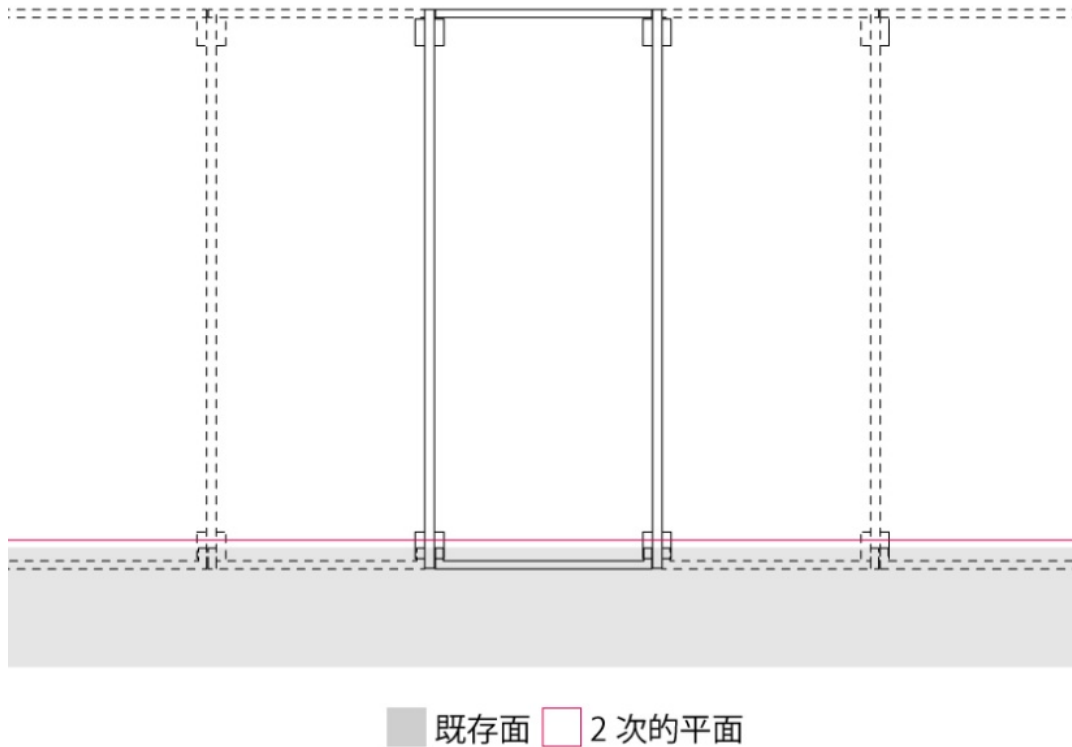


図 135 ボズユイの骨組みにおける断面的操作モデル図 一定の期間埋められる骨組み

3-2 フィールド調査-タイ・チェンマイの屋台-

前項ではキルギスにおける仮設的住居ボズユイについて述べたが、本項では異なる種類の仮設的空間であるタイの屋台について述べる。屋台はボズユイと異なり住居ではない。しかし継起する分解と組み立てによる仮設性を持ちながらも都市に見られる1つの仮設的空間であり、人-もの-場所の出会いがあるUSMの空間的性質を探るなかで屋台には住居とは異なる視点での「使いこなし」が見られるはずである。なお、インタビュー調査にはチェンマイ大学学生の通訳者とB4学生1名の協力があつた。また、チェンマイで見られる仮設的商業空間を以下では屋台活動と総称する。

3-2-1 タイ・チェンマイについて

調査対象地があるチェンマイは東南アジアに位置する国タイの第2の都市であり、北部タイに位置する(図136, 137)。宗教について、タイは一般に上座部仏教が国教だが、それに加え精霊信仰も盛んであり、チェンマイでもそれは見られる。元々チェンマイの位置する地域は、ランナータイ王国があり、バンコクが位置する中部タイとは別の王国であった。チェンマイはそのランナータイ王国により13世紀末に王都として建設されたものである。19世紀末にバンコク王朝により併合され、その後タイ王国の地方都市となり今日に至っている。人口は14万人ほどで、北部タイの主要なエスニック集団であるコン・ムアン(タイ・ユアン)や、モン、ルーなどが住む。旧市街は四方を1辺2km弱の城壁に囲われており、四角形をしている。その外の市街地はピン河の両岸にかけて広がっている。城壁には5つの門があるが、20世紀になって復元されたものである。5つの門にはそれぞれ名前があり、北はチャンプアク門、東はターペー門、南はチェンマイ門とスアンプルン門、西はスアンドーク門である(図138)。それぞれの門には守護霊が宿り、チェンマイを守護するとされる⁹²。また門には役割があり、例えば南のチェンマイ門からは遺体を旧市街の外に搬送することは許されていない⁹³。チェンマイは仏教波及前に支配的であったヒンドゥー教の宇宙論に基づいて建設されており、街の中心にはサオ・インタキンという名のインドラ神の柱が位置している。街の構造はチェンマイの信仰と関連してつく



図 136 タイ王国

東南アジアに位置し、国境は左回りにミャンマー、ラオス、カンボジア、マレーシアに接する。



図 137 チェンマイ

北部タイに位置するタイ第2の都市である。

⁹²霊媒のいる街 p52 福浦一男 春風社

⁹³霊媒のいる街 p88 福浦一男 春風社

られ、歴代の王はそのような街と関連してある儀礼を通して権力の再生産を行ってきたとされる⁹⁴。

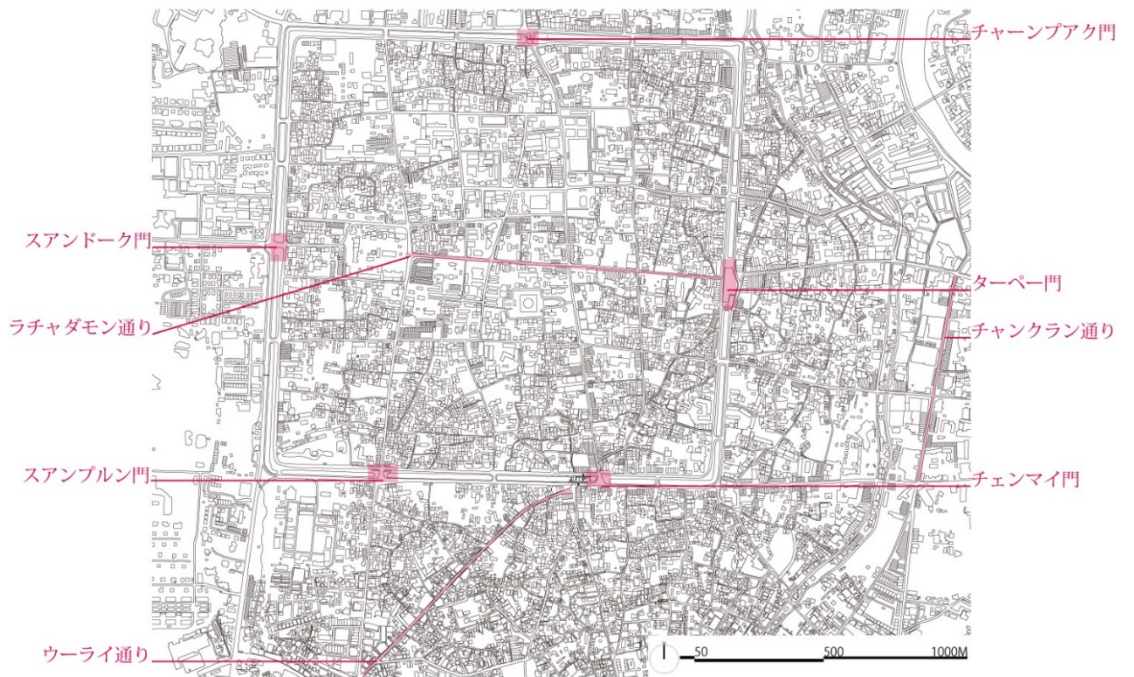


図 138 チェンマイ市街地図 通訳協力者による図面を元に作成

4辺を囲まれるのが旧市街で門の外には市街地が広がる。



図 139 ラチャダムヌン通りでの週末マーケット



図 140 道路を専有して展開される

3-2-2 チェンマイの屋台活動概要と敷地概要について

チェンマイではバンコクのように雑然と屋台があふれることもあるが、整然と列をなして並ぶのが一般的な屋台のありかたである。基本的にその活動はバンコク同様インフォーマルなものとされているが⁹⁵、その中でも行政の管理下でいくつかの屋台活動が行われている。まずチェンマイで展開される屋台活動を、ストリートマーケットを例に述べていく。

チェンマイにおける屋台の活動は旧市街中心の大通りであるラチャダムヌン(Rachadamnoen)通りを使って行われる週末マーケットが1番大きなものであり、開催される毎週日曜日には観光客が大勢足を運ぶ(図139)。これは、道路を完全に専有し行われるもので、車の通行は規制される(図140)。同じように毎週土曜日には、チェンマイ門から旧市街外の南西にかけてあるウーアライ(Wua Lai)通りを使用して大きなストリートマーケットが開催されるが、基本的に毎日曜のストリートマーケットと同じ形式

⁹⁴ 霊媒のいる街 p63 福浦一男 春風社

⁹⁵ 東南アジア4都市の屋台街における都市の「コード」と屋台の様態 中村航 早稲田大学 2010

のもので車の通行は規制される。また新市街東のワロロットマーケットから南にあるチャンクラン(Changkran) 通りには毎日ストリートマーケットが開催されるが、こちらは前述の週末マーケットと違い、車が走る道路を完全には専有せず歩道を利

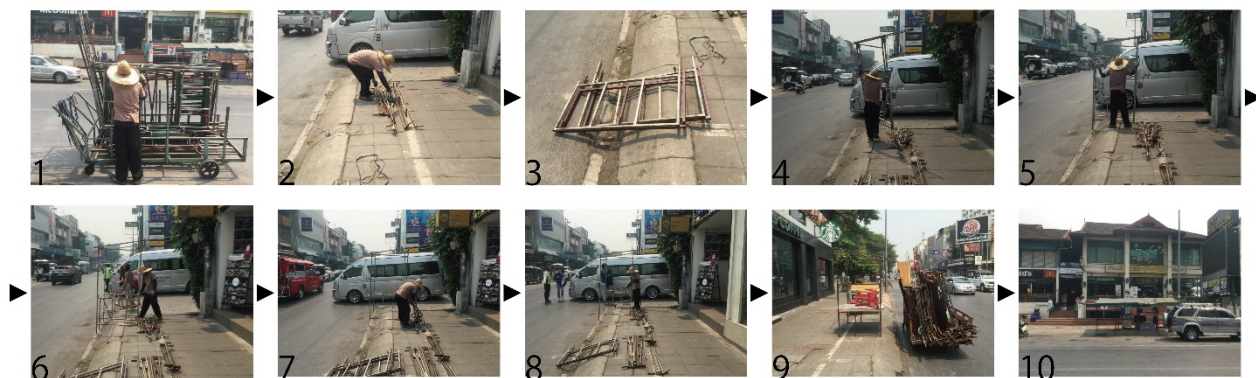


図 141 チャンクラン通りでの屋台の設営 設営を仕事にする人が組み立てる。



図 142 チャンクラン通りでは歩道沿いに設営される
その際、車道-歩道間の段差は埋められる。



図 143 屋台階段との調整で場所をつくる屋台



図 144 黄色の補助線からはみ出るように展開される

用して開催されるものである(図141, 142)。

チャンクラン通りのストリートマーケットについて述べる。チャンクラン通りでの屋台の設営活動では屋台主本人の設営に加え、設営を専門とする実践者が何人かいることが確認できた(図141)。

彼らは、屋台部材が乗る台車と共に移動しながら設営を行う。設営時間は1つの屋台につき10分もかからない。このように、屋台活動においては屋台主以外の外部参加者がいることで成り立つ場合もあることが分かったが、この外部参加者の存在は後述する敷地における調査でも確認できたため、特殊な例ではない。

チャンクラン通りの屋台設営で特徴的なのは、屋台敷地にある車道と歩道のあいだの段差を埋めるように設営される屋台の組み立て方である(図142, 143)。これは、車道を使用する他のストリートマーケットで見られる場合もあるが、その場合も車道と歩道にかけて設営される屋台に見られるものである。チャンクラン通りでは車道での設営がされないため、ほとんど全ての屋台が段差にかけて展開され、歩道の高さに合わせる行為が見られた。これは既存の固定要素である歩道段差への依存を示すものである。また通りで展開される屋台活動において補助的な役割を果たしていたのが、黄色や白色で引かれる補助線である。これは屋台活動敷地を示すものだが、ほとんどの屋台はこの補助線からはみ出るように展開されていたために、あくまで補助的な役割だということが分かる(図144)。固定要素である補助線を飛び越えることで領域を拡張する操作といえ、上述の操作に加えこれらの操作によって屋台が成り立っている。これらの骨組み

に対する断面的な操作を図で示す(図145, 146)。

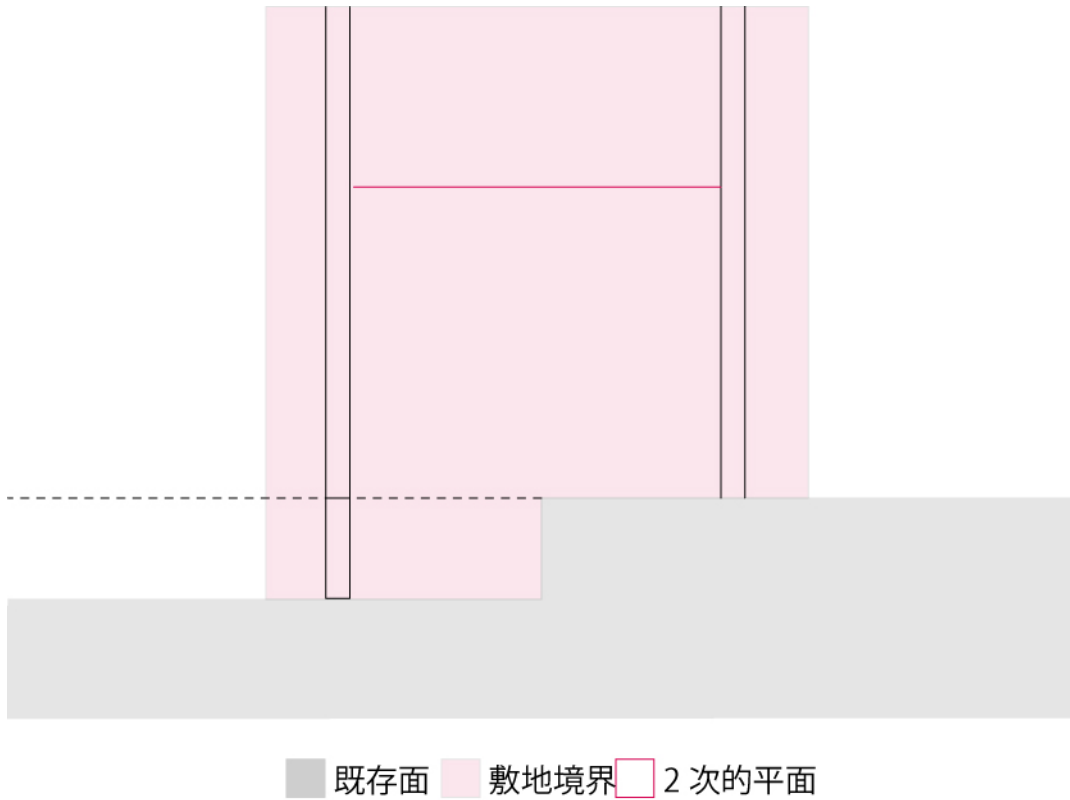


図 145 ストリートマーケットの断面的操作モデル図

2次的平面は既存面の段差を骨組みで埋めることでつくられる。

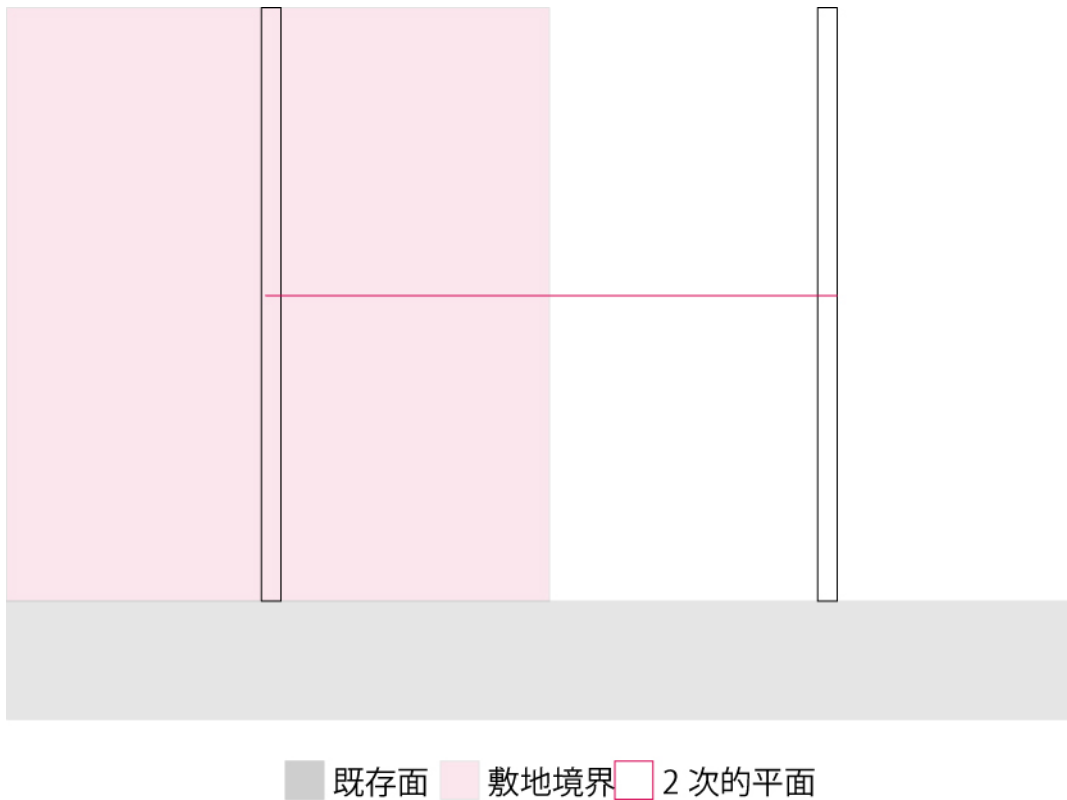


図 146 ストリートマーケットの断面的操作モデル図

2次的平面は敷地境界を骨組みが越境することでつくられる



図 147 緑地



図 148 サーン・プラフーム



図 149 ポッド



図 150 タイルライン

前述のような操作を加えることでストリートマーケットが展開されていることが分かる。またチェンマイにおいてストリートマーケット以外で屋台活動が見られるのが広場であり、後述するようにそこでは別の平面的・断面的操作による領域の確保が確認できた。

チェンマイ旧市街には、東のターペー門広場とチェンマイ門広場に屋台の活動が見られるが、ターペー門広場の屋台活動も週末マーケットと同様に観光客向けのもので、雑貨商店などが展開される。しかしチェンマイ門広場における屋台活動は地元民向けのもので想定される。これはチェンマイ門前に広がるチェンマイ門市場が関係する。チェンマイ門広場の北に位置するチェンマイ門市場は主に生の食材などを主に売る市場であり、観光客向けの雑貨商店などはない。このため、市場に来る人々向けに展開する広場の屋台の活動も地元民を想定していると考えられる。以上のことを踏まえ、調査敷地はチェンマイ旧市街の南に位置するチェンマイ門にある広場での屋台活動に選定した (GPS 18.781, 98.988. 以下C門広場)。

敷地であるC門広場は東西に長い約90mの空間であり、東の城門側に緑地があり(図147)、敷地北西にはタイに見られる精霊信仰のための祠であるサーン・プラフームがある(図148)。敷地を構成する特徴的な要素として、真ん中に植物があり四方に人が座れるような大きさのポッドが30個あり(図149)、地面には敷地を貫通するように並べられたタイルがある他(図150)、前述した緑地の存在が挙げられる。C門広場の屋台活動は前節のボズユイにおける分解過程を通じた場所への意味付けのように、これらの既存構成要素を含むものの潜在的有用性-まだ何かの役に立つということ-を実践者が受け入れる形で展開される。次項からそれを確認していく。

3-2-3 チェンマイ門広場の構成要素と時間帯別空間構成

まず、敷地である C 門前広場の空間を構成する要素の整理を行う。構成要素は主に 14 要素に分けられた。前項での構成要素の整理と異なり C 門前広場では、半固定-固定の 2 つに分けられる。半固定要素は、バイク、台車、自転車、屋台、机、椅子の 6 つで、固定要素は、お堀、サーン・プラフォーム、ポッド、タイル、横断歩道、緑地、木、チェンマイ門の 8 つである(図 155)。

C 門前で屋台活動は南に広がる旧市街と北に広がる新市街を横断する人々を受け止めるような形で展開されている(図 151-153)。前述した通り北にはチェンマイ門市場が広がっている。いわば C 門前広場は旧市街へ行く人の玄関口であり、新市街へ出る人の出口的な役割を持つ。インタビューによると、C 門前広場の屋台活動は 1995 年を境に分けられる。1995 年以前は土地の整備がされていない状態での屋台活動があったが、1995 年以降は行政による広場の整備により現在の形での屋台活動が展開されるようになった。現在広場での屋台の営業は行政の許可制であり基本的に店はそのルールに従っている。

C 門前広場での屋台活動では、前述したストリートマーケットのような敷地境界を示す線の存在は確認できなかったが、後述するように彼らは既存構成要素としてのものや場所を使いこなすことで見えない境界を形成しており、それはインフォーマルな専有として表出している。このインフォーマルな専有はおもにタイルラインや、ポッド、緑地敷地ラインを利用しながら組み立てられるもので、それは一分解し立ち去ることを前提に成される分解過程のうちに見出される。これは、前項でのボズユイでの活動では見られなかった公共空間の使いこなしであるが、ボズユイとは異なり彼らは基本的に 1 日ごとに分解過程を繰り返すため、その使いこなしにはより即興的な空間の組み立てが含まれる。

敷地である広場では時間帯別に異なる屋台活動が営まれ、通常営業時の様態は午前型、基本型、午後型の 3 つに分けられた。その中で滞留性行動と流動性行動の 2 つと、屋台の業種別に飲食系(a)、服飾系(b)、交通系(c)の 3 つに分けられた(図 154)。午前型の屋台活動では、(a) (b) (c) の 3 つが見られ、午後型では(b)の活動が見られた。しかし夜型の例外として、土曜日にあるウーアライ通りのストリートマーケットに合わせて普段より多くの屋台活動が見られ、(a) (b)に加え雑貨系(d)の活動が見られたが、本稿では扱わない。基本型は午前型→午後型または午後型→午前型に移行する隙間時間に現れる屋台活動が営まれない広場本



図 151 敷地中央から東の城門方面の写真



図 152 敷地中央から西のお堀方面の写真



図 153 敷地中央北から南の新市街方面の写真

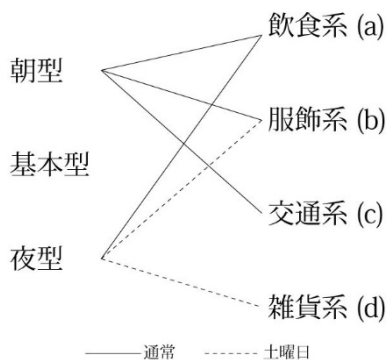


図 154 時間帯別に見られる屋台の業種

来の様態であり、既存構成要素であるポッドに腰掛けるような滞留性行動が多く見られた(図156)。

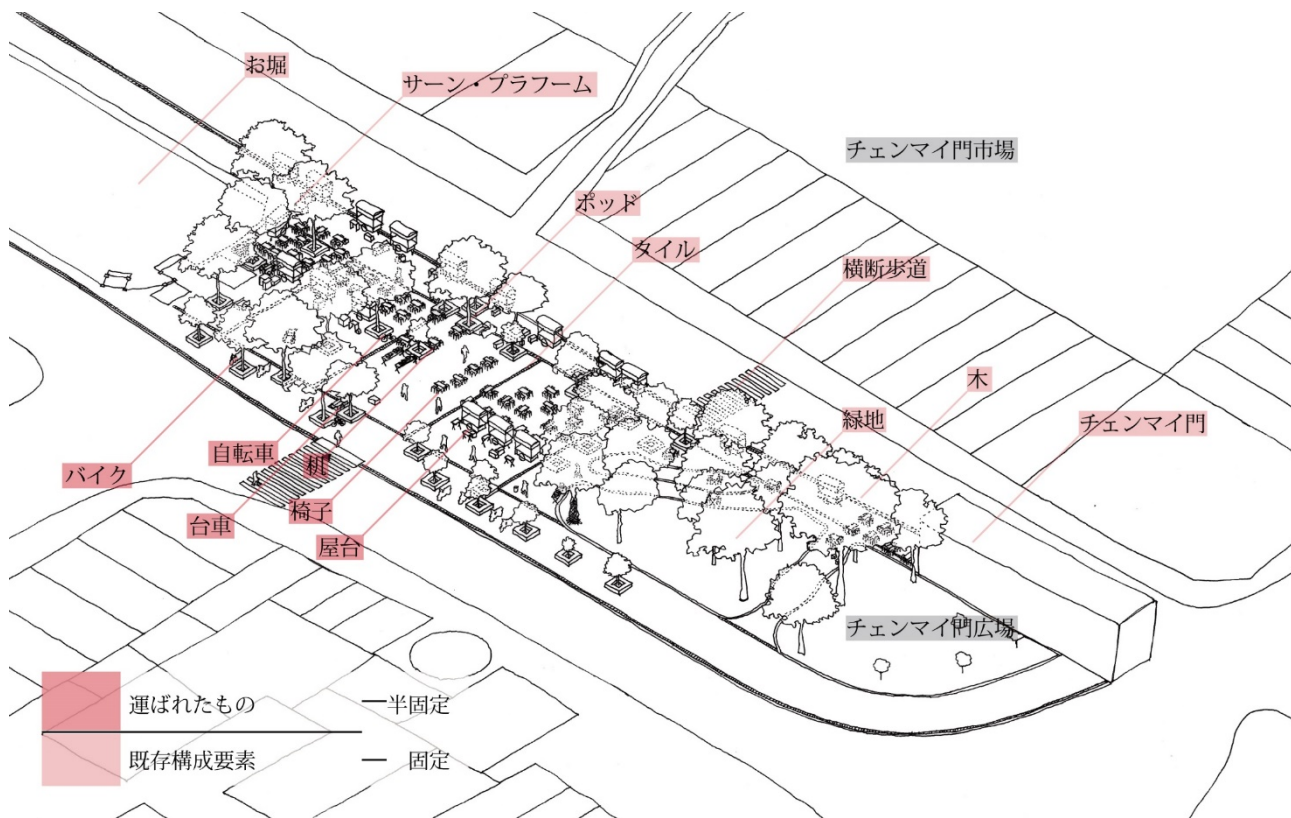


図 155 チェンマイもの広場俯瞰図 敷地構成要素

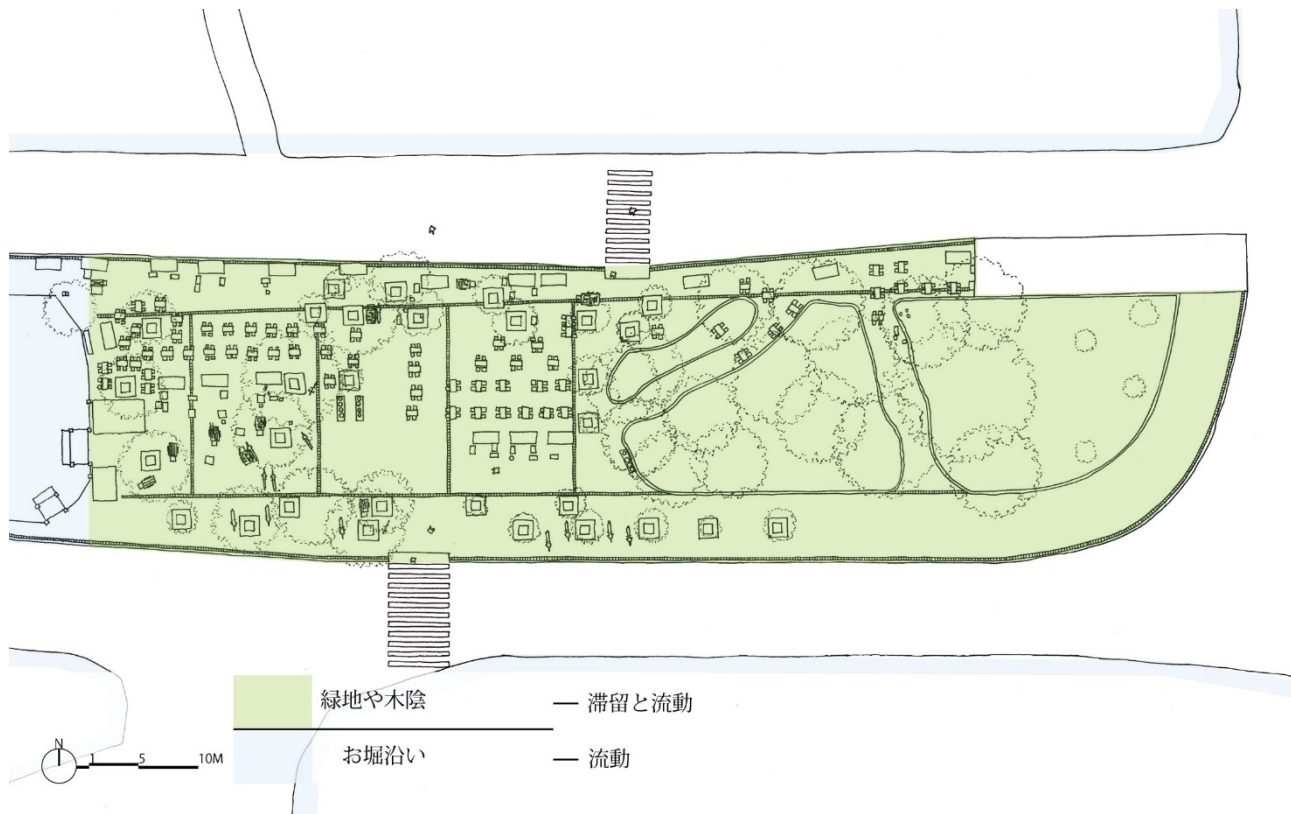


図 156 敷地平面図

敷地は道路に挟まれるようにあるが、その広場を使用して旧市街と新市街を行き来する人々がよく通る動線を図で示す(図 157)。



図 157 広場を使用した主な動線

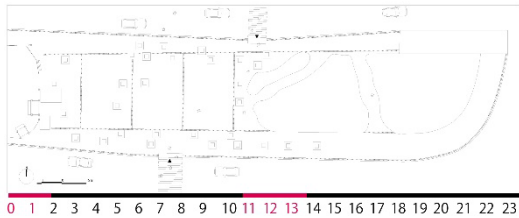


図 158 基本型

敷地における朝型と夜型の屋台活動時間帯と業種別活動について述べる。インタビューによると朝型はAM2-AM11 までの範囲で活動があり、夜型はPM2-PM12 までであった。敷地における活動は行政の指導により、一定の時間朝型と夜型の活動が行われない(図 158)。また管理下にある広場での活動では営業許可証の発行が確認でき、朝型は1日ごとに発行が行われ、夜型は1カ月ごとに行われることが分かった。朝型では(a) (b) (c)の活動が22店確認でき、それぞれ(a)5店(b)16店(c)1店あった(図 159)。また夜型では主に(a)の活動が最大で19店確認できた(図 160)。またその中で、公共性がある固定要素の緑地やポッドを専有しながら行われる活動が(a) (b)の活動範囲で確認できた。

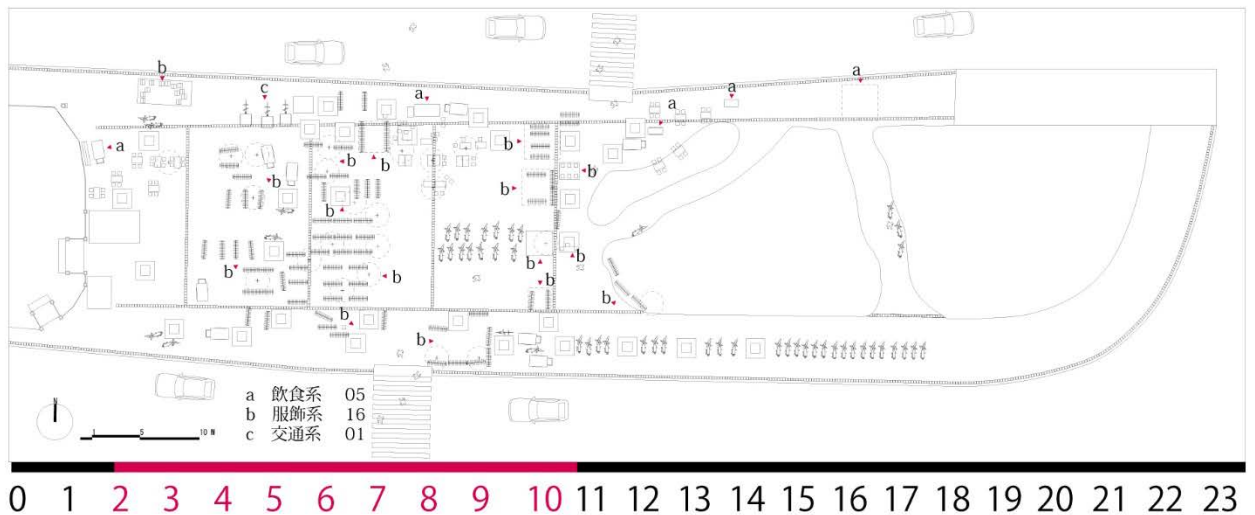


図 159 朝型 (a)(b)(c)

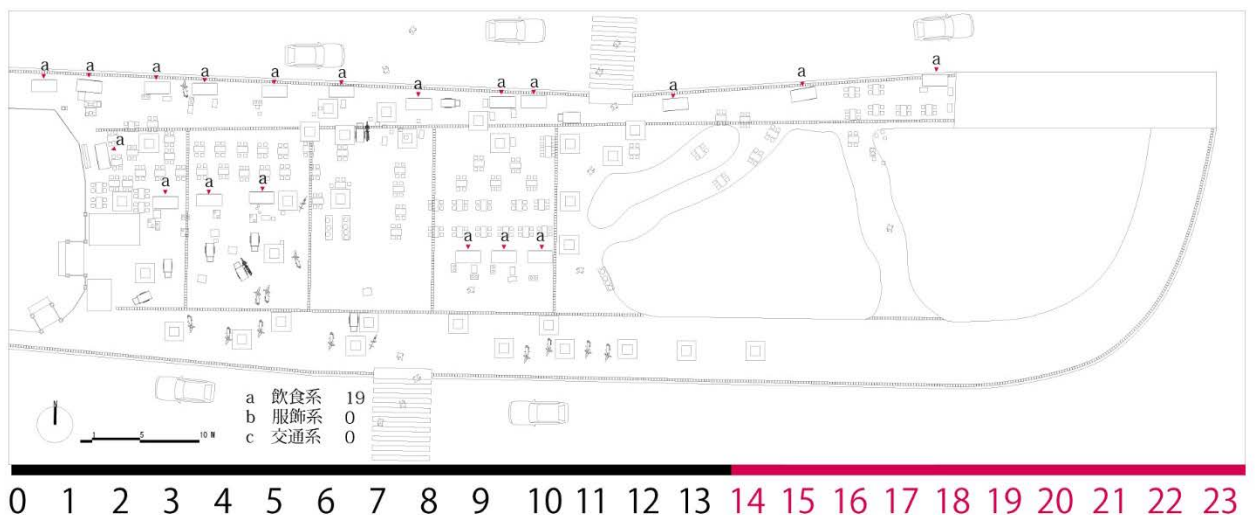


図 160 夜型 (a)

朝型夜型共に広場内にバイクや自転車を駐車する行為が確認



図 161 敷地に駐車する人々

でき、旧市街と新市街の狭間にある広場を駐車場、駐輪場としても使用していることが分かる(図 161)。

(a)の飲食系屋台のみで構成される夜型の屋台活動を例に敷地に見られた分節について述べる。夜型の活動において特徴的だったのが、店舗向きが統一される傾向にあったことで、屋台正面を北側に向けているのが 19 店舗中 18 店舗で確認できた。また、それに伴い北側の道路沿いに店舗が数多く並ぶのに対して、南側道路沿いでは店舗が確認されなかった。夜型の北側では下図のように屋台が列に並ぶことで、広場の客は道路側に回り商



図 162 北側から広場方向

列になって並ぶ風景



図 163 屋台の搬入

品を買うような風景が生まれていると同時に、道路を走る車側からの購買を可能にしている(図 162)。北側に正面が向く屋台群は賑やかなファサードを構成しながら、広場中央付近には飲食スペースが広がっており、実践者らは広場の短手方向の奥行を活用していると言える。そのようにファサードを構成することで敷地は大まかに3部分に分節されていることが分かる(図 166, 167)。

次に屋台の搬入搬出について述べる。(a)の屋台活動は、車輪がつきそれ自体で可動するものを基点に行われるが(以下屋台)、搬入搬出の際その屋台は、椅子や机、調理道具などの収納として使用される(図 163-165)。また、それとは別に台車や車を使用しても運ぶこともあるが、基本的にそのように運ばれるものは屋台活動時には活動範囲周辺に置かれ、作業範囲や飲食範囲をつくる。これらから分かるように、(a)の屋台活動では屋台の分解は伴わないが、ものを配置し、回収する中での継起する空間の分解と呼べるものがある。そのような中での空間の使いこなしは骨組みに対してのみではなく、屋台や屋台活動を構成するものの配置に表れるため次項でそれを確認していく。



図 164 ものが収納される台車



図 165 ものが収納される屋台

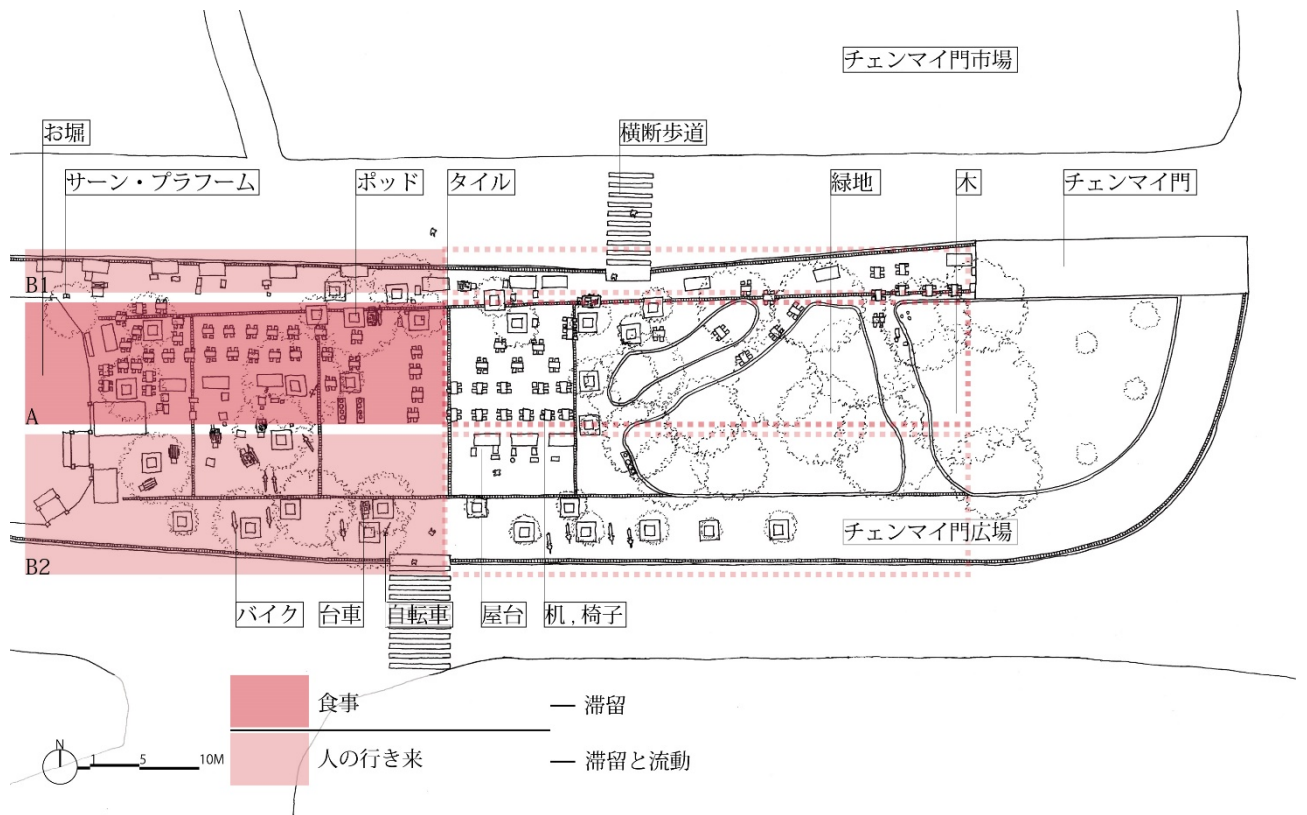


図 166 敷地平面図 夜型

屋台の配列により分節される敷地

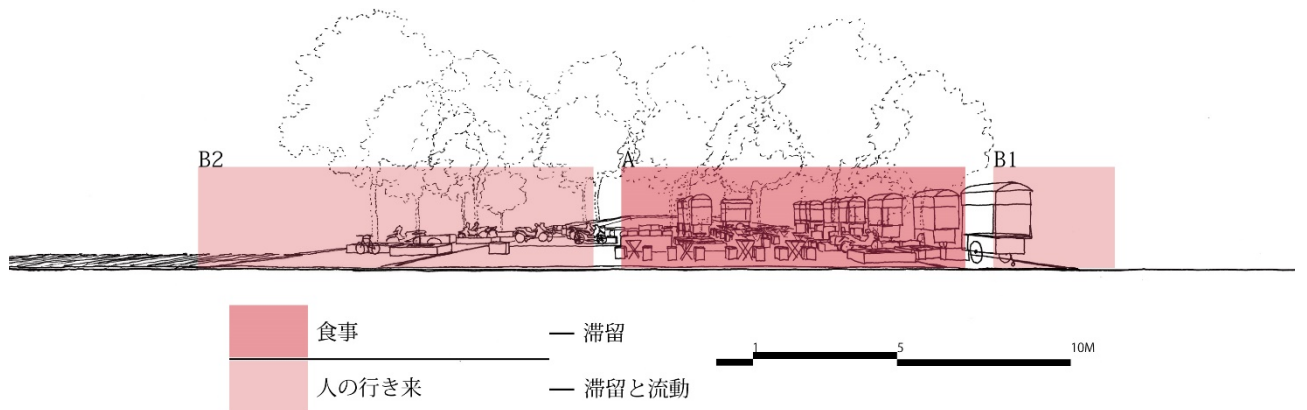


Fig.1 B2 から A にかけて
広場の中央部は机や椅子が並び、食事する人が見られる。



Fig.2 A から B1 にかけて
B2 の屋台は全てチェンマイ門市場に正面が向く。

図 167 敷地断面図 短手方向

3-2-4 屋台活動の空間構成



図 168 ポッド横に場所を取る(c)



図 169 分解過程に組み込まれる他の実践者

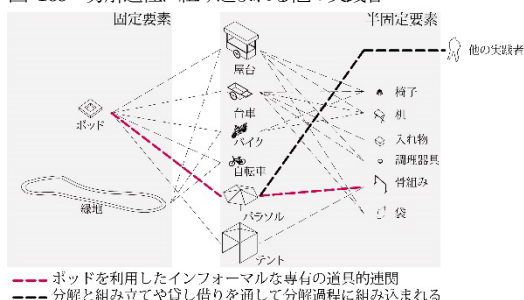


図 170 他実践者の道具的連関への参与による共依存



図 171 ポッドを基点に構成される(b)



図 172 ポッドそのものを専有するインフォーマルな使いこなし

敷地での屋台活動の空間構成を、朝型を例に確認していく。前節で述べた通り、朝型の敷地では(a)飲食系(b)服飾系(c)交通系の活動が見られた。まず(b)(c)の活動を確認した後、(a)における屋台空間構成を確認していく。またそれらの平面配置を図示する(図176)。これらの屋台は、広場の動線とかぶらないように配置される。

(b)と(c)は朝型の活動において確認できたものである。(c)は、広場を営業所にする人力車である。彼らは広場から客を送る商売をすることで、屋台を含む活動総体の賑わいに加わる。その中で、場所との関係に主体的な分解過程が見出せる。彼らは特定のポッド付近を基点に活動を行い、広場を縦横無尽に使いこなすわけではないが、特定の範囲に溜まる。広場内で活動する他の屋台活動の邪魔にならないよう配慮すると共に、隙間を見出しポッド付近の潜在的有用性を見出している(図168)。この場所への意味付けは単純であるが、他の活動においてもポッドへ寄り添うような形での使いこなしが見られることから、広場に見出される分解過程の基本的な態度といえる点で重要な活動である。

(b)の活動においては(a)のような屋台を使用するものではなく、骨組みと幕で構成されるテントやパラソル、服を陳列するディスプレイ用の骨組みの配置により空間が構成される。これらの構成要素は都度の物理的分解を伴うもので、その配置に夜型の屋台群配置に見られたような統一性はあまりなく、ほとんどは店舗ごとに異なる。またチャンクラン通りと同様にそれらの分解と組み立てを専門に仕事をする実践者がいることが分かった(図169)。その実践者に対するインタビューによると、彼らは分解や組み立ての他にパラソルを貸し出すことで収入を得ており、屋台活動は部材の貸し借りを含む関係性、すなわち他者との共依存関係で成り立つ場合があることが分かった(図170)。

これらの屋台活動でも(c)と同様にポッドを利用しながら平面的な領域拡張が確認できた(図171)。そしてそのようなポッドの利用は、ポッドそのものを専有する使いこなしにも表れることで1つの領域拡張の指標となる。その結果専有されたポッド付近に示唆される専有元の実践者の存在により、そのポッドはもはや公共性を失ったかのような様相を呈す(図172)。

また、緑地の縁ラインを基準に店を展開するような活動もあった(図173)。この店舗では緑地沿いがディスプレイ用のスペースへと変化していた。

テントを使用した屋台では、ポッドとポッドの間を埋めるよ

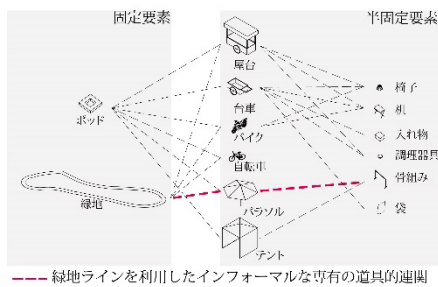


図 173 道具的連関(上図)と緑地沿いに展開する(b)(下写真)
ポッドの間をうめるようにテントがたてられる

うな配置の仕方が確認できた。これは、敷地における凹凸である不自然な配置のポッドを単体で認識せず、近接ポッド間の場所への意味付けを示すものであり、実践者は分解過程において平面的な繋がりを意識していることが分かる(図174)。

また、固定要素であるポッドを利用するのとは違い、ポッドに埋められた木そのものを利用し領域を確保する実践も見られた。その実践では、木に吊るした紐と布を結び断面的な2次的面をつくりプライバシー領域を確保しているが、これは敷地における空間操作の1つといえる(図175)。

このように、広場における分解過程には固定要素であるポッドや緑地ラインなどを利用した平面的・断面的な領域の確保が付随しており、それらは公共空間におけるインフォーマルな専有となって表出していることが分かる。このインフォーマルな専有は前章にて言及した、物理的な分解を前提に成されるものであり、そこにはボズユイの活動と同じように、実践者固有の道具的連関に既存構成要素を取り入れる極めて個人的な実践があることが分かる(図176)。



図 174 ポッドの間をうめるようにテントがたてられる



図 175 木を利用しながら布を張ることでプライバシーの確保がされている

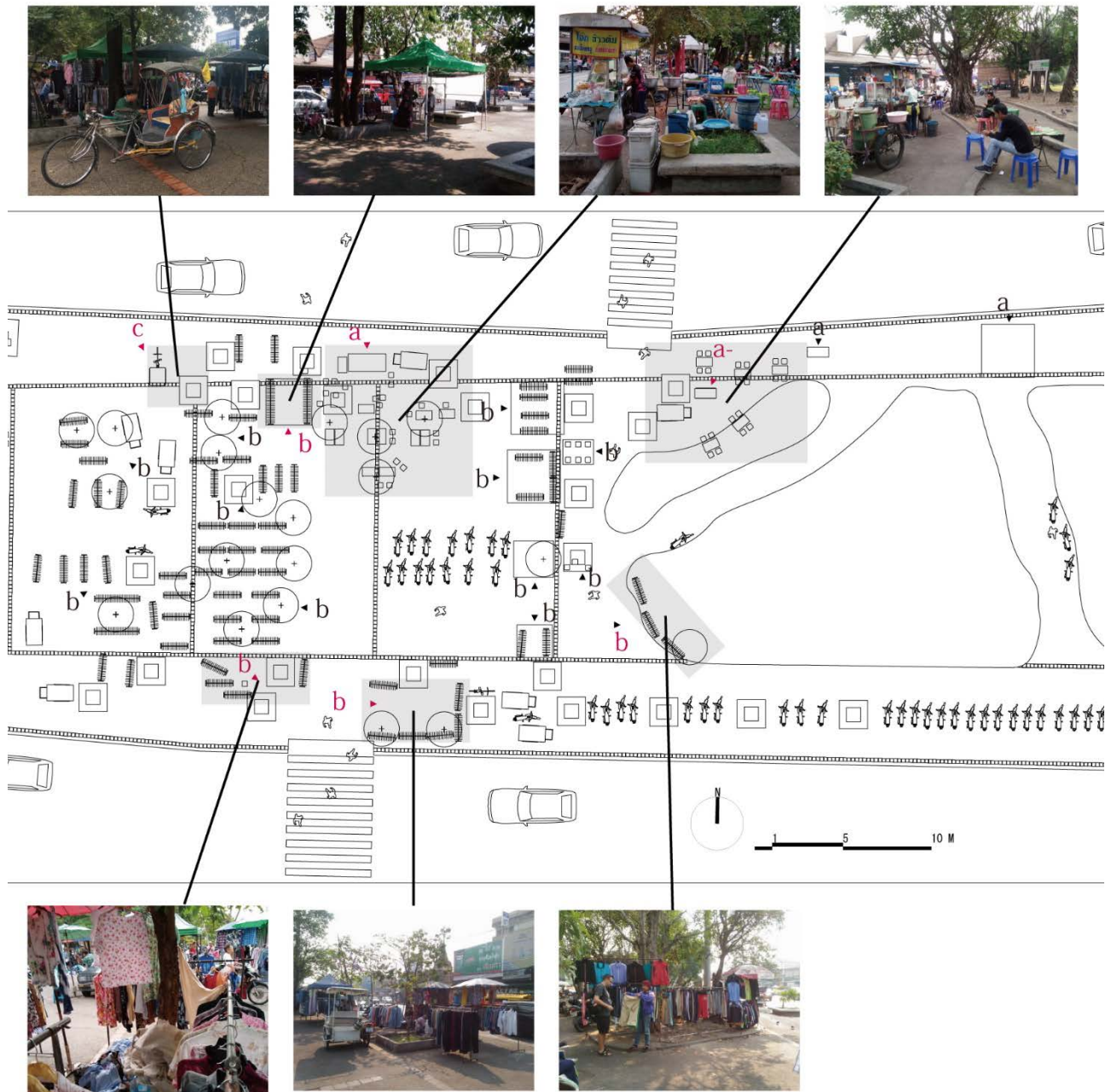


図 176 敷地配置図 広場における活動(a)(b)(c)

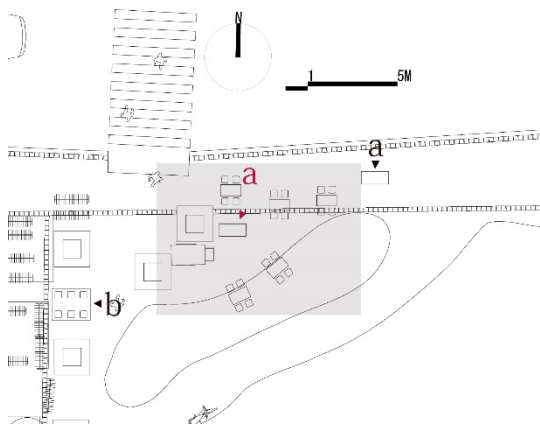


図 177 平面配置図

次に(a)の活動について述べる。(a)でも(b)(c)と同じように、ポッドや緑地を利用した分解過程が見られた。まず敷地の中央東側に位置する活動について述べる(図177)。この店舗はコーヒーなどの飲料を提供する店舗で、店主は60歳代の女性である。彼女は広場での営業を42年間行っており、1995年の広場の整備の後は現在の場所で営業をしていることが分かった。営業時間はAM6-AM11である。営業許可証の代金20バーツ、日本円で約70円を毎日支払って営業しており、毎日行政から許可証の発行委託を受けた女性がやってくる(図178)。緑地とポッドに挟まれるような形で屋台を配置することで活動が営まれ、調理用道具などを置くことによるポッドの専有と共に、近接する緑地内部へ客



図 178 営業許可証の発行

席を配置することで店舗領域を確保する専有も見られた(図 179)。ここでは、ポッドは実践者の作業領域、すなわち実践者の個人的な領域に属し、緑地は客の飲食領域として公共性をもたせて他者へ提供していることが分かる。これは前述した(b)で見られる緑地ラインへの意味付けと似ている。しかし(b)で見られたように商売道具を展示するため緑地沿いをディスプレイ化する行為は、緑地沿いから内側に個人的な作業領域を確保するのに対して、業種が異なる(a)ではあくまでポッド付近にそのような個人的領域を置きながら、うまく緑地内部を利用しており、業種により固定要素の使いこなしが変化することで広場の賑わいに寄与していると言える。実践者の活動において重要なのは、まず第1に個人的な作業領域を確保することであり、その際固定要素との出会いのもと、使いこなしが生まれるが、これにより実践者はその場所へ愛着を抱く。実践者へのインタビューにおいて、「営業を行うこの場所は好きですか?」という質問に対して彼女は迷いなく「はい」と即答した。その背景には長年の屋台活動から来る場所への愛着があり、それは本来共有物であるはずの固定要素をインフォーマルに専有しながら、独自の意味付けをもって使いこなし生き方からくるものである。



図 179 インフォーマルな専有実践

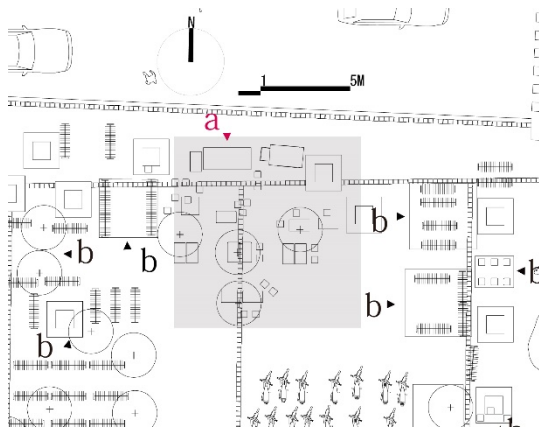


図 180 平面配置図

このように、敷地は実践者の志向により場所の様相を形作るといえ、それはポッドそのものやポッド間、緑地のライン内に領域を見出すような実践者の個人的でインフォーマルな使いこなしからくるものである。

次に敷地中央西側で展開される屋台について述べる(図 180)。この屋台の屋台主は20年同じ場所で営業をしており、上述の屋台と同様に毎日営業許可証を行政から発行してもらい活動している。営業時間はAM3-AM10である。この店舗では、ポッドを使用したものの配置が確認できそれに伴う調理作業領域の確保が見られた(図 181, 182)。

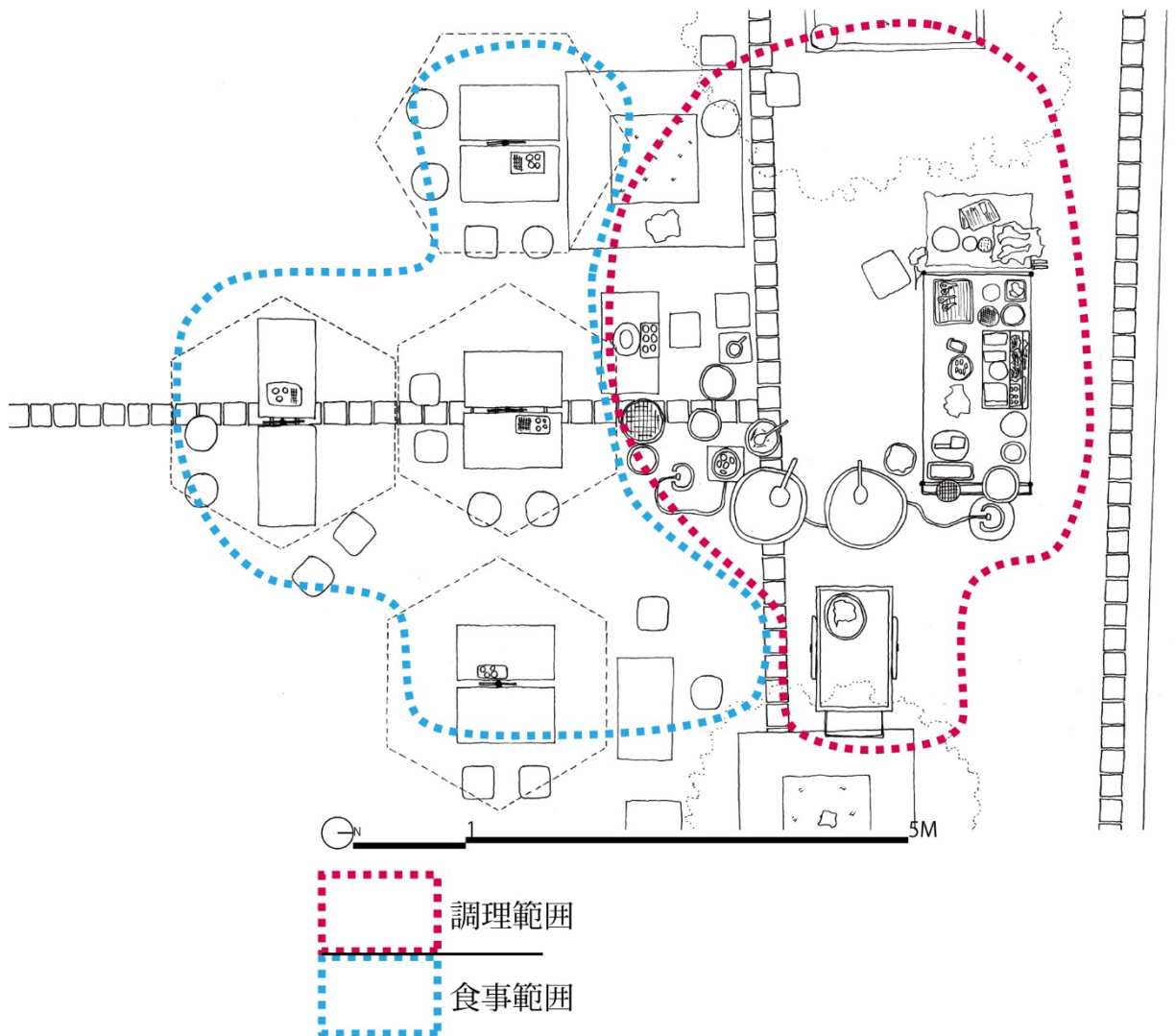
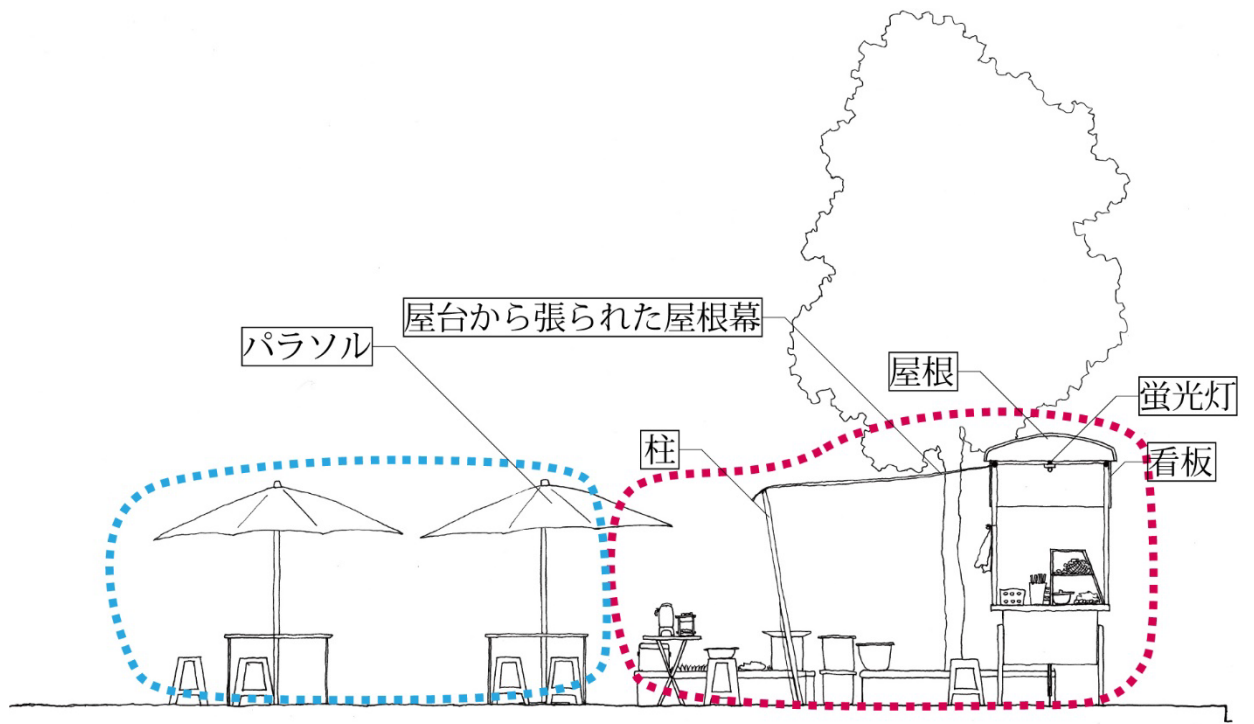


図 181 屋台平面図・断面図 (a)

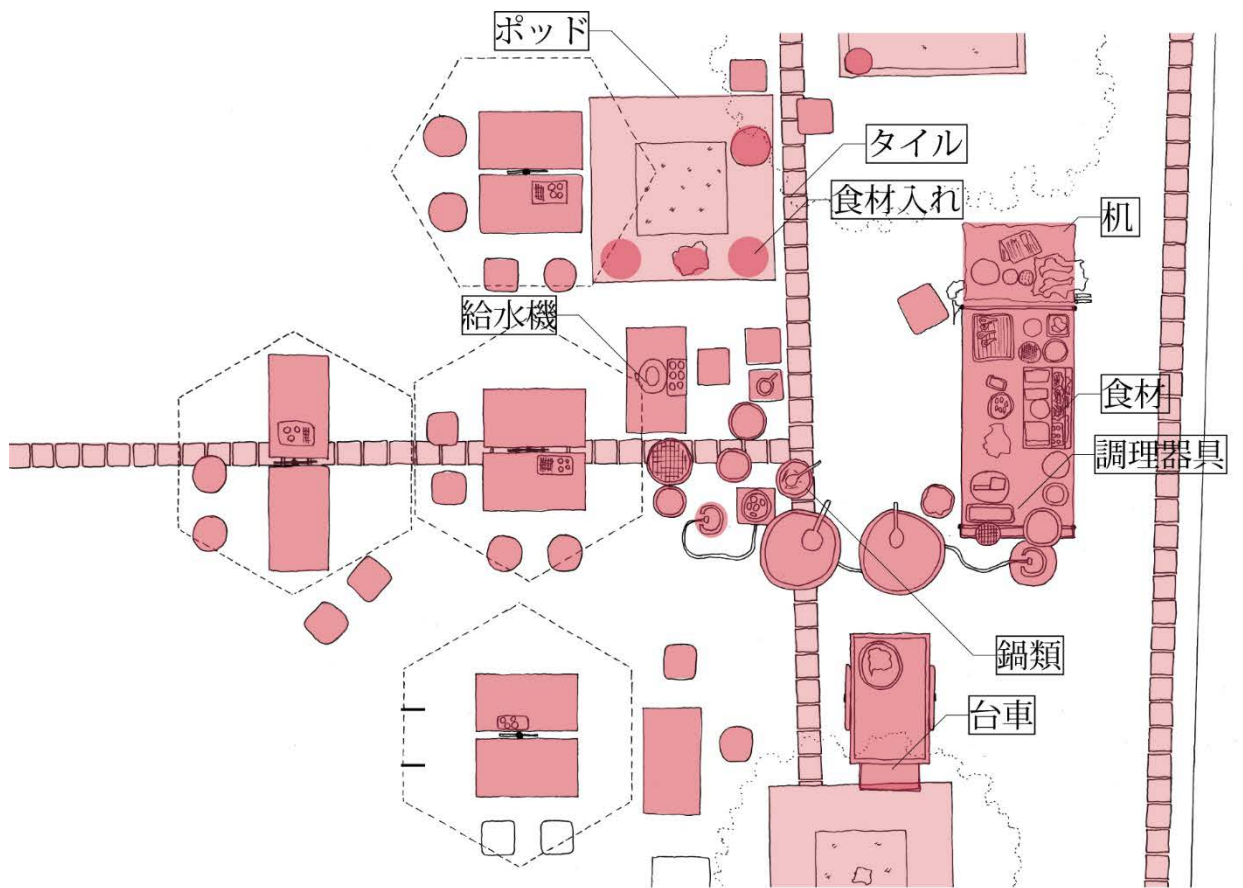
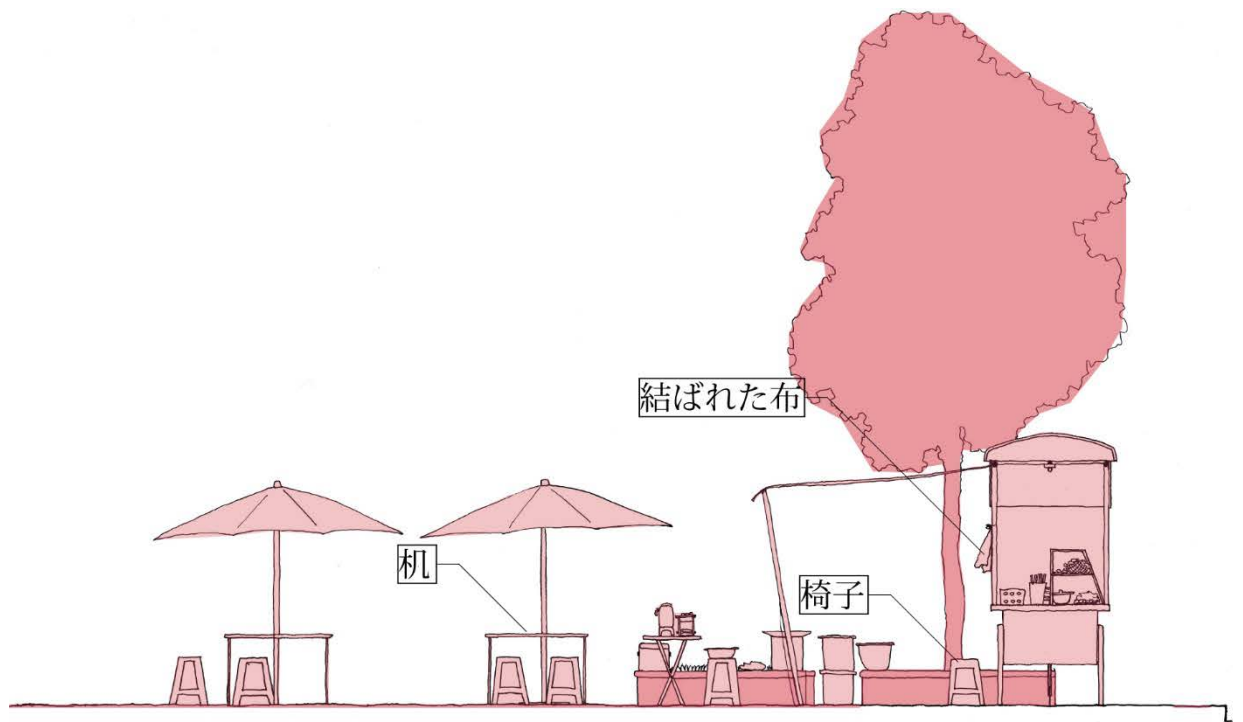


図 182 ものの配置



図 183 車を使用しての搬入搬出



図 184 調理器具を並べて作業領域を覆う(写真左) 後方に続くパラソル(写真右)



図 185 給水器

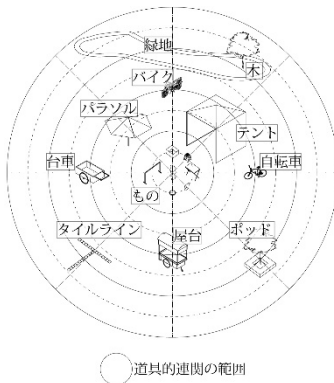


図 186 道具的連関モデル図

この屋台でも、ポッド間の隙間を埋めるかのような作業領域の確保が確認できた。ものの搬入搬出は車を用いて行われ、はじめにそれらをポッドに置くことで領域を形成していく(図183)。また、調理器具の鍋などを屋台周囲に広げ、作業領域を覆うことで閉じられた実践者の居場所を生んでいる他(図184)、屋台屋根からは屋根幕の張り出しがあり、この断面的操作で拡張された領域は、後方に続くパラソルの覆いにより屋台周囲に一体的な空間を生んでいる。敷地外から持ち込まれたこれらの半固定要素は、固定要素であるポッド間にうまく収まっているが、この中でつくられる作業範囲と客席の境界に位置していた

のが、その間に置かれる給水器と一部の鍋であった(図185)。この屋台活動では、断面的に連続する空間を生みながら平面的な分節をものの配置によりつくっていることが分かる。

以上、屋台活動を確認してきた。これらの空間でも、ボズユイでの活動と同じように、場所への個人的な意味づけに伴う道具的連関が確認できた(図186)。また、分解過程の出会いのうちに潜在的有用性を見出し、独自の意味付けを行うことで、個人的な空間をつくっていることが分かった。このような広場での道具的連関は、ポッドをものの置き場にしたり、生えている木を利用したりしながらつくられ、そのような活動を通して実践者は広場に親しんでいると言える。身体を基点に即興的に行われる活動が作り出す連関は、身体の周辺から広がりを持って広場を覆いつくしているとも言え、一個人が行う敷地の活動は、敷地本来のおおらかさを存分に引き出している。また屋台活動を下支えする個人的な使いこなしを目にすることで、実践者以外の他者もまた広場への親しみを獲得できる。しかし、実践者はあくまで分解し立ち去ることを前提にしており、利他的な存在の仕方を行っているとも言えるが、今まで見てきたように彼らの活動は利他的であると同時に個人的な状態でこそ可能なものである。個人的な空間のありかたは、他の存在を鑑みない

こととイコールではなく、他の存在への配慮があるからこそ、個人的な所作を可能にすることが、彼らの活動から分かる。分解過程の空間実践に潜むのはこのような利他的であると同時に個人的である対立性をもつありかたであり、その対立性は他の存在とともにあることを許容する。この「～とともに」あることを許容する一種のおおらかさが仮設的空間であるUSMにある根本的な質であり、同時に分解過程の基礎的な性質と言える。道具的な存在はそもそもある固有の連関「～のために」という語句で繋がるものであり、「～のために」あるものはその「～」とともにあるものであるからだ。

分解という言葉を「うつろう作用」として紹介した藤原は、分解という概念を部品への分解から再構成という生産工程の意味で捉えることに批判的である⁹⁶。むしろ、分解される存在が次なるものの構成要素へと同時に変化しているという動的な視点を投げかける。藤原は都度崩れては組み立てられるという循環で成り立つ積み木遊びを引用しながら、積み木の崩れるその瞬間鳴る音についてこう述べる。

それは、積み木の分解の副産物であり、発酵の音である⁹⁷。

発酵の音というところに含意されるのは、次なる存在へと同時に変化する視点のことである。それは屋台の現象でも説明が可能だろう。(b)の服飾系屋台の分解過程において見られた、服をかける骨組みが分解され放置される風景は、まさしく発酵した空間を形作るものであった(図187)。用済みの骨組みであると同時に、あくる朝には服を纏い立ち並ぶことを想起させるものであり、このときに広場における使いこなしが場を発酵させていると言える。このように、分解過程のうちにみる発酵する場という視点により、仮設的空間という枠組みのうちにある分解空間と呼べるものの存在を想定できる。それは人や他の存在の手を介しながら空間を分解することで、他者を受け入れる空間である。

次項では、出会われる空間の設計手法を探るために今まで見てきた分解空間から抽出した性質の図化を行った後、建築に当てはめて評価シート作成を行うことで出会われる空間について考察する。



図 187 (b)の骨組みが漸散する風景

⁹⁶分解の哲学 p108 藤原辰史 青土社

⁹⁷分解の哲学 p101 藤原辰史 青土社

3-3 空間的性質の抽出・図化・評価



fig.1 岩場 / 宿营地



fig.2 ポッドの専有 / 広場



fig.3 ものを吊る / 屋台



fig.4 ポッド間 / 広場



fig.5 性質の図化 / 対話

ものや場所の潜在的有用性 - まだ何かの役に立つということ - を見出す実践者は、既存構成要素の物質性を受け入れた上で、自分なりに使いこなす。それはストリートマーケットを含めた屋台の骨組みのありかたや岩場のものの集積に見出せる。そこにあるのは、他者に我を通す姿勢ではなく、寄り添う形で居場所をつくるありかたである。このような性質を「対話」とする。



対話



fig.1 掛ける / 紐



fig.2 置く / ボズユイ



fig.3 張る / 木



fig.4 置く / 広場

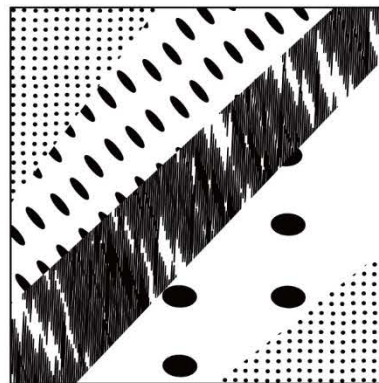


fig.5 性質の図化 / モンタージュ

ボズユイの骨組みや天幕地を覆う紐にはものが掛けられたり、吊るされたりする他、屋台の骨組みや敷地の木にものが張られたり、置かれたりする。このようにものが散在することで、あらゆる要素は独自に意味付けられている。そしてそれは、個々に意味づけられた場所の集合で空間が構成されていることを示すものである。このような性質を「モンタージュ」とする。



モンタージュ



fig.1 放牧 / 宿营地



fig.2 休憩 / 宿营地



fig.3 立ち去り / 広場



fig.4 立ち去り / 広場

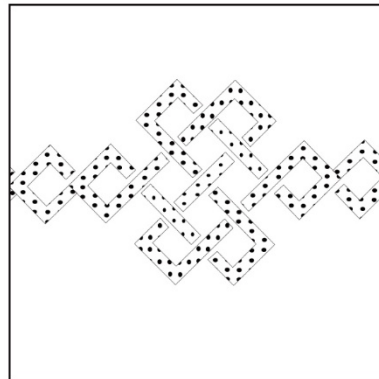


fig.5 性質の図化 / 結び目

仮設的空間を経験することで、既存構成要素は身近なものとなる。ボズユイの活動では山並みそのものがアイデンティティの基点になったり、屋台の長年の活動では誰かにとっては何でもない場所が実践者にはとても大切な居場所となる。このように空間の仮設性を通すことであちとこちらの存在が結ばれる。このような性質を「結び目」とする。



結び目



fig.1 段差を埋める



fig.2 段差を埋める



fig.3 骨組みを埋める



fig.4 分解途中

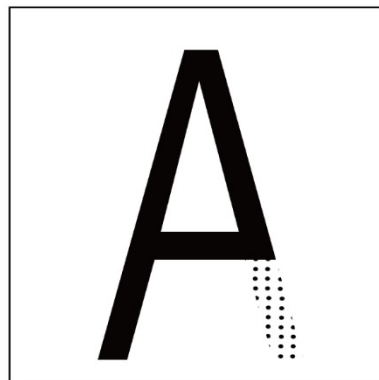


fig.5 性質の図化 / 途中でやめる

骨組みを部分的に埋めることや、路面段差を埋めるように一部の骨組みを組むことで安定した面を形作る操作は、既存構成要素に対しての全面的な信頼ではなく、ある程度恣意的に安心できる空間が構成されることを示すものでもある。また組み立ての最中に放置されるものづくり出す風景にも分解を前提になされる半端さがある。このような性質を「途中でやめる」とする。



途中でやめる



fig.1 ものを巻く
/ ポズユイ



fig.2 張る
/ ストリートマーケット



fig.3 専有 / ポッド



fig.4 場所の更新 / 広場

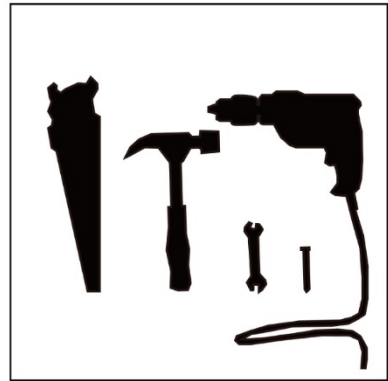


fig.5 性質の図化 / DIY

都度の空間の分解を繰り返すことで既存物は更新の余地をもち、終わらないイメージは、完成される形を持たないことと繋がる。そしてそれは個人的な趣向の変化を許容する。それにより、場所の捉え方が変わろうとも、更新の余地をもつことで断片的な変化を受け入れる。このような性質を「DIY」とする。



DIY



fig.1 宿营地までの移動



fig.2 台車による移動



fig.3 移動途中 / 広場



fig.4 移動途中 / 広場

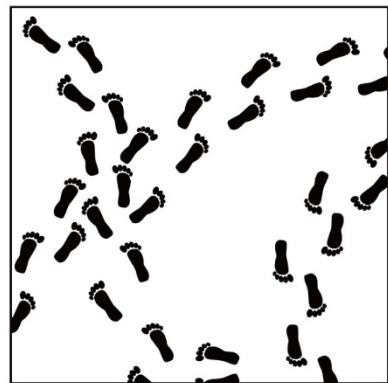


fig.5 性質の図化 / 遊動

ボズユイや屋台の活動には、つくりあげられた空間の背後に潜む場所への配慮がなくてはならない。それは、同じ場所に留まることでは獲得できず、放牧地を回ったり、屋台の搬入搬出の動きの中でつくりあげられる。またその動きは客体である私にも波及する。それは直線的ではありえなく、紆余曲折を経ながら連続する動きである。このような性質を「遊動」とする。



遊動

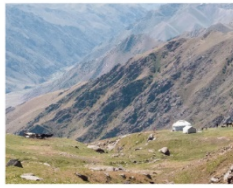


fig.1 ぼズユイ



fig.2 屋台 / 広場



fig.3 組み立て
/ ストリートマーケット



fig.4 屋台 / 広場

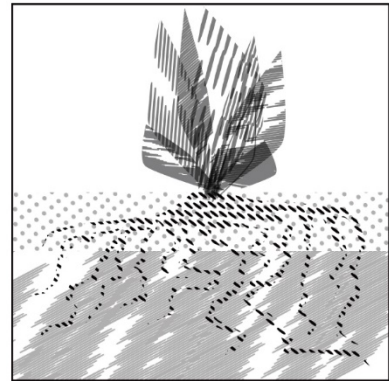


fig.5 性質の図化 / 根有り草

分解し立ち去ることを繰り返して実践者は場所との結びつきを積層させる。それは例えばパラソルをたてたり、屋根幕を広げたりするような簡単な動作からくるものであり、反復する動きは、他の存在である場所との同一性をもたらす。愛着とは、見慣れた繰り返しのなかにも見出せるものである。このような性質を「根有り草」とする。



根有り草



fig.1 ゲレゲとウーク
/ ぼズユイ



fig.2 分解 / 広場



fig.3 立ち並ぶ屋台 / 広場

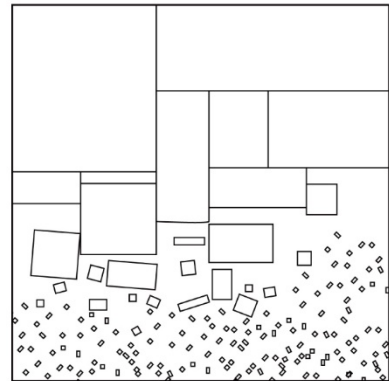


fig.5 性質の図化 / ほぐす

継起する空間の分解は、部材の細さやつくられる面の軽快さを伴う。いわゆる、軽くて安いものとして認識されるものによって空間は構成される。その軽快さは建築以下身体以上の範囲で行われる使いこなしに適応したものであるが、その軽快さからくる不安定さは空間にリズムを与え、他者にとって閉じられた場所を身近なものにする。このような性質を「ほぐす」とする。



ほぐす



fig.1 宿营地



fig.2 ボズユイ

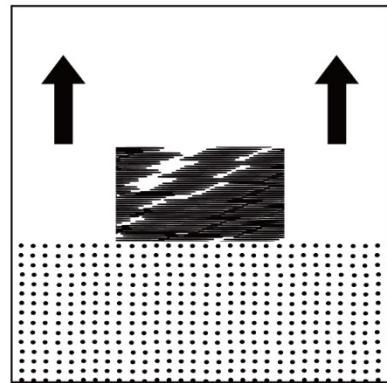


fig.5 性質の図化 / 異形



fig.3 屋台 / 広場



fig.4 屋台 / ストリートマーケット

仮設性をもつボズユイや屋台は、それ自体が可動性をもつために、どこにでも空間を構成できる。そのようにして山並みに唐突につくられる住居や、広場や路上に現れる屋台は空間に起伏を与える。揃った景観にときに違和感を与えるそれらは、骨組みを大地に埋めたり、屋根幕を張り領域を拡張しながら唐突な出会いを生む。このような性質を「異形」とする。



異形



fig.1 ポッド間



fig.2 屋根幕

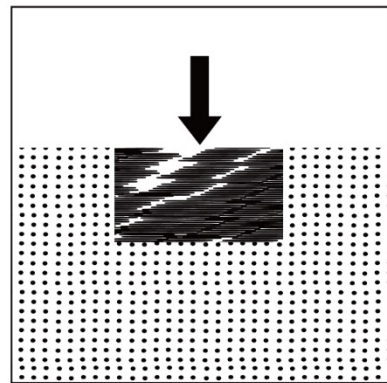


fig.5 性質の図化 / 平滑



fig.3 緑地内に収まる



fig.4 ポッド間

広場の屋台活動におけるポッドへの意味付けは、ポッド間の隙間を見出したり、ポッド位置を反復するようになされた。またポッドの木そのものを利用して空間の凹みを埋め、ゆるく閉じることで個人的な領域を確保するものもあった。まるで空いた隙間を埋めるように滑らかさを生んでいる。このような性質を「平滑」とする。



平滑



fig.1 ボズユイ



fig.2 木柱 / 宿营地



fig.3 屋台 / 広場



fig.4 屋台 / 広場

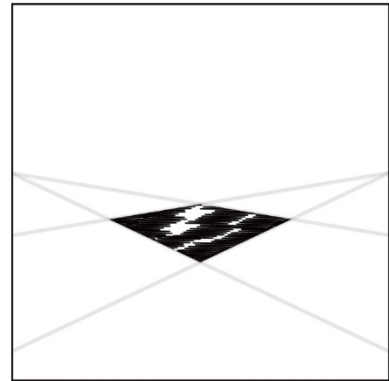


fig.5 性質の図化 / 馴化

一時的な間借りに伴って骨組で居場所を囲ったり、もので囲うことは、個人的な領域をつくりあげる。それは立ち去ることを前提に成されるが、一時的な専有によって場所は道具のように扱われる。動物に対する共依存関係のように、場所を飼いならすことで利する実践者の存在が見出せる。このような性質を「馴化」とする。

▶▶▶▶▶ 馴化



fig.1 小川 / 宿营地

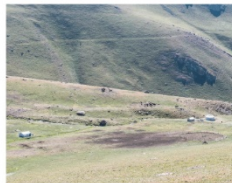


fig.2 山並み / 夏营地



fig.3 ポッド / 広場



fig.4 緑地 / 広場

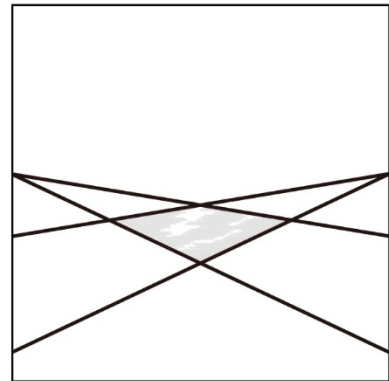
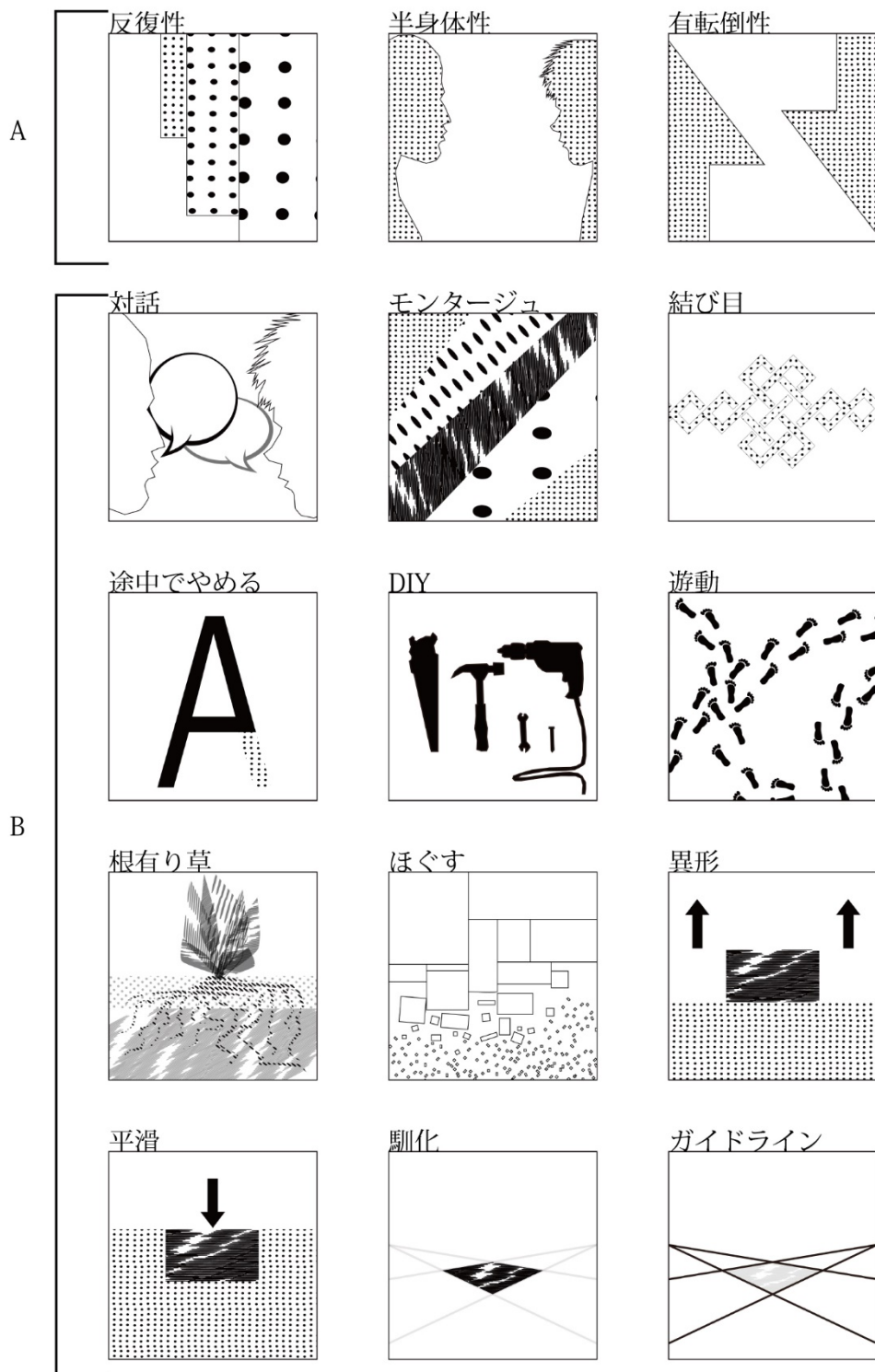


fig.5 性質の図化 / ガイドライン

組み立てられたボズユイやテント、空間を構成するパラソルや屋台は、ある程度自立したものである。その自立性故に、ときにそれらにまわりつくようにものが配置される。またそれらの空間自体も、自立性をもった既存構成要素を利用することで成り立つ。そこには、固有の使いこなしを下支えするラインがある。このような性質を「ガイドライン」とする。

▶▶▶▶▶ ガイドライン



A 文献調査にて抽出した性質

B フィールド調査にて抽出した性質

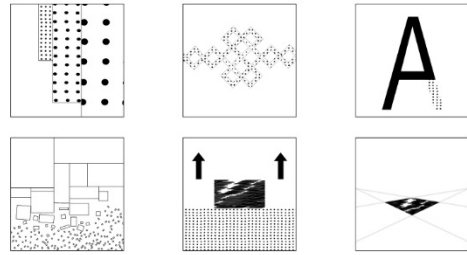
図 194 空間的性質の抽出

コメント

建物の規模感からくる徹底的な重さを、ブロックをずらしながら積むことで、その反復する構成要素に軽快なリズムを生み出し、重さを消している。一部ブロックが飛び出すことによって、領域の拡張を思わせるかのような雰囲気を出している。



No-1
 名称 Anacleto-Angelini
 国 チリ
 年度 2014
 用途 学校施設
 設計者 ELEMENTAL



コメント

山並みの傾斜に逆らうかのように反っているが、この傾斜を反転させる操作から、内部の切り取られた風景に、より積極的に意識を向けることができる。



No-2
 名称 Las Cruces Lookout Point.
 国 メキシコ
 年度 2010
 用途 休憩所
 設計者 ELEMENTAL

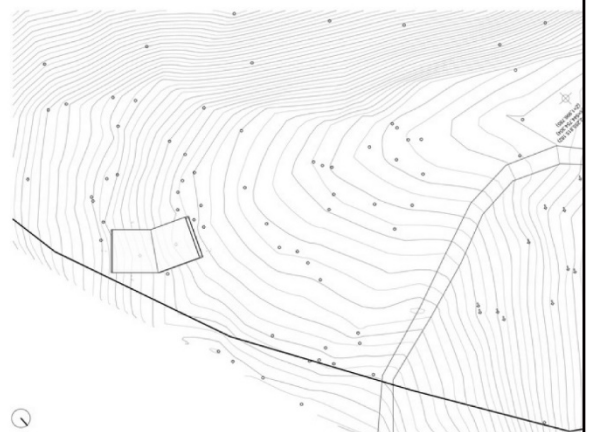
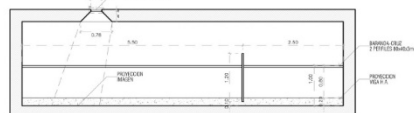
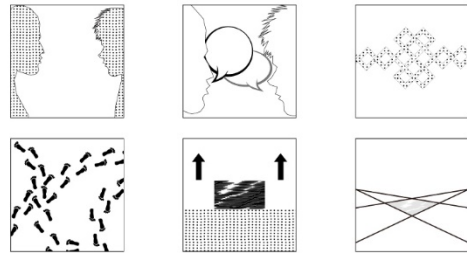


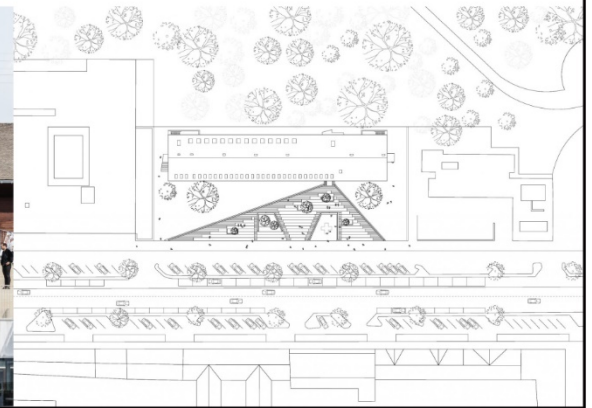
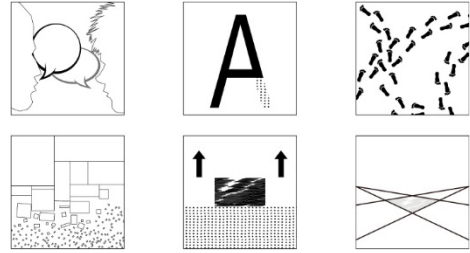
図 195 建築評価シート

コメント

大階段をつくり、既存建物へのアプローチを3階にした改修である。道路前面につくられた階段は入口に向けながら収束し、階段内部の光景が下にあることで上と下での異なる関係を調整している。



No-3
 名称 Red Cross Volunteer House
 国 デンマーク
 年度 2017
 用途 Community Center
 設計者 COBE



コメント

襞のように連続した床面が、建物内の活発な動きを予見させている。床面が連続して構成されることで、機能が異なる階や部屋同士を繋ぎ、建物の一体性に寄与している。



No-4
 名称 Roy and Vagelos Education Center
 国 USA
 年度 2016
 用途 Research Center
 設計者 Diller Scofidio+Renfro

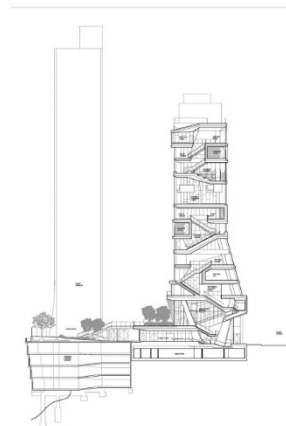
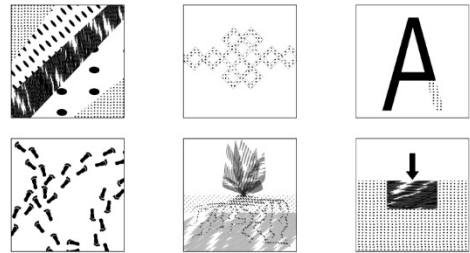


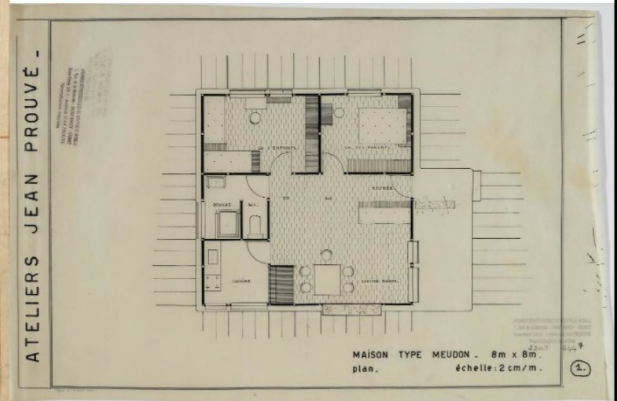
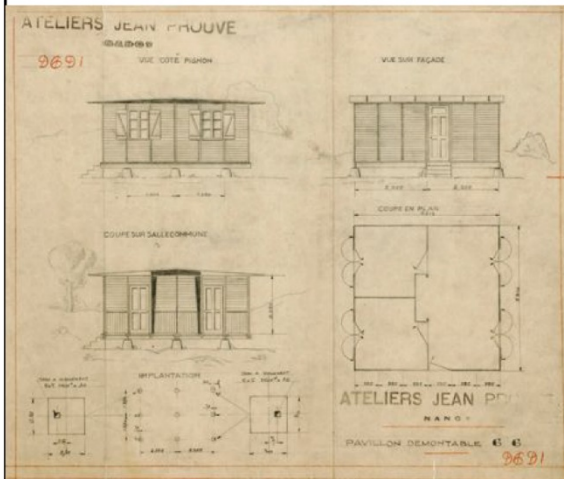
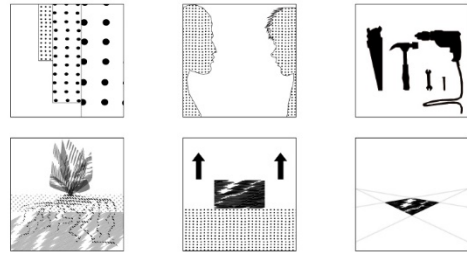
図 196 建築評価シート

コメント

門型フレームの簡素で美しい構造が特徴的な住宅である。床などを骨組みである柱梁のユニットに付けることで分解することができる。しかし例え分解されずとも部材の反復、空間の拡張を予期させるイメージからくる動性は空間に中心と周縁を生む。



No-5
 名称 6×6
 国
 年度 1944
 用途 住宅
 設計者 Jean Prouvé



コメント

壁や梁が内部と連続しながら外部にはみ出すように空間がつくられる。水平に伸びる住居は、内部の動きを受け止めながら、不安定な動きのある部材を通して外部へと広がっていく。



No-6
 名称 Bond House
 国 USA
 年度 1960
 用途 住宅
 設計者 Richard Neutra

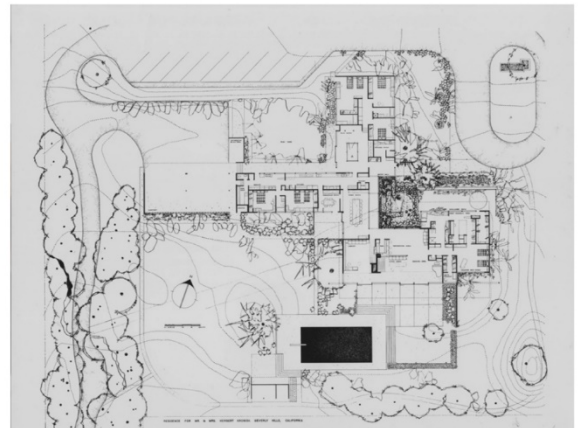
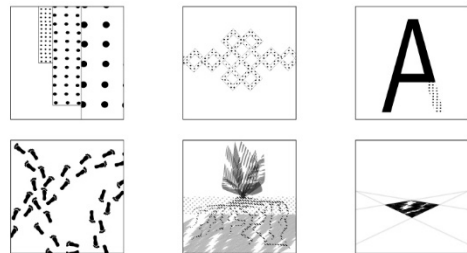


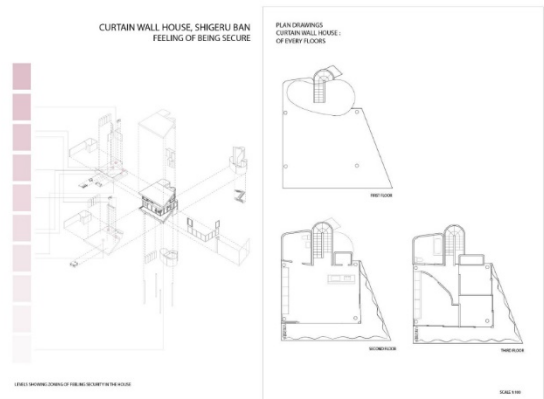
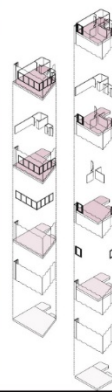
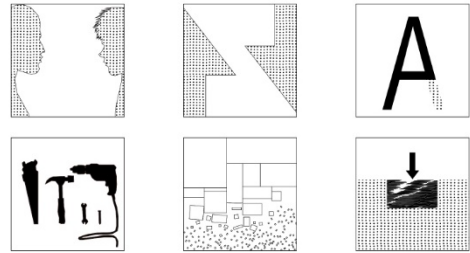
図 197 建築評価シート

コメント

テラスにある大きな幕地が特徴的な住居である。それを閉めれば1つのプライベート空間になり、開けば前面道路に近い半パブリックな外部になる。開け閉めという単純な動作を外部に取り入れた住居は、生活に1つの選択肢を与える。



No-7
 名称 カーテンウォールハウス
 国 日本
 年度 1995
 用途 住宅
 設計者 坂茂



コメント

現在も使用されており、カプセル住人による窓の改装、増築が目立つ。内部はシンプルな空間であり、それ故に好む住人が多い。カプセルの更新はされていないが、更新可能性を今なお残すことで、住み続ける住人と建物の独自の出会いを生んでいる。



No-8
 名称 中銀カプセルタワー
 国 日本
 年度 1972
 用途 集合住宅
 設計者 黒川紀章

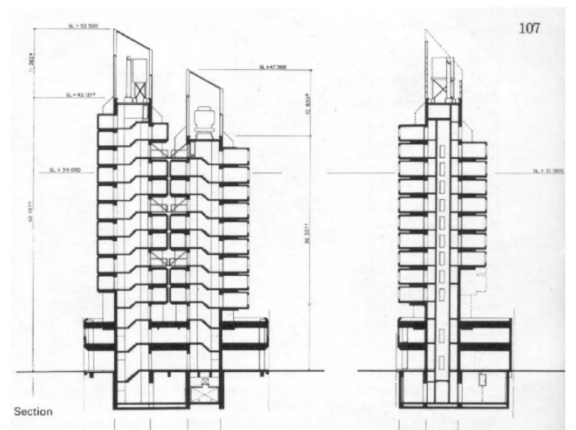
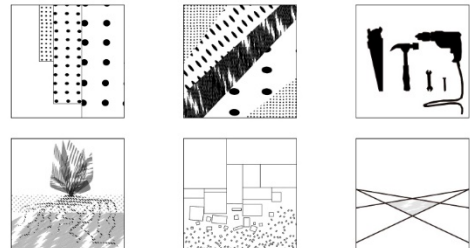


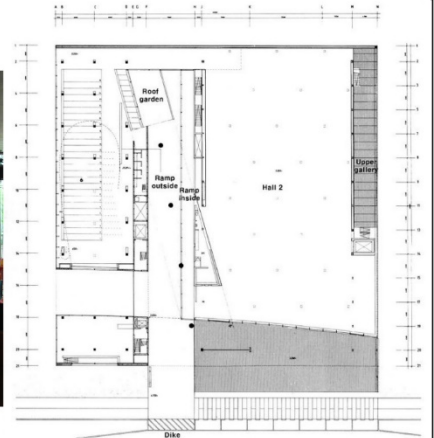
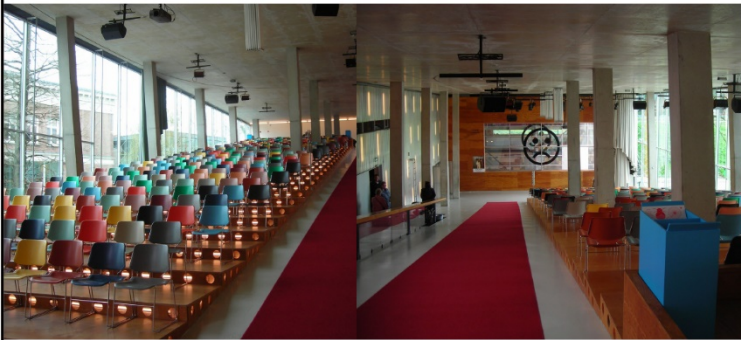
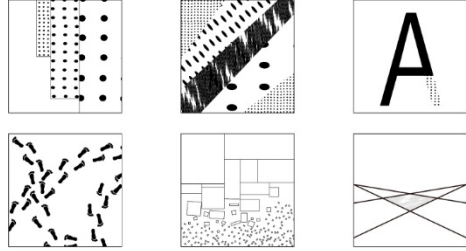
図 198 建築評価シート

コメント

内部を通る柱には、床の傾斜に合わせて直角になったものがあるが、柱が反復する中で一部の柱に上部から切断され通らない柱がある。この柱の存在を生む、切断という操作があることによって、視線の抜けを確保しながらも空間に動きを生み出している。



No-9
 名称 Kunsthall
 国 オランダ
 年度 1992
 用途 美術館
 設計者 OMA



Dike level plan, main access

コメント

屋根面の上から鉄骨が飛び出る外観が特徴的な住宅。積み上げられた階層を貫くエレベーターがあり、動く床によって内部空間の意識は垂直方向に向けられる。そしてその意識は屋根面の上の鉄骨先が下部に繋がっていることで、上下の動きが伴う。



No-10
 名称 Maison Bordeaux
 国 フランス
 年度 1998
 用途 住宅
 設計者 OMA

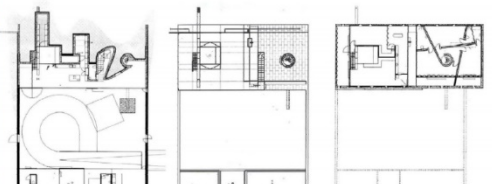
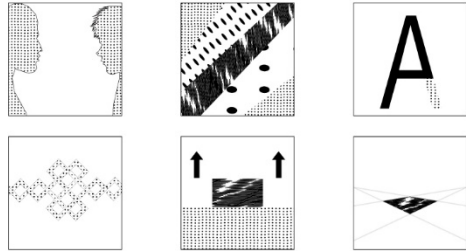


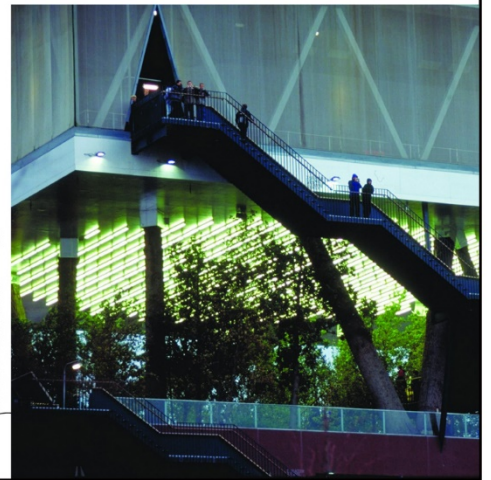
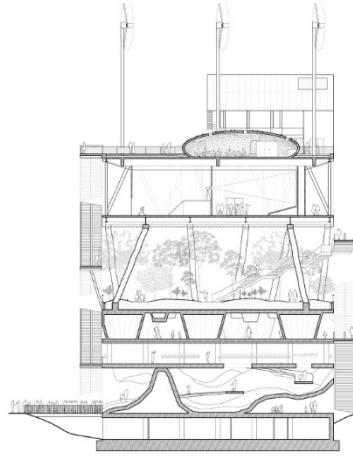
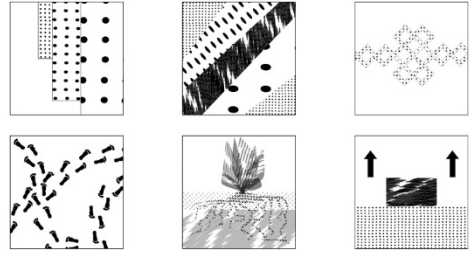
図 199 建築評価シート

コメント

階段が特徴的なパビリオン。異質な階層を外を周る階段が繋ぎ、視覚的な統一を保たせている。ここではむしろ、外階段での移動が主空間であり、流動的で一時的な移動空間を繰り返し反復させることで、各層は安定した振る舞いを可能にする。



No-11
 名称 Expo 2000
 国 ドイツ
 年度 2000
 用途 Pavillion
 設計者 MVRDV



コメント

既存建物に取り付けられた大階段が人びとを大らかに包むような空間を生んでいる。上へ長く伸びる階段の平面的しなやかさは裏腹に、それを支える部材数の多さは断面的な緊張感を生んでいる。踏面の位置をずらすことでリズムが生まれている。



No-12
 名称 The Stairs to Kriterion
 国 オランダ
 年度 2016
 用途 展示
 設計者 MVRDV

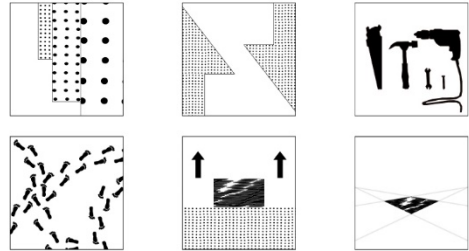


図 200 建築評価シート

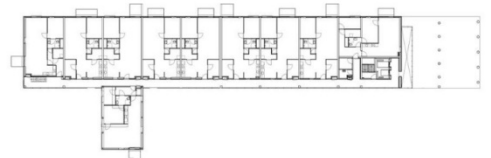
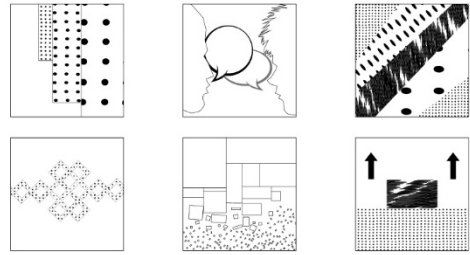
コメント

居室部分がキャンティで飛び出ているのが特徴的な建物。片面では安定した襷のような表面を形作っており、その動きのある表面はキャンティされることで床下の駐車場他の何でもない平面との出会いを可能にし、視線はその間を行ったり来たりする。



No-13

名称 WoZoCo
国 オランダ
年度 1997
用途 集合住宅
設計者 MVRDV



コメント

反復するヴォールト屋根はリズムをもち、軽快な印象を与えている。オリジナルとは室内の使用方法が異なるが、その雰囲気は感じることができる。



No-14

名称 今治市伊藤豊雄建築ミュージアム シルバーハット
国 日本
年度 2011
用途 展示施設
設計者 伊藤豊雄

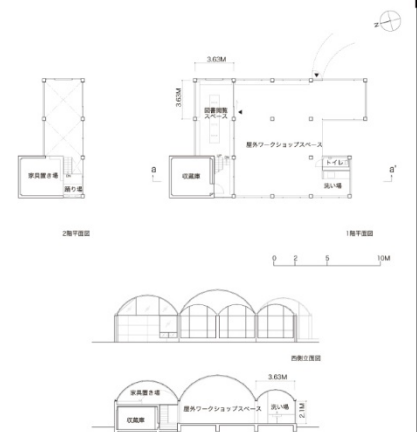
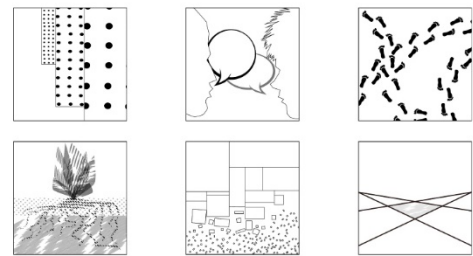


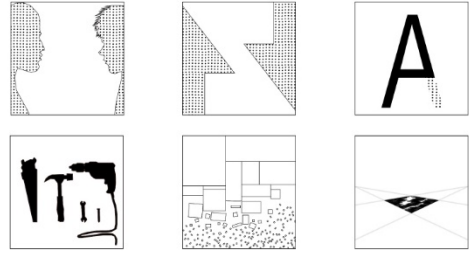
図 201 建築評価シート

コメント

庭部分に単管パイプによるテラスを導入することで、前面道路からの視線を遮断しつつ、自由な外部の使いこなしを可能にする。敷地半分が内部で半分が外部という構成に反復する単管で操作を加えることで、敷地前のミラーさえもが構成の一部となる。



No-15
 名称 daita2019
 国 日本
 年度 2019
 用途 住宅
 設計者 山田紗子



コメント

鉄骨梁に木部材を乗っけることで、上下の構造の分かれた空間を構成している。木々の高さへ視線を合わせることで、住宅が寄りかかる自然と目が合うその瞬間、ピロティの持つ軽快さはそのまま拡張され、自らを包み込む自然との対話が始まる。



No-16
 名称 森のピロティ
 国 日本
 年度 2014
 用途 住宅
 設計者 長谷川豪

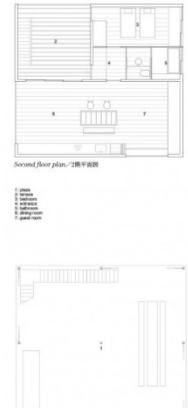
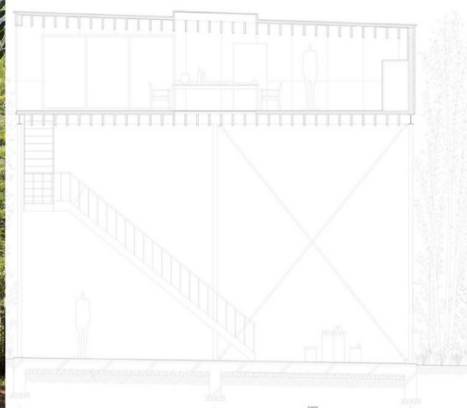
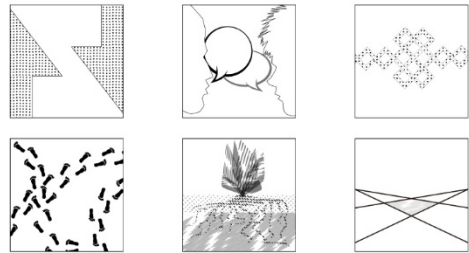


図 202 建築評価シート

3-4 出会われる空間

以上、調査から抽出できる空間的性質を建築に当てはめ評価した(図 188-202)。「出会われる空間」とは前述の空間的性質をもちながら存在する空間であり、それは可動を前提とするものではなく、他の存在とともにあることで変化を受け入れ、時間的なゆらぎを獲得するものとするができる。その変化を受け入れる姿勢はおおらかな空間をつくり、それが仮設性として捉えられることで、布野が述べたように均質性への抵抗を可能とする。これらから、序章にて引用した雨やどりという一時的な現象に見る出会いとは、他者を受け入れることで、受け入れられる相互作用の下のおおらかな関係を構築するその瞬間を詠ったものだとも言えるが、出会われる空間とはそのような他の存在を受け入れるおおらかさを持つことで、一見すると勝手気ままな使いこなしを生み出す受け皿となるのである。それはフィールド調査で確認した、ボズユイの骨組みと天幕地の隙間に意味を見出す行為や C 門広場の既存敷地へのインフォーマルな専有のような個人的な意味付けとともにあり、建築以下身体以上の間にある人-もの-場所の連関を通して場所の潜在的有用性を見出す中で、小さな使いこなしを生み出すおおらかな場をもつものである。次章では、調査において獲得した空間的性質を志向することで他の存在とともにある「出会われる空間」を設計し、ケーススタディとして提示する。

4章 設計

4-1 敷地概要とプログラム

敷地は東京都八王子市南大沢2丁目の一角で、住宅や会社、商業店舗などが点在する谷戸地に位置する。最寄り駅は京王線南大沢駅で、駅周辺には内井昭蔵建築設計事務所がマスターアーキテクトを担当したベルコリーヌ南大沢や首都大学東京、三井アウトレットモールなどがあり、駅周辺は地元民に加え学生や買い物客が訪れる。駅周辺から東の住宅街に向かうところに敷地は位置し、谷戸地形を形作る駅側の丘陵の麓にある(図203)。敷地のある谷戸は清水入谷戸と呼ばれる。敷地西側の丘陵を上った先には戸建ての住宅地があり、東には住宅や会社、店舗などが点在している。1980年の空撮写真から分かるように、敷地のある谷戸は古くは田園風景が広がっていたが、多摩ニュータウンの開発と共にそれらの多くは失われている(図204)。しかし、敷地が位置する南大沢駅周辺では現在でも都心に比べ多くの緑に触れることができ、1つの特徴といえる⁹⁸。敷地周辺の谷戸地形を把握するために断面図採取を行った(図205)。

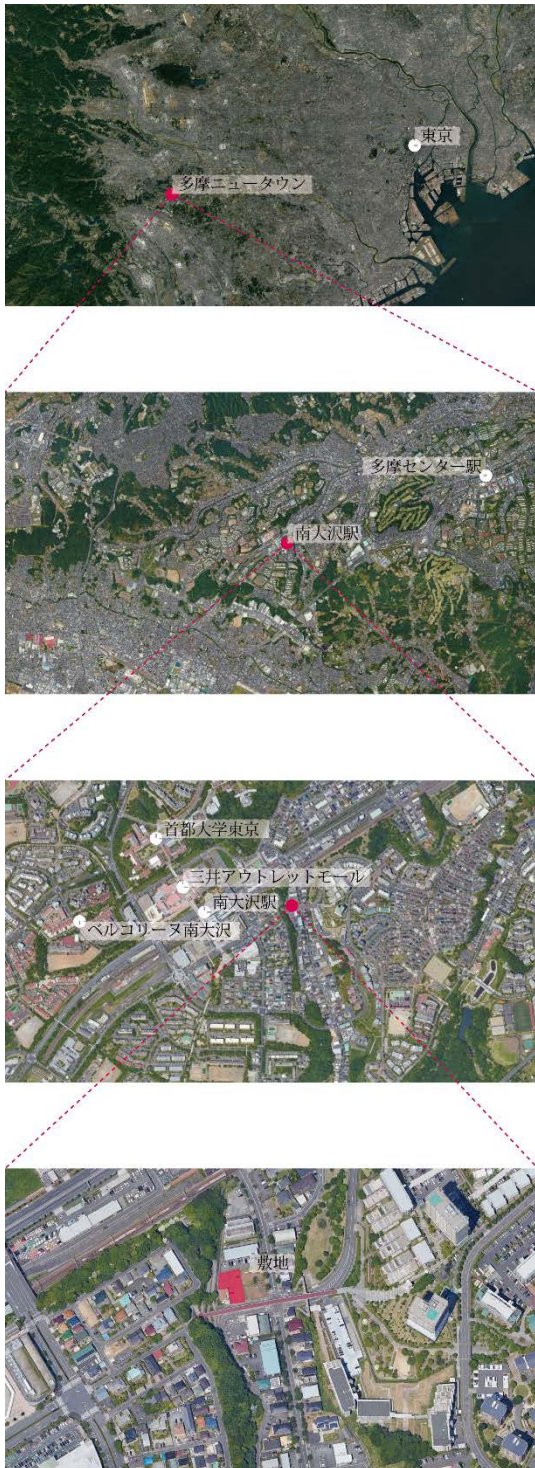


図 203 敷地

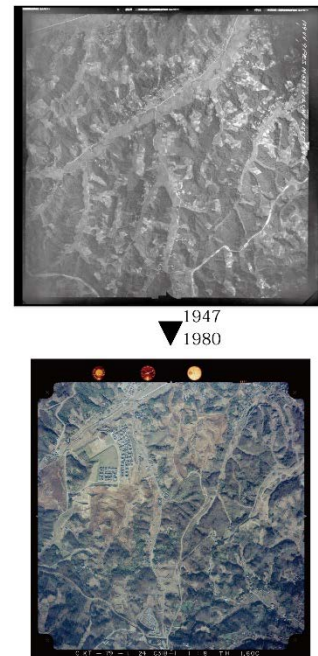
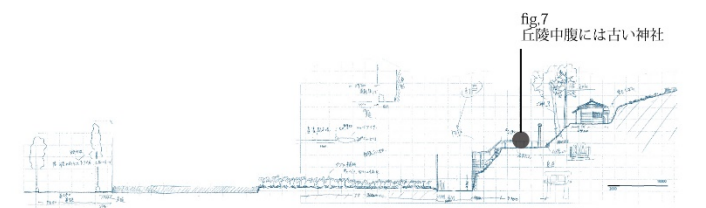
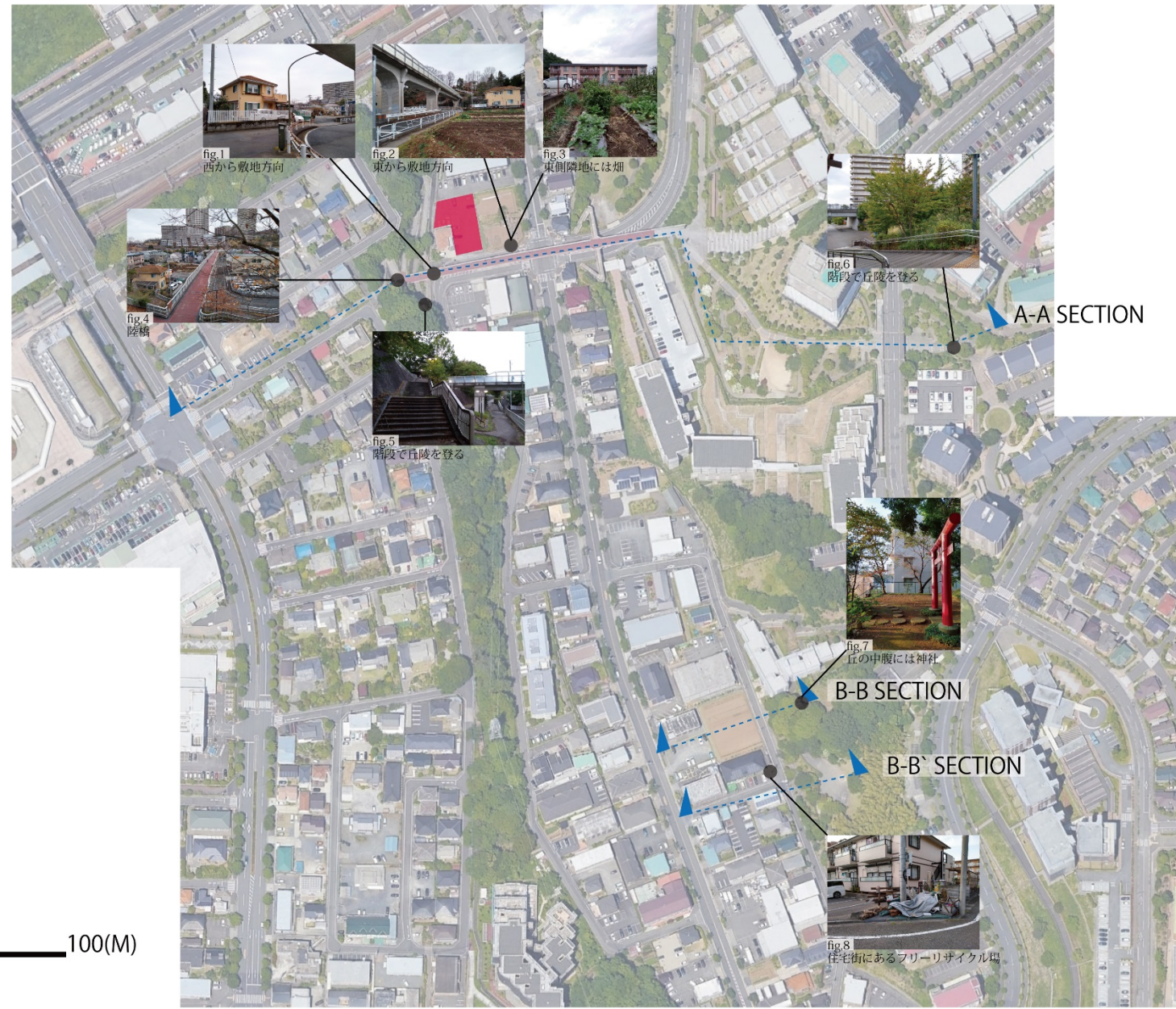
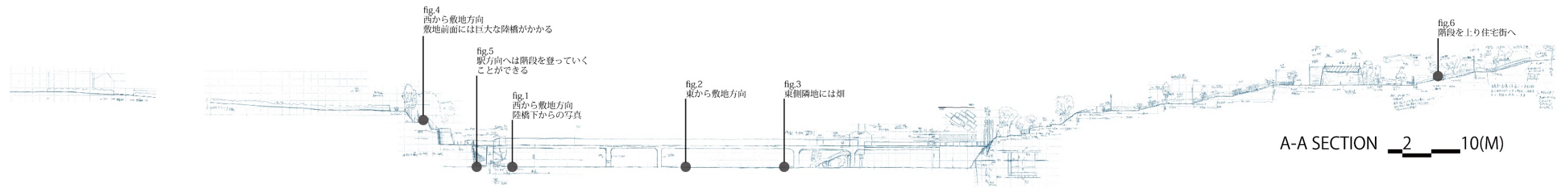
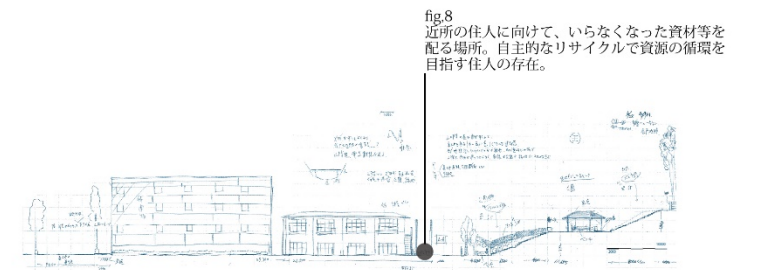


図 204 敷地周辺空撮写真 出典 国土地理院

⁹⁸多摩ニュータウン地域再生ガイドライン p20 東京都都市整備局



B-B SECTION 1/2000



B-B' SECTION 1/2000

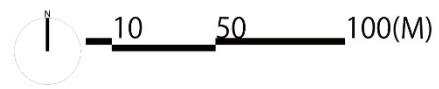


図 205 敷地周辺地区のサーベイ

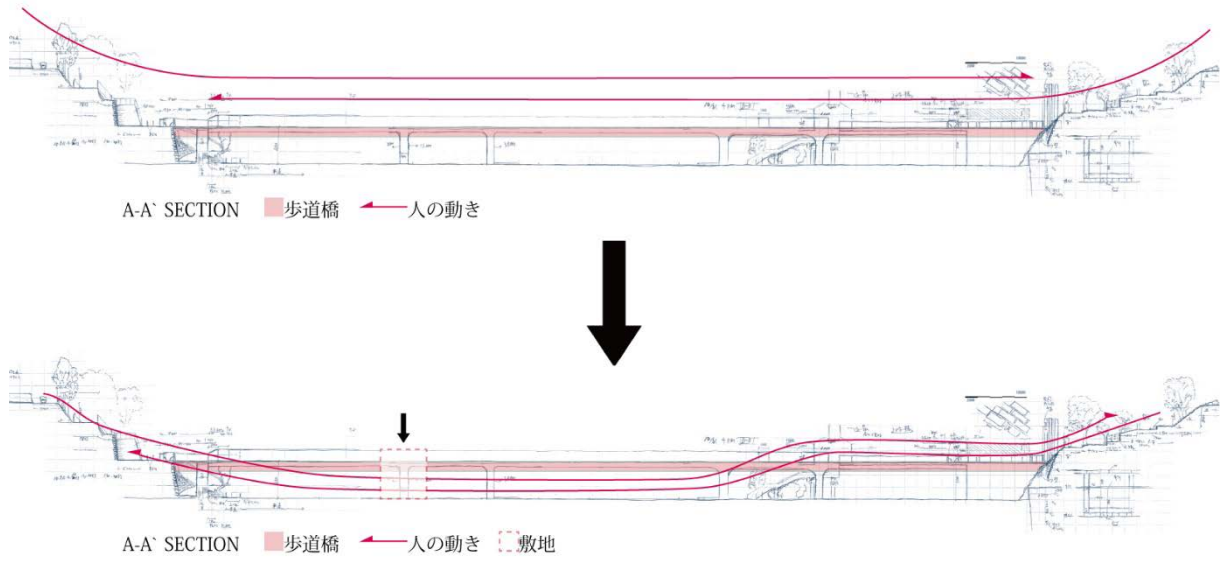


図 206 通勤通学の動線としてある歩道橋

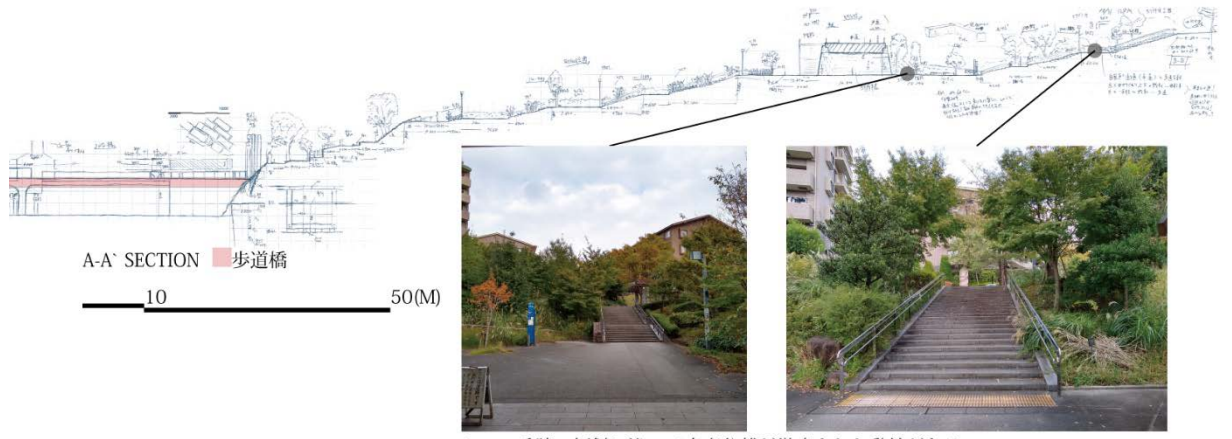


fig.1 丘陵の傾斜に沿って歩車分離が徹底された動線がある

図 207 東側丘陵地帯の歩道

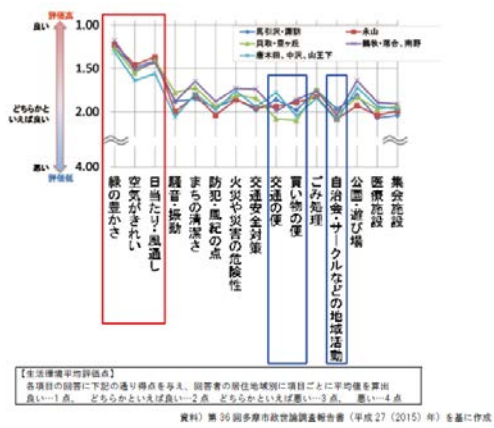


図 208 多摩ニュータウンの生活環境評価
地域活動の創出が望まれている。

敷地の東側隣地には畑があり、西には住居がある(図205)。敷地周辺のサーベイにより、谷戸を繋ぐ歩道橋があることで丘陵の中腹を境に上下にかけて分節があることが分かった(図206)。この歩道橋は、南大沢駅に通勤通学する多くの人が使用するもので、大部分は谷戸に下りることなく日常を過ごす。多摩ニュータウンではこのような歩車分離の動線計画による安心安全な歩道があり、敷地周辺では丘陵の傾斜に沿ったなだらかな坂道が続く(図207)。

東京都都市整備局が出している多摩ニュータウン再生ガイドラインによると、多摩ニュータウン居住者の高齢化に伴うコミュニティ活動活発化への要望があることが分かる(図208)。これらから、敷地におけるプログラムを商業店舗と休憩所

が一体となった施設とし、丘陵部と谷戸の間に新たな地域の結節点を構築することを目指す。商業店舗には本屋とギャラリーが入る。それぞれの店舗では、敷地を利用しながらワークショップを開催することが期待され、それにより市民参加を可能にした地域活動をつくりだす。また休憩所が併設されることで、歩道橋を行き来する人々に開かれた場所をつくる。それにより、歩道橋により分節された丘陵地帯の動線のありかたが徐々に変わっていくことが期待できる(図206)。

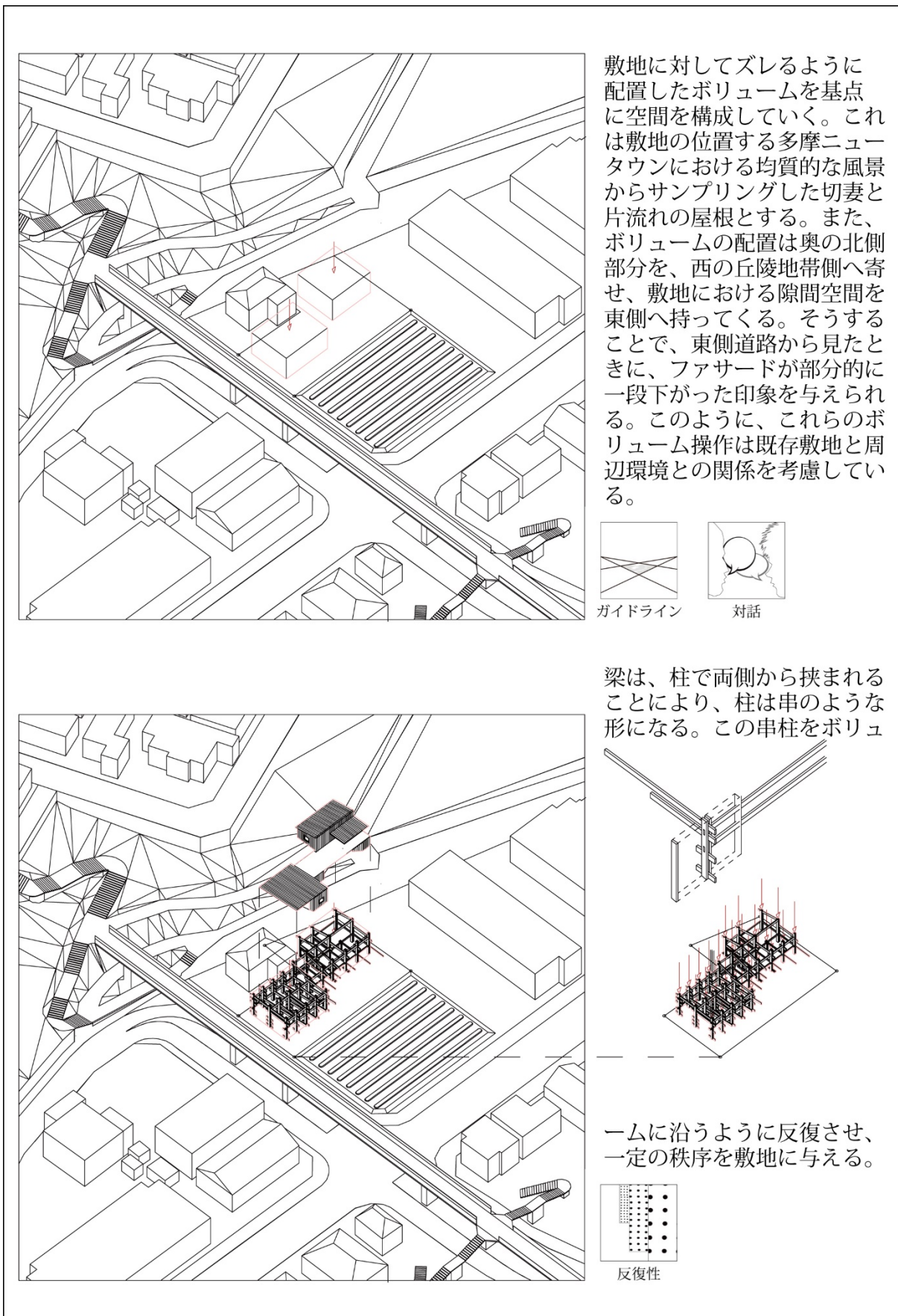


図 209 建築構成ダイアグラム

串柱を敷地における既存構成要素と考え、これに対してまとわりつくように単管パイプをかけることで、分解過程を取り入れる建築にする。単管パイプや足場板、安全鋼板などの素材でつくられる二次的な平面によるスキップフロアは、分解可能性をもつことで軽いイメージをもつが、この危うさが、均質性への抵抗を可能とする。東側のファサードには、串柱の骨組みから飛び出るようにかけられた梁が連続し、隙間を生んでいる。この隙間に対してのアプローチの仕方は実践者に委ねられる。

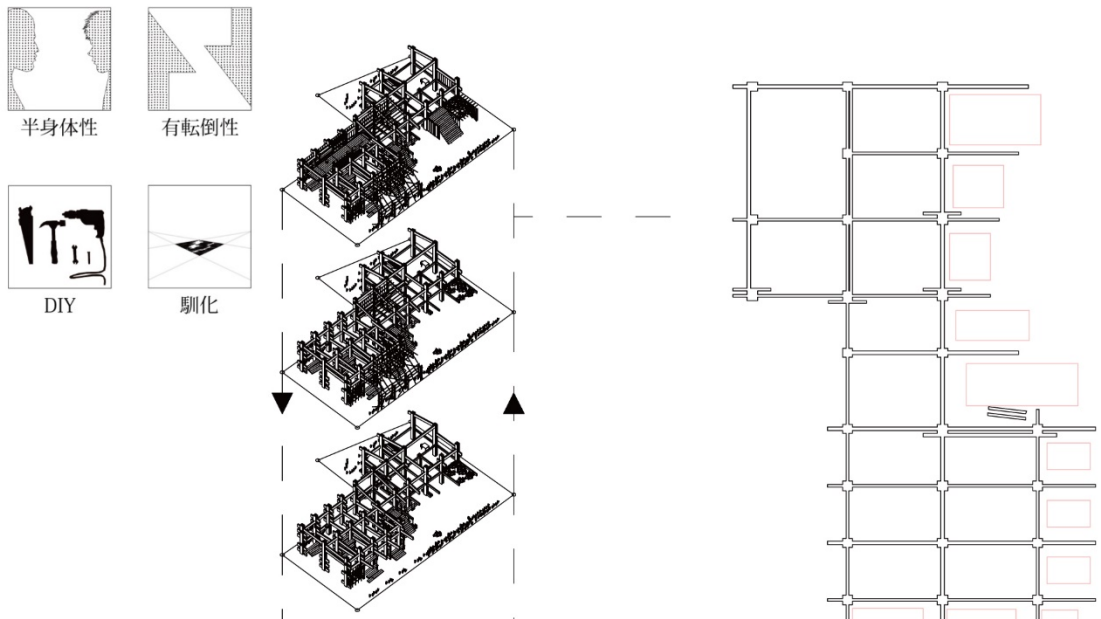


fig.1 串柱からなる骨組み平面モデル
隙間を計画することで二次的な立面の創出も期待できる。

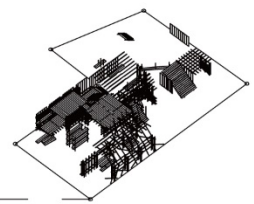
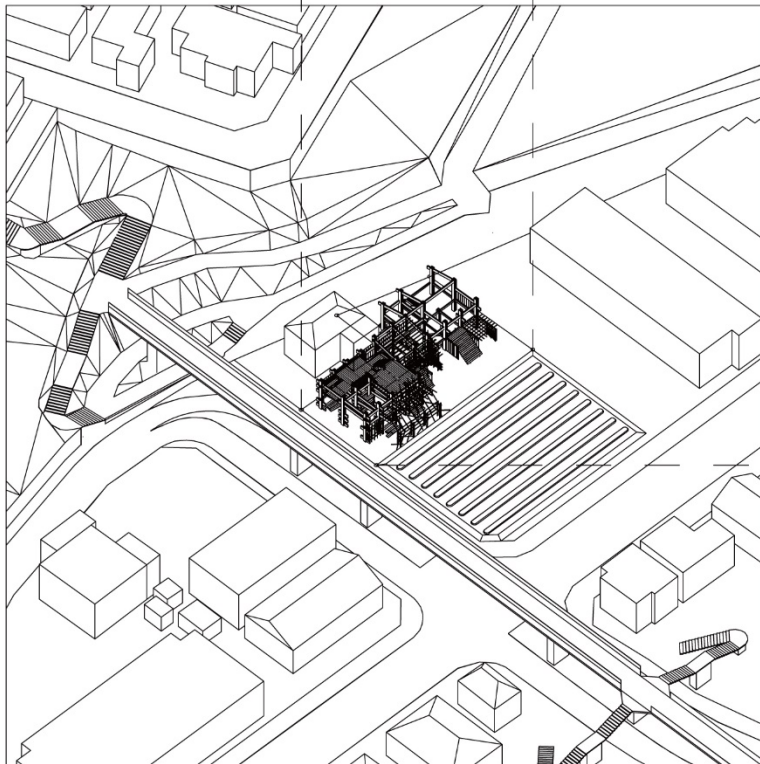
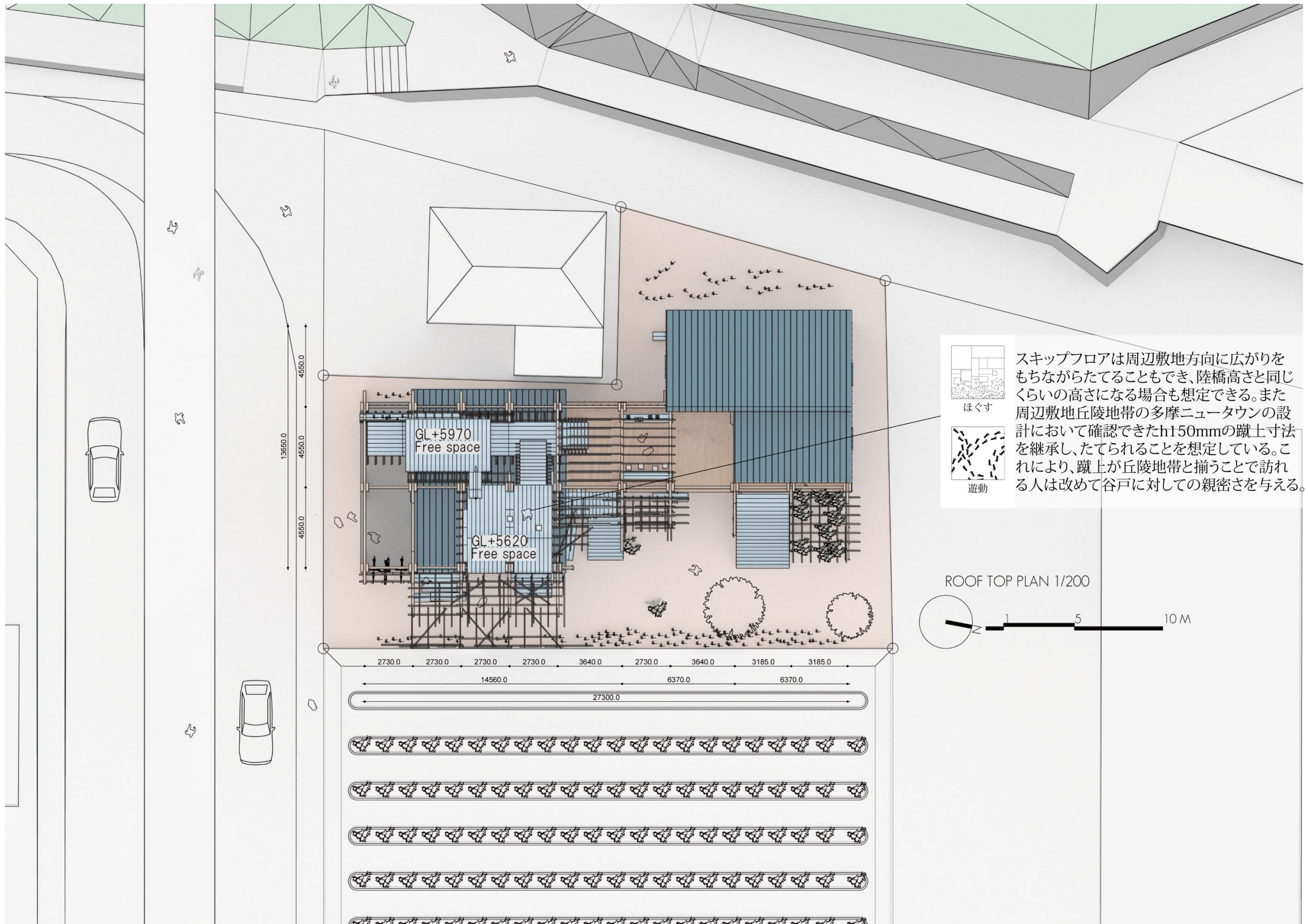


図 210 建築構成ダイアグラム



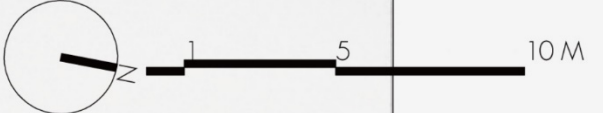
ほぐす



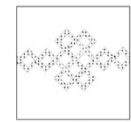
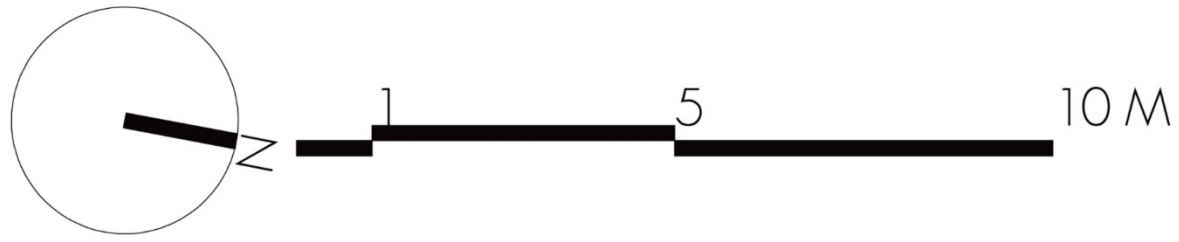
遊動

スキップフロアは周辺敷地方向に広がりをもちながらたてることもでき、陸橋高さと同じくらいの高さになる場合も想定できる。また周辺敷地丘陵地帯の多摩ニュータウンの設計において確認できたh150mmの蹴上寸法を継承し、たてられることを想定している。これにより、蹴上が丘陵地帯と揃うことで訪れる人は改めて谷戸に対しての親密さを与える。

ROOF TOP PLAN 1/200

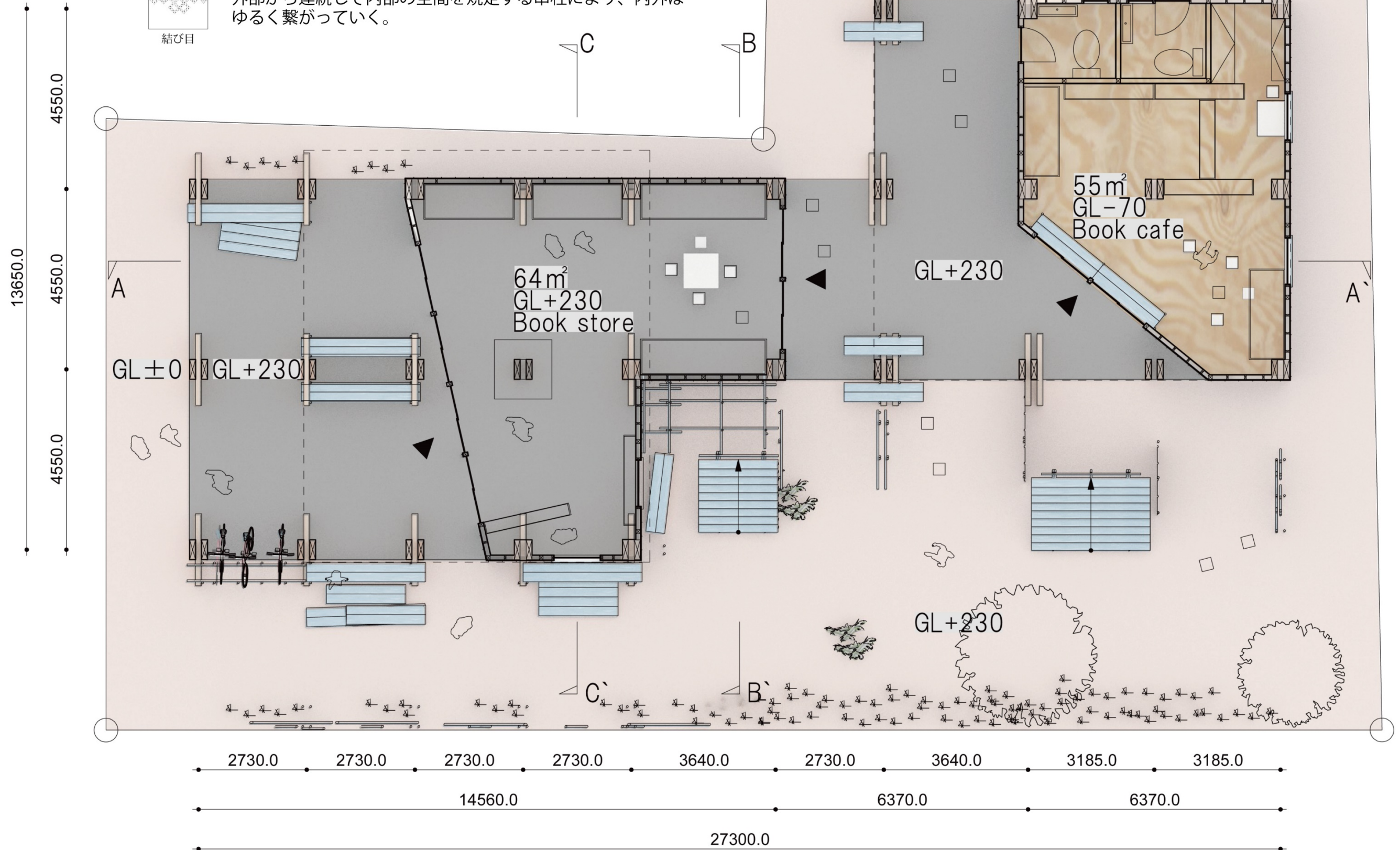


1F TOP PLAN 1/100

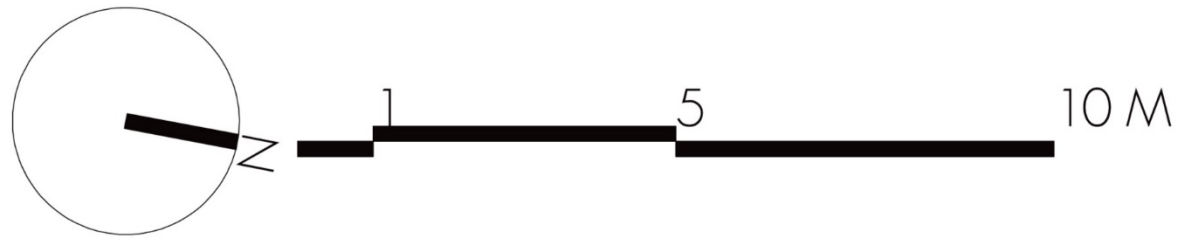


結び目

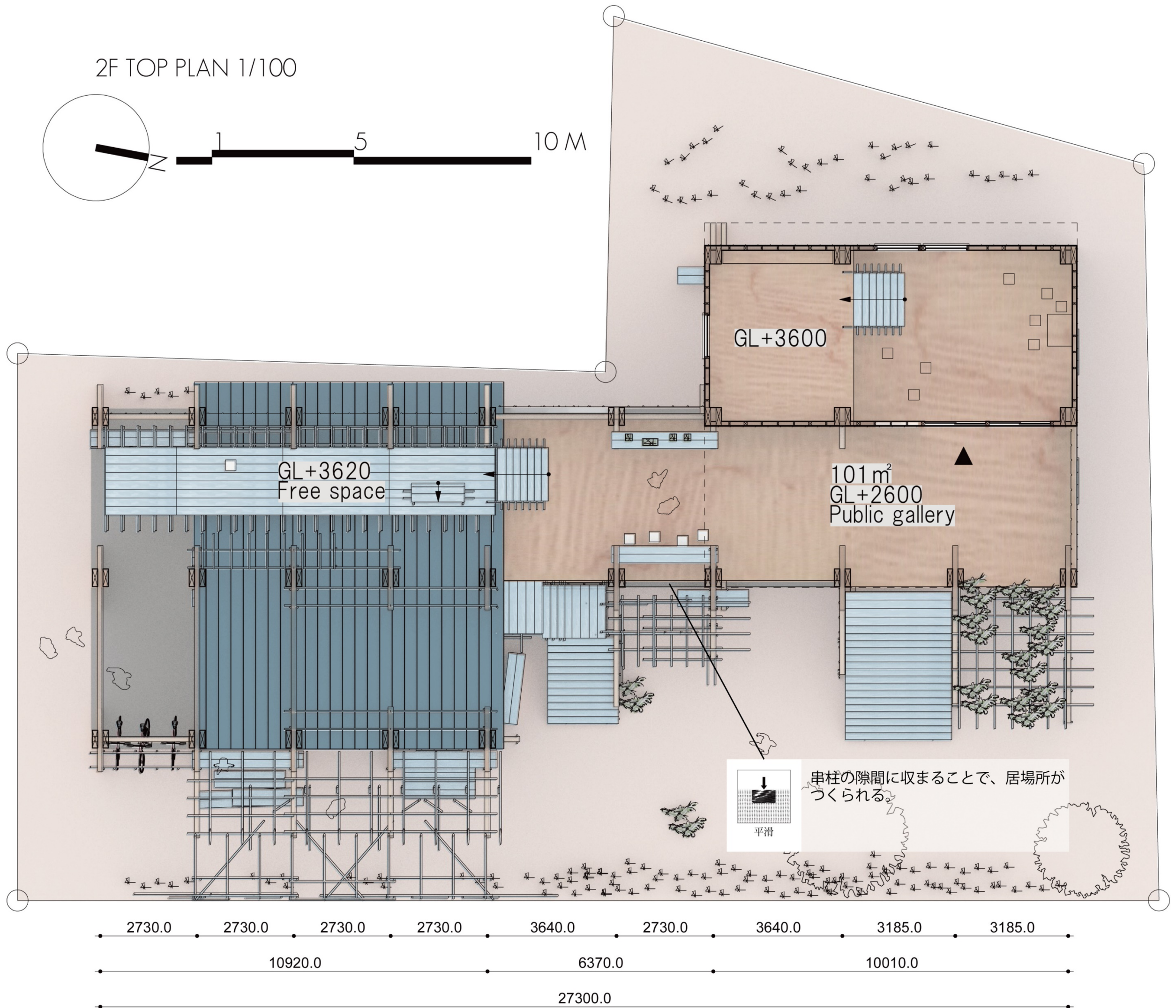
反復する骨組みは、内部の陳列棚の配置にも影響を与える。
外部から連続して内部の空間を規定する串柱により、内外はゆるく繋がっていく。

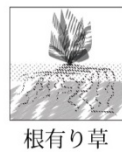
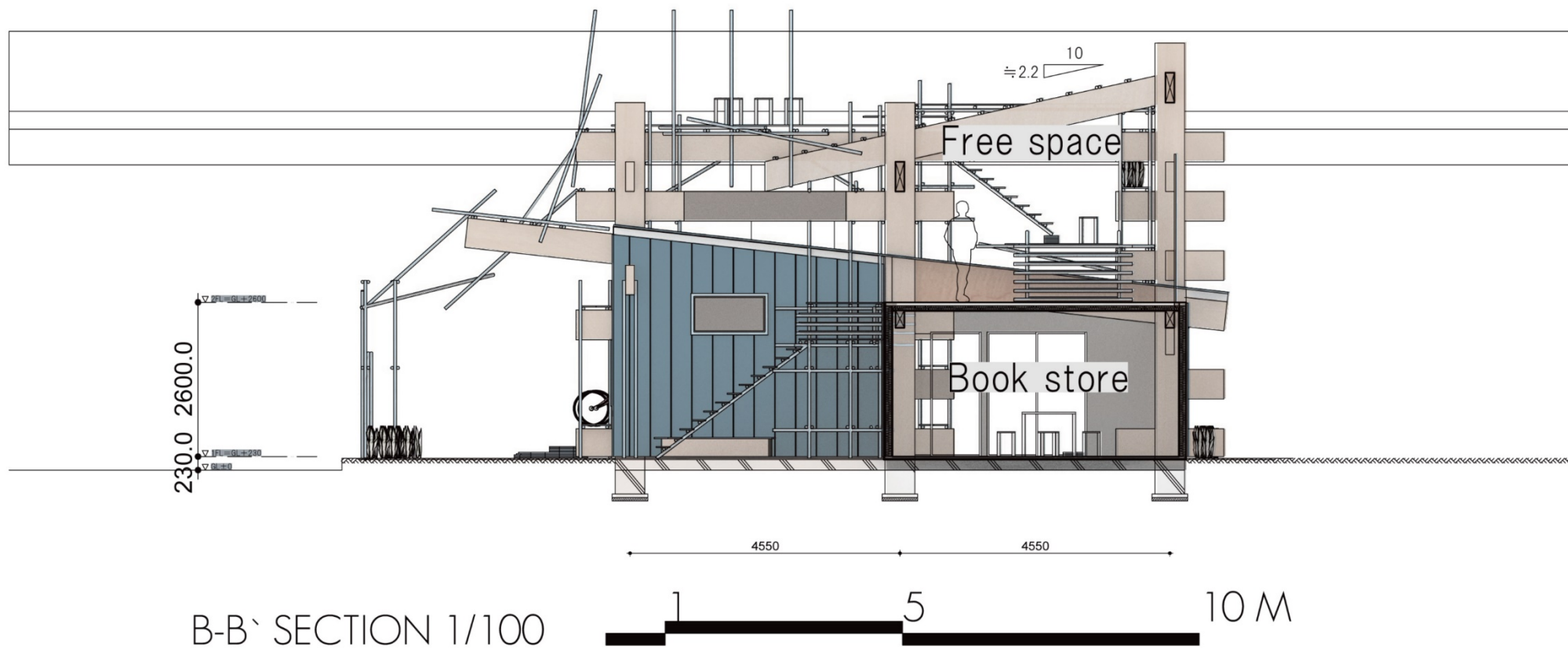


2F TOP PLAN 1/100

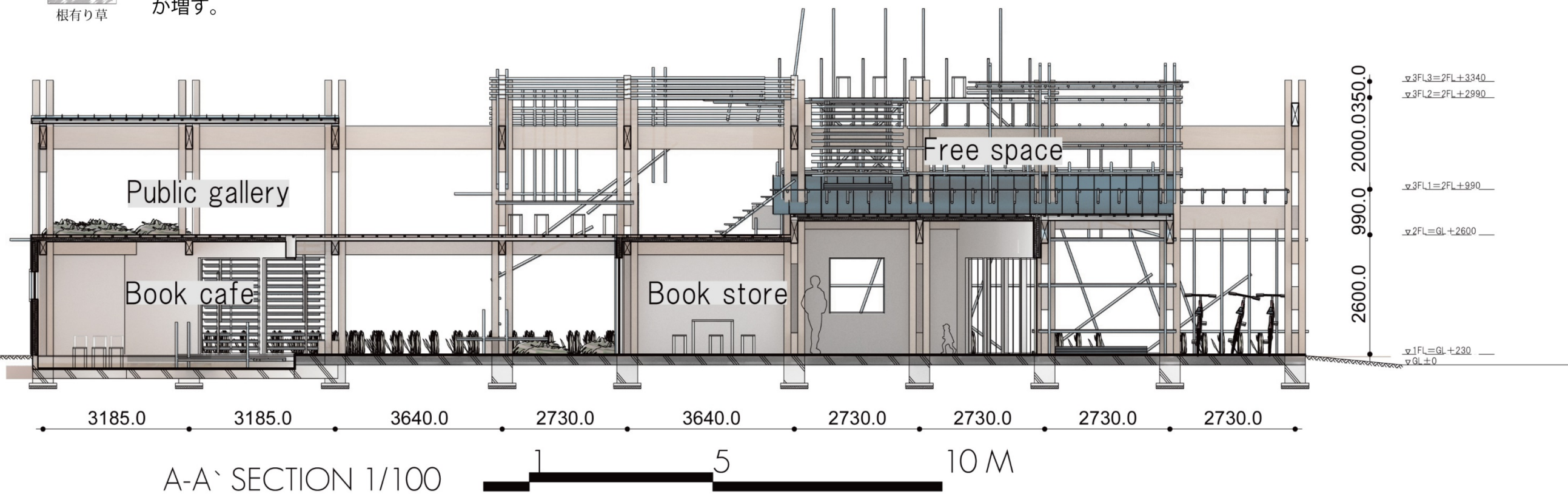


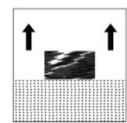
13650.0
4550.0
4550.0
4550.0





骨組みに単管パイプが絡まるようにして空間が作られる。
骨組みに対してアクションを起こすことで、居場所への愛着
が増す。

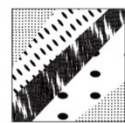




異形

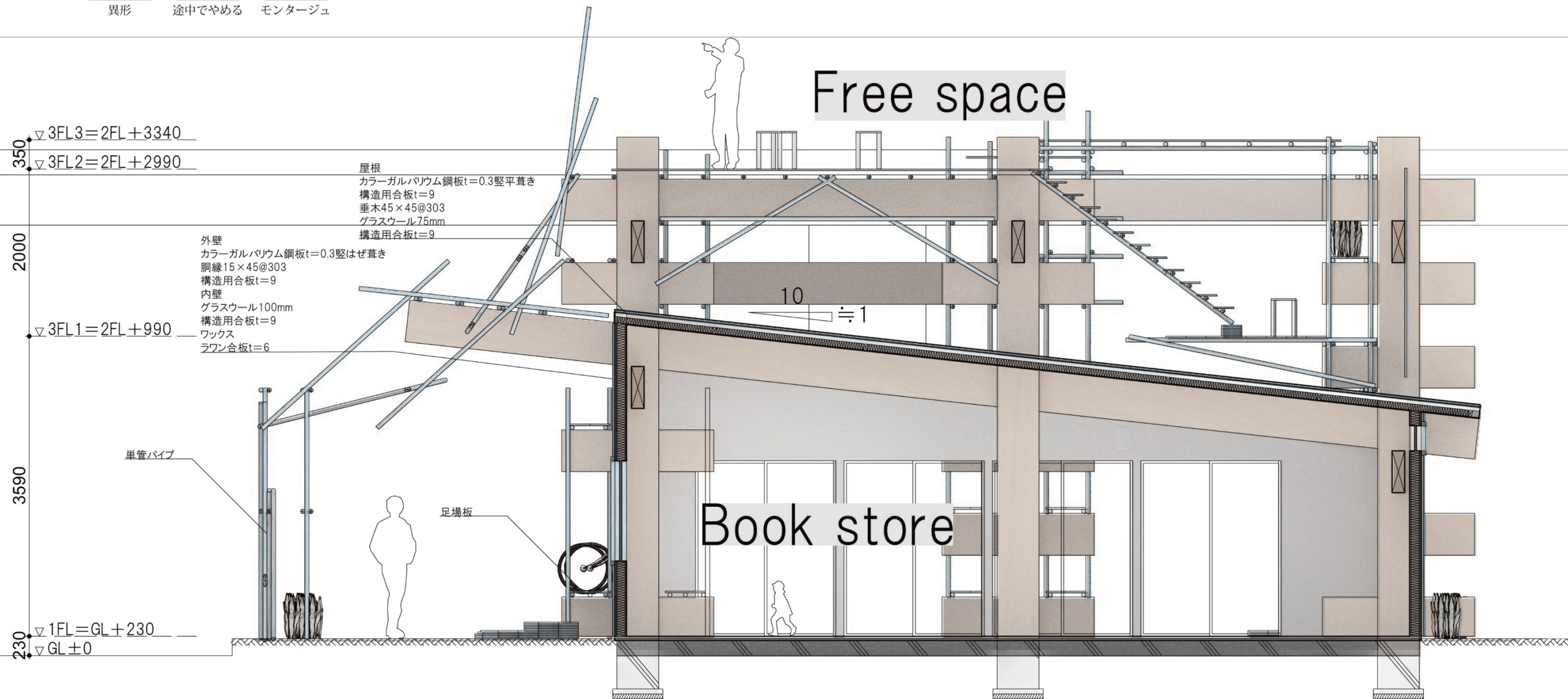


途中でやめる



モンタージュ

ファサードを構成する単管パイプは屋根上部の単管パイプと繋がる勢いにつくられることもあるだろう。中途半端なところには、その半端さを許容するおらかな空間が生まれる。



C-C` SECTION 1/50



図 211 敷地東側からのパース

単管パイプによる2次的なファサードの構築により、静的な骨組みに対する動的な揺らぎを与えることで、場所性を獲得する。



図 212 3FL1 パース

串柱にかかる単管パイプで新たな平面を構成することで、秩序付けられた骨組みに対してズレるスキップフロアの構築を可能とする。

終章 総括

本研究は仮設的な空間への興味から、仮設性とアンダー・コミュニケーションの繋がりを指摘することで均質的空間への抵抗を見出し、その中で出会われる空間とは何かを探ってきた。

筆者の故郷多摩ニュータウンでは日々の暮らしに変化があまりないと思うことが多く、変化を欲するという視点から仮設性への興味の背景が形成されたわけだが、本研究で扱ってきた空間はどれも、動的で不均質でいびつな様相を呈するものであり、刺激的で大変興味深い経験になった。フィールドワークという手法を扱う人類学的視点から、空間の仮設性とは何かをまとめた資料というのは少なく、本研究ではその点、多木浩二や布野修司の言説から、イーファー・トゥアンやエドワード・レルフ、果てはレヴィ＝ストロースの言説に繋げることで多面的に仮設性について扱うことができた。またその中で、分解を基点に行われる活動を示すことができ、分解空間と呼べる空間の端部を示せたはずである。本研究が、建築以下身体以上の存在への興味の受け皿となることを期待して、結びとする。

参考文献

- 神話と意味 クロード・レヴィ＝ストロース みすず書房
1996
- ライズ ティム・インゴルド 左右社 2014
- メイキング ティム・インゴルド 左右社 2017
- 運ぶ人の人類学 川田順三 岩波新書 2014
- 社会空間の人類学 西井涼子・田辺繁治編 世界思想社 2006
- 「生」の人類学 田辺繁治 岩波書店 2010
- 霊媒のいる街 福浦一男 春風社 2016
- 天幕 トーボー・フェーガー エス・ピー・エス出版 1985
- 暴力と輝き アルフォンソ・リングス 水声社 2019
- 変形する身体 アルフォンソ・リングス 水声社 2015
- 何も共有しない者たちの共同体 アルフォンソ・リングス 洛
北出版 2006
- 非-場所 マルク・オジェ 水声社 2017
- 分解の哲学 藤原辰史 青土社 2019
- ノマドのユートピア ルネ・シェレール 松籟社 1998
- 複数性のエコロジー 篠原雅武 以文社 2016
- ハイデガー「存在と時間」の構築 木田元 岩波現代文庫 2000
- 存在と時間 上 マルティン・ハイデッガー ちくま学芸文庫
1994
- ハイデガーの建築論 中村貴志 中央公論美術出版 2008
- 構造と解釈 渡邊二郎 ちくま学芸文庫 1994
- 空間の経験 イーファー・トゥアン ちくま学芸文庫 1993
- 場所の現象学 エドワード・レルフ ちくま学芸文庫 1999
- 方丈記 鴨長明 ちくま学芸文庫 2011
- 生きられた家 新訂版 多木浩二 青土社 2019
- 廃墟とバラック 布野修司 彰国社 1998
- 動く大地、住まいのかたち 中谷礼人 岩波書店 2017
- 生きられたニュータウン 篠原雅武 青土社 2015
- バベル 岡啓輔 筑摩書房 2018
- 住宅特集 2018/5 新建築

謝辞

本修士論文/修士設計は私が芝浦工業大学大学院理工学研究科建設工学専攻修士課程在学中に清水郁郎教授のご指導のもと行った研究をまとめたものです。

本研究をまとめるにあたり、この場を借りて感謝を示したいと思います。

清水郁郎教授には、大学院の2年間大変お世話になりました。どこの馬の骨とも知らない私を研究室に迎えて下さって感謝しています。この2年間は大変濃いもので特に東南アジア、タイとラオスのフィールドワークにご一緒できたのは大変貴重な経験となりました。様々な縁があり清水研究室で過ごすことになりましたが、人類学的手法を駆使し、泥臭く、手足で稼ぐ姿勢には学ぶところが多かったです。今は無き研究室の日本語ホームページに書いてあった、「見る前に飛べ」という言葉ですが、本当に研究室にぴったりの言葉だと今は理解しております。ご迷惑をおかけしたこともあるかと思いますが、2年間ありがとうございました。副査を受けて下さった谷口大造教授にも、大変お世話になりました。谷口教授は忘れてのことと思いますが、教授が私に言った言葉で、「呼ばれた座敷にはあがる」という言葉があり、今でも心に残っています。谷口教授からはどうしても意味論に寄りかちな思考をものの方に寄せて考えることを学びました。ありがとうございました。また副査を受けて下さった原田真宏教授にも感謝申し上げます。原田教授には研究を進めるにあたり、日本の住居のもつ仮設性への接続を考えた方がいいと言われ、方丈記を紹介いただきました。大変感謝しております。またキルギスでの天幕住居調査を行うにあたって、フィールドの紹介をいただいた四国学院大学の吉田世津子教授にも感謝申し上げます。

研究室の方々にもこの場を借りて感謝申し上げます。同期の二人、北浦さんとトンエクにはリサーチ中から何からお世話になりました。同期の方々や研究室の学生達と、動物の糞を踏みまくりながら行った慣習家屋実測調査は一生の思い出です。ありがとうございました。

最後に、生活の様々な場面で支えてくれた家族に感謝申し上げます。新宿にて一人暮らしをしてもう3年目ですが、実家に帰るたびに心地よさを存分に感じています。いつか、建築を通して多摩ニュータウンに貢献できるようになるまで見届けていただけたら幸いです。以上、謝辞とさせていただきます。2020/02/06